故

845
SA45
31

續獨逸文法講話

佐久間政一著

東京郁文堂書店刊行1933年

603
163

序

本書は、前著『獨逸文法講話』が、詞論を目的として、各品詞の職能・用法等を解說したるに對して、文章論を中心として彼土の文章の構築・組織を檢討し、かねて詞論中未だ前著に於て說かれざりし部分を採つて說明し、かくして前著と相應じて、獨逸文典の智識とそれの運用とに於て、十全ならしめんことを企圖して居る。

この目的のためには、著者は下揭の諸書を涉獵したが、編著の目的が、前著に於けると同じく、邦人學徒の研修に資することにあつて、譯述乃至紹介には存しないのであるから、敍述の方法・材料の選擇・說明の繁簡は、全く自家の見解に據つた。從つてこれらの書籍が詳說する個所も、邦人に左程必要ならざるものは、或は極く之を暗示し、或は全くこれに觸れなかつたが、これと反對に、諸書のほとんど注意せざるところでも、邦人の理解力が困難とするものに就いては、あまたの行に亘つて縷說することを忌まなかつた。從つて組織の立て方、敍說の方法に於ては全く獨自的なものの存するのは、怪しむを須ゐない。

參考書目

Behaghel, Deutsche Satzlehre (1927)
Bennewitz, Schwierigkeiten unserer Sprache (1920)
Blatz, Neuhochdeutsche Grammatik (1918)
Brümmer, Beispiel-Grammatik (1876)
Curme, A Grammar of German Language (1922)
Günther, Handbuch der deutschen Sprachlehre für Lehrerbildungsanstalten (1918)
Gurcke, Deutsche Schulgrammatik (1906)
〃 , Übungsbuch zu deutscher Schulgrammatik (1916)
Heyse, Deutsche Grammatik (1923)
Jagemann, German Syntax (?)

Kern, Grundriß der deutschen Satzlehre (?)
Krause-Nerger, Deutsche Grammatik (1907)
Kutzsche, Übungen im richtigen und gefälligen Gedankenausdrucke (1910)
Lippert, Lehrbuch der deutschen Sprache für Lehrerbildungsanstalten. (1921)
Mensing, Deutsche Grammatik für Höhere Schulen (1924)
Probst, Deutsche Redelehre (1920)
Sanders, Wörterbuch der Hauptschwierigkeiten in der deutschen Sprache (1908)
Schelle, Grammatik der deutschen Sprache für Ausländer (1903)
Sütterlin, Die deutsche Sprache der Gegenwart (1907)
Überlacker, Richtig Deusch (1928)
Wasserzieher, Führer durch die deutsche Sprache (1926)
Weise, Deutsche Sprach- und Stillehre (1923)
Weise, Musterbeispiele zur deutschen Stillehre (1914)
Wesselv, Grammatisch-Stilistisches Wörterbuch der deutschen Sprache (1906)
Wetzel, Die deutsche Sprache (1914)
Wustmann, Allerhand Sprachdummheiten (1908)

文例として引用した古典のものは、Brümmer その他にその供給を仰いだが、近代及現代の作家からの諸例は、Curme より借用せる若干のものを除いては、著者が日常讀誦の際に、摘錄したものに係るけれど、繁を厭ふて、書名を略することにした。

なほ邦文のものでは、青木先生の諸著作と、片山正雄氏の『文法辭典』とによつて、屢啓發されたことを附記する。

昭和八年八月十五日

仙臺に於て

佐久間政一識

目　次

總　說 … … … … … … … … … … 1

第一章　單文章 … … … … … … … 4

第一節　文章の主成分 … … … … … 4
1. 文章の主成分 —— 2. 主語 —— 3. 非人稱代名詞 —— 4. 論理上の主語 —— 5. 主語の省略 —— 6. 客語 —— 7. 定動詞 —— 8. 配置法 —— 9. 意味に依る文章の四大別 —— 10. 單一單文章 —— 11. 文章の副成分。

第二節　文章の副成分（其一、附加語） 26
12. 附加語の種類 —— 13. 形容詞的附加語の取扱ひ方 —— 14. 名詞的附加語の取扱ひ方の一〔二格〕 —— 15. 名詞的附加語の取扱ひ方の二〔前置詞を有するもの〕 —— 16. 名詞的附加語の取扱ひ方の三〔同格〕 —— 17. 副詞 —— 18. 不定法 —— 19. 冠詞 —— 20. 冠詞の用法。

第三節　文章の副成分（其二、補足語） 62
21. 補足語の種類 —— 22. 一個の補足語を要求する動詞 —— 23. 二個の補足語を要求する動詞 —— 24. 非人稱動詞の補足語 —— 25 形容詞の補足語 —— 26. 動詞の補足語の位置 —— 27. 形容詞の補足語の位置 —— 28. 倒置法についての注意。

第四節　文章の副成分（其三、副詞的規定）… 87
29. 副詞的規定の種類 —— 30. 時の副詞的規定 —— 31. 處の副詞的規定 —— 32. 原因の副詞的規定 —— 33. 副詞的規定の位置 —— 34. 補足語と副詞的規定との排列の順序 —— 35. 倒置法の語次についての注意 —— 36. 否定の副詞 nicht の置きどころ —— 37. 肯定の副詞・否定の副詞とについて。

第二章　定動詞の數と人稱 … … 128

1. 序說——2. 定動詞の數——3. 主語が二つ以上の名詞から成れる場合——4. 同上の特殊の場合——5. 主語が分離接續詞にて連結されたる場合——6. 二つ以上の名詞が前置詞によつて結ばれたる場合——7. 集合名詞が主語たるとき——8. その他定動詞について注意すべき事項——9. 主語がいくつかの代名詞なるとき——10. 主語が und 以上の接續詞にて結ばれたる代名詞の場合——11. 客語名詞の數——12. 客語形容詞の用法上の注意。

第三章　單文章の解剖 … … … … 144

第四章　複合文章 … … … … … 155

第一節　對結文章 … … … … … 155

1. 複合文章の種類——2. 對結と附結——3. 接續詞なき複合文章——4. 接續詞を用ゐたる複合文章——5. 純粹對結接續詞を用ゐたるもの——6. 副詞的接續詞。

第二節　附結文章 … … … … … 174

7. 主文章と副文章——8. 副文章の三種類——9. 副文章の位置——10. 從屬用接續詞の用法——1) als, wenn, da, wie〔時〕——2) während, indem——3) nachdem, seitdem.——4) sobald als; kaum....., als.——5) sonst.——6) wie, als〔比較〕——7) weil, da, indem〔原因〕——8) Daß-Satz に就いて (kaum daß, ohne daß, nur daß, ungeachtet daß, doch daß, höchstens daß, es sei denn daß 等)、——9) Wenn-Satz に就いて (wenn anders, wenn gleich, wenn schon, wenn auch, wie wenn, als wenn, wenn nur)

第三節　關係文章 … … … … … 214

10. 關係文章の種類——11. 關係文章の概則——12. 關係代名詞の用法 (A. Der の用法——B. Welcher の用法——C. Wer の用法——D. Was の用法——E. 關係副詞の用法。

第四節　間接疑問文章 … … … … 247

13. 直接疑問文章と間接疑問文章——14. 間說說話文章の諸規則——15. 間接說話文章の時稱と主文章の時稱——16. 間接說話文章の話法についての一般法則——17. 間接說話文章の說話についての細則——18. 間接疑問文章の法則——19. 間接文章の動詞に基づく名詞に附屬する附加語文章の話法——20. 間接說話文章の話法と間接疑問文章の話法との相違。

第五章　副文章の配置と語次 … … 262

1. 敍說——2. 副文章の五種類 (A. 主語文章——B. 客語文章——C. 補足語文章——D. 附加語文章——E. 狀況語文章)——3. 主文章に對する副文章の位置——4. 主文章と副文章との關係についての二三の注意——5. 副文章の語次——6. 主文章を缺ける形の副文章。

第六章　副文の短縮 … … … … … 296

1. 副文章の三大別——2. 副文の短縮——3. 名詞文章の短縮——4. 形容詞文章の短縮——5. 副詞文章の短縮——6. 短縮についての二三の注意——7. 省略的短縮。

第七章　對結文章の收縮 … … … 321

1. 敍說——2. 收縮の諸別——3. 收縮を行はざる場合——4. 文章成分の重複——5. 文章成分の重複せる

ものと收縮文との區別。——6. 對結句に連れられたる副文間の收縮——7. 副文章と主文章の間の收縮——9. 收縮について注意すべき諸點。

第八章　省　略 … … … … … … 340

第九章　複雜複合文章 … … … … 349

1. 敍說——2. 複雜複合文章の三大別——3. 複雜對結文章——4. 複雜附結文章（連續文章——階段文章）5. 双對文章——6. 複雜複合文章の概觀。

第拾章　文の語勢 … … … … … 366

1. 敍說——2. 聲音の强度についての諸法則——3. 『對置』のための强調——4. 論弁上の强調——5. 聲音の高度について——6. 單文章に於ける聲音の高度についての法則——7. 對結文章に於ける聲音の高度についての法則——8. 附結文章に於ける聲音の高度についての法則——9 間文章を有する複合文章の讀み方——10. 双對文章の讀み方。

附　錄　文章論一覽表

總　說

1. 總括して文法（Grammatik [F.]）と稱せられるものは、本來三部から成るもので、音聲學（Lautlehre [F.]）、詞論（Wortlehre [F.]）、文章論（Satzlehre [F.]）がそれである。名稱の示す如く、最初のものは、音聲（發音）に就いての學で、第二のものは、名詞、形容詞、動詞、副詞等すべての品詞を、その取扱ひの對象とするものであるが、第三の文章論に至つて初めて、或纏まつた思想の表現であるところの文章（Satz [M.]）を取扱ふのであるから、前二者は、文章論の前提であるとも見られる。尤も文法の研究は、言語の有機的結合なる文章から初めて、次に文章を構成する要素たる詞論に入るべきだと說く學者もあり、この方法は事實大分行はれてはゐるけれど、他國人たるわれらは、矢張發音から詞論、詞論から文章論に入る方が、解しやすい。この意味では矢張前二者は、後者の階梯でなければならない。

【註】 I. 普通に（即ち狹義に）、文法と云はれるものは、主として詞論のみを指して居る。

【註】 II. もつと高尙なものには文體（Stil [M.]）の善惡適否を論ずる文體學（Stillehre [F.]）や、詩句（Vers [M.]）の構成・韻律・律格等を研究する韻律學（Metrik [F.], Verslehre [F.]）などがあるが、普通これらは文法の圈外に置かれてゐる。

2. 『文章論』とは、簡明に云へば、文章構造の學であるけれど、文章は旣に或思想的表象の正しく形づくられた表現であるから、文章論を眞に深く研究しようとする人は、勢ひかゝる表象の發生から、それが文章中に或方法で表現されるまでの長い過程をも顧みる必要がある。かうなると文章論は、心理學（Psychologie [F.]）や論理學（Logik [F.]）とも交涉を生じ、それら

と提携して進まねばならない。事實輓近の文法學は、ラテン語風の形式論に立ちかへらずに、言語心理學 (Sprachpsychologie [G.]) に依憑して、言語を精神過程の表現として研究しようとする傾向がある。此傾向は、たしかに一大進歩にはちがひないが、他國語のかうした研究は、表現心理を屢々異にするわれらにとりては、可成り困難である計りではなく、實用を主として、文章法を學ばうとする人々にとつては、勞して益なき場合が多からうと思ふ。

【註】此新らしい傾向に於て、われらは Wundt, Paul, Sütterlin, Harder, Voßler などの名前を思ひ出すのである。—— 例へば、Sütterlin; Die deutsche Sprache der Gegenwart や、Paul: Deutsche Grammatik (1916—1920) の如きは、この方面で屢擧げられる名著である。

3. 筆者が、この書で說かうとするのは、獨逸文章論の學的討究の報告でもなければ、彼土の一定の學者の所論の紹介でもない。例によつて、筆者の目的は、詞論とも見做すべき前著『獨逸文法講話』(郁文堂版) についで、その缺を補ひつつ、邦人學徒のために、獨逸文章論の大綱を示すことで、これを讀むことによつて、獨文和譯或は邦文獨譯に際して、或種の確信と熟達とが得らるることを希圖してゐるのであるから、諸家の言說中、われらに便利だと思はれるものは、いづれの派を問はず、これを集錄するし、時には筆者の私見をも加へる筈である。

4. さて文章論に於て取扱はるべきものと、詞論に於て說かるべきものとは、往々にして重複する事がある。これは詞論と文章論とを、同一冊子中に巧に交錯させなければ、避けがたき事柄である。本書でも、前著『獨逸文法講話』の所說と重複すべき個所は、成るべく簡約したけれど、文章構成の說明上、いかにしても避けがたいものは、別個の例に依つて說くつもりである。

5. 由來、文法として云へば、詞論だけが意味されて居るかのやうに考へられ、文章論はほとんど閑却されて居た。—— これは獨り我邦ばかりではなく、英米などにも、同一傾向があつたと見えて、これらの國々には、獨逸語の詞論を取り扱つた著書の饒多なるに比べて、その文章論を說いたものは、ほとんど見當らないと云つてもよい位に缺乏してゐる。—— 近來わが邦では、この偏頗な傾向が漸次に氣づかれて、一般文法書の一部には、何等かの方法で、文章論の概要なり一部なりを挿入する事になつたのは、斯學のために喜ぶべきである。言ふまでもなく、文章論をやつたからとて、直ちに作文が上手になるわけではないが、これによつて文章の構造と措辭の方法とについての明瞭な意識と堅固なる信念とが生ずることは爭はれない事實であるから、矢張詞論と、文章論とは相俟つて、全きものをつくるものと思はねばならぬ。

【註】英文で書いた文章論のなかでは、矢張 Curme, A Grammar of German Language の文章論の部分が、一番よからう。簡單なものならば、Jagemann, German Syntax があるが、あまり簡易すぎると思ふ。序でながら Curme を使用するなら、改定版 (1922) がよい。

6. 前に述べたとほり、われらにとつては、詞論は文章論の前提である。この故に本講話では、講述の必要上、未だ初めの部分にあつても、文例として、やゝ長い文章を引用することがあるが、それは普通の詞論の知識でもつて、充分に理解されるものに限られてゐる。これは、いづれの文章論も、用ゐてゐる方法で、敢えて怪しむには足りない筈である。

第　一　章

單　文　章

第　一　節

文章の主成分

（單一單文章）

1. 文章（Satz [M.]）の最も必要なる部分は、『主語』と『客語』とであつて、これを文章の主成分（Hauptbestandteil [M.], Hauptglied [N.]）と稱する。

主語（Subjekt [N.], Satzgegenstand [M.]）とは、それについて或事が述べられ、問はれ、或は要求される方の文章部分（Satzteil [M.]）であつて、生物ならば Wer?（誰れが？何か？）の問に對するものである。例へば Die Schülerin singt.（女生徒は歌ふ。）と云へば、これが問としては、『誰れが歌ふか？』を豫想し、Der Zucker ist süß.（砂糖は甘い。）と云へば、『何が甘いか？』と云ふ問を豫想することが出來る。又 Ein Lied wurde gesungen.（或歌が歌はれた。）と云へば、『何が歌はれたか？』と云ふ問を想定し得るのである。卽ち Die Schülerin, Der Zucker, Ein Lied が、各主語である。

客語（Prädikat [N.], Satzaussage [F.]）とは、主語について述べる文章成分で、主語が何をなすか？（Was tut das Subjekt?），何をなさるるか？（Was leidet das Subjekt?）何であるか？（Was ist das Subjekt?），如何なる狀態にあるか？（Wie ist das Subjekt?）の問に對するものである。卽ち Der Knabe läuft.（男の兒は走る。）と云へば『男の兒は何をしてゐるか？』の問に對するもの、

Der Hund wurde geschlagen.（犬はうたれた。）と云へば、『犬が何をなされたか？』の問に對するものであり、Die Erde ist ein Planet.（地球は遊星である。）と云へば、それは、『地球は何なりや？』の問に對するもの；Die Erde ist rund.（地球は丸い。）と云へば、『地球はどんな（形の）ものなりや？』の問に對するものであると考へられる。

【註】 Die Erde ist rund. の問として、Wie ist die Erde? と云ふ文章を想定し得るやうに、前掲 Der Zucker ist süß. と云ふ文章の問として、Wie ist der Zucker? と云ふ文章も想定し得る。然るときは、Was ist süß? と云ふ疑問文は、問が主語に關するもので、Wie ist der Zucker? は、問が客語に關するものと考へることが出來る。

2. 主語たり得るものは、主として、名詞、代名詞、及び名詞として用ゐられたる動詞、又は名詞として用ゐられたる形容詞等であるが、その他の品詞も、名詞のやうに取扱はれて、主語となることが出來る。

i) 名　詞：Der Mensch denkt.（人間は考へる。）

ii) 代名詞：Er denkt.（彼は考へる。）

iii) 名詞として用ゐられた動詞：[Das] Malen ist eine Kunst.（畫を描くことは一つの技術である。）

【註】 I. 不定法の前に zu (to) をつけたものも、主語たることが出來る：Zu malen ist eine Kunst.

【註】 II. 過去分詞も、そのまゝ主語として用ゐることもある：Aufgeschoben ist nicht aufgehoben.（延期は廢止ではない。）；aufgeschoben は aufschieben（延期する）の過去分詞；aufgehoben は aufheben（廢止する）の過去分詞である。

iv) 名詞として用ゐられたる形容詞：Der Blinde bettelt.（盲人が乞食をする。）

【註】 Der Blinde は形容詞 blind の名詞的用法で、der blinde Mann の義であることは、云ふまでもない。

然しまた形容詞をそのまゝ用ゐたのもある：Schwarz ist bei uns die Farbe der Trauer. (黑はわが國では悲哀の色である。)

v) 數詞：(A) 名詞となれるもの；Die Sieben ist eine heilige Zahl. (七は神聖な數である。) — (B) 數詞そのまゝでも使用される；Drei und zwei ist fünf (三と二とは五である。)

vi) 名詞的に用ゐられた副詞：Ein Heute ist besser als zwei Morgen. (一つの今日は、二つの明日よりもよい)；„Morgen" ist das Lieblingswort der Trägen. (「明日」は怠け者の好辭柄だ。)

【註】 上掲 zwei Morgen 及 „Morgen" の Morgen は、元來副詞たる morgen を、名詞として用ゐたものであるから、頭字が大きいのであつて、これと元來から名詞たる Morgen [M.] (朝) とを混同してはいけない。

vii) 名詞的に用ゐられた接續詞：Das Wenn ist ein schlimmes Wort. (『若しも』はわるい言葉だ。)；Indes ist eine Verkürzung von indessen. (Indes は indessen の短縮である。)

viii) 前置詞：Das Für und Wider wurde lange erwogen. (賛否は長い間考量された。)；Nach und aus regieren den Dativ. (Nach と aus とは三格を支配する。)

ix) 感動詞：Das Ach fand kein Ende. (嗚呼と云ふ聲が止まなかつた。)；Hurra ertönte von allen Seiten. (フラアと云ふ叫びが方々の側からひゞいた。)

3. 主語として使用さるるものには、別に非人稱代名詞なる „es" がある。これは (1) 天候・氣候；(2) 肉體的又は精神的の感じ；(3) 缺乏をあらはす動詞の主詞として使用されるものであることは、いづれの詞論にも說かれてゐる。この種のものについて注意すべきことは、いつも動詞が單數なることである。

i) Es regnet, schneit, donnert. (雨が降る、雪が降る、雷鳴がする)；Es ist heiß, dunkel, früh. (あつい、暗い、朝早い。)

ii) Es träumt mir, scheint mir, ist mir wohl. (私は夢見る、私には思はれる、私は快い。)；Es friert mich, jammert mich, schaudert mich. (私は寒い、悲しい、戰慄する。)

此種 (ii) のものに於て注目すべきものは、心理的に考へると、主語たるものが、三格・四格で云ひあらはされて居ることである。卽ち Es träumt mir. には別に、Ich träume. と云ふ語法があり、Es friert mich. には同じく別に、Ich friere. と云ふ語法があることによつてもわかるやうに、かかる非人稱的表現に於ては、心理上の主語 (das psychologische Subjekt) と文法上の主語 (das grammatische Subjekt) とは一致しない。かやうな不一致は、可成り多くの場合に發見される。卽ち文法上の主語と、心理上の主語とは、必ずしも一致することを要しないのである。

【註】 上掲 Es träumt mir. に對して、Ich träume. があるやうに、すべての此種の非人稱的表現に對して、人稱的表現があると考へてはならぬ。ある方が寧ろ稀である。又兩形があつても往々意味を異にする場合もある：Es hungert mich. (私は空腹だ)：Er hungert aus Geiz. (彼は吝嗇だから腹をへらしてゐる。)

iii) Es fehlt (mangelt, gebricht) mir an Geld. (私には金錢が缺乏する。)

この外にも非人稱主語の „es“ はある。それは存在をあらはす es gibt; わざと主格を示さざる動作又は狀態をあらはすもの：即ち Es klopft. (ノックの音がする); Es läutet. (鐘が鳴る。) 等であるが、詳細は、詞論の非人稱動詞の部又は拙著『文法講話』230—234 を見ればわかる。

【註】 Es gibt に於ける geben は、いつも三人稱單數であることに留意せよ。そして之に伴ふ格は、いつも四格である。

Es gibt einen Gott. (一神が存在する)。

4. 眞の主語即ち所謂論*1理上の主語 (das logische Subjekt) が文中にあつて、文頭には單に主語の居るべき位置を塡充するために、代名詞 „es“ が置かれることがある。これも文法上の主語であるが、前節の „es“ とは自ら別である。即ち前節の es に對しては、いつも定動詞が單數なるに對して、本節の動詞の數は、常に眞の主語のそれによるのである。

Es spielt das Kind. (=Das Kind spielt. 小兒が遊んでゐる。)

Es spielen die Kinder. (=Die Kinder spielen. 小兒達が遊んでゐる。)

Es brennt das Haus. (=Das Haus brennt. 家がやける。)

Es brennen Haus und Scheune. (=Haus und Scheune brennen. 家と穀倉が燃える。)

存在をあらはす es ist, es sind*2 の形も、此節に入れられる。即ちその動詞の數は、論理上の主語の數に依るのである。

Es ist eine Uhr in meiner Tasche. (=Eine Uhr ist in meiner Tasche. 私のポケットのなかに時計がある。)

Es sind drei Herren in diesem Zimmer. (=Drei Herren sind in diesem Zimmer. 三人の紳士がこの室に居る。)

眞の (論理上の) 主語も、文法上の主語も、共に一格 (Nomitiv [M.], Werfall [M.]) であることに注意せよ。

Dirnet

【註】 I. 前節にかかげたる心理上の主語と、本節所揭の論理上の主語とは別である。後者が常に一格であるのに對して、前者はそれが名詞代名詞である場合に於ても、いろいろな格であり得ることが、その差別點の一つである。例へば、上例の mir, mich の如きである。尤も或文法家は、心理上の主語と云ふ言葉を使はないで、上揭の二種及び前置詞を有するもの〔例へば: Es steht schlecht um ihn. 彼は容態 (景氣) がわるい〕までも、論理上の主語と名づけるのである。それでも差支へはないが、本書では心理上の主語の範圍内に、名詞や代名詞で云ひあらはされないものも、含まれ得ると云ふ考へから、上の如く定義した。——然しかかる論爭は、實用上大した意義はないから、實はどちらでもよろしいと思ふ。

【註】 II. Es war einmal eine kleine, süße Dirne. (昔一人の小さい可愛らしい乙女があつた。) と云ふのは、Grimm の有名な童話 (Märchen) なる Rotkäppchen の冒頭であるが、此 es も勿論本節に入るべきものである。——„又 Es ist, es sind“ と、„es gibt“ との意味上の區別については、詞論、代名詞 „es“ の部、又は『文法講話』119—120 を見ればわかる。

5. 一個の文章には、二個の主成分を必要とするけれど、次のやうな場合は、通常主語が略される。然し觀念として存在することは、云ふまでもない。

i) 命令をあらはす場合

Antworte [du]! (〔お前は〕答へよ!)　　Antwortet [ihr]! (〔お前達〕は答へよ!)

【註】 命令を强めるために、主語を置くこともあるが、その時は主語は第二位に置かれる：Geht ihr! (汝等は行け!)

ii) 省略文に於て

【註】 省略文の事については、後に詳說するけれど、こゝでは主として、感動・呼喚・號令など、力づよい表現をなすために、意味のわか

る限り、出來得るだけ切りつめた文章だと考へて置く。

Bitte! (=Ich bitte! どうぞ!)

Danke bestens (=Ich danke bestens! 大きにありがたう!)

iii) 本節第三項 ii) (第七頁) に於けるやうに、三格又は四格を伴ふ非人稱的表現に於て、(a) 三格又は四格が文頭に來るか、或は (b) 副詞が文頭に來るとき:

a) Mir graut. (=Es graut mir. 私は恐ろしい。) 〔三格〕
Mich friert. (=Es friert mich. 私は寒い。) 〔四格〕
Mir scheint so. (=Es scheint mir so. 私にはさう思はれる。) 〔三格〕.

b) So scheint mir. (=Es scheint mir so. 私にはさう思はれる。) 〔三格〕
Heute friert mich. (=Es friert mich heute. 私は今日寒い。) 〔四格〕

【註】 I. Es gefällt mir (僕の氣に入る)、の如き表現に於ては、„es" いつも存在する。Mir gefällt es. かゝる種類のものは僅少ではあるが、例外として記憶して置く必要がある。詞論、非人稱動詞の部、又は『文法講話』232 頁を參照せられよ。

Es gefällt mir
Es gelingt mir
Es geht mir gut

【註】 II. 本節第三項 (第七頁) に關するもので、甚だよく似た表現ながら、一方は es を失はず、他方は es を失ふものがある。例へば、Es ist warm. (あたたかい。) は一般の氣候を云ふもので、3 の i) に關するが、Es ist mir warm. (私は暖かい。) は、個人の感じを云ふもので、3 の ii) に關する。從つて前者は、いつも es を失はないけれど、後者は他のものが文頭に來るときには、es は消失する。Ist es warm? (暖かいかれ?; es は存在す); Mir ist warm. (私は暖かい). Ist Ihnen warm? (貴君は暖かいですか?; 後二者では、共に es は消失する)。

iv) a) 商用文、又は b) 俗語に於て:

a) Hierduch bestätigen [wir: 略] den Empfang Ihrer gestrigen Sendung. (此狀にて貴君の昨日の送品の受領を確認いたし候)。—Hiermit erlaube [ich: 略] mir, Ihnen mitzuteilen, daß..... (此手紙にて失禮ながら次の事を御報仕り候)。

b) Was hast [du: 略] nur? (まあどうしたんだ?); [Es: 略] geht schon vorüber! (屹度すぐすみますよ。); Hätten [wir: 略] lieber das tun sollen! (むしろそれをやつた方が本當だつたなあ!)。

v) 非人稱の主語 „es" を有する被動 (Passiv) の文に於て、es 以外のものが文頭に來る時:

Es wird oben getanzt=Oben wird getanzt. (階上で舞踏がある〔現在〕)。

Es wird dem Lehrer geantwortet=Dem Lehrer wird geantwortet. (先生に對して答へられる。〔現在〕)

Es ist auf ihn gewartet worden=Auf ihn ist gewartet worden. (彼が待たれた。〔現在完了〕)

【註】 この詳細については、詞論 能動及被動の條、又は『文法講話』242–244 を見よ。

6. 客語には二種あつて、其一つは (A) 動詞から成るもの、他の一つは (B) 動詞と名詞又は形容詞とから成るものである。

(A) 客語が、動詞からのみ成るものは、例へば Der Hund bellt. (犬が吠へる。) の bellt や、Der Brief wird geschrieben. (手紙が書かれる。) の wird geschrieben; Ich bin gekommen. (私は來た。) の bin gekommen; Wir werden gesungen haben. (私は歌ひ終つたらう) に於ける werden gesungen haben がそれである。從つて

『時稱』により、『態』(能働•被働のこと)により、客語そのものの數は、一個から多數に及び得るのである。

〔A〕

I. 能　働

主　語	客　語
Das Kind	ſchläft. 〔現〕
Der Hund	hat gebellt. 〔現•完〕
Der Vater	war abgereiſt. 〔過•完〕
Er	wird angekommen ſein. 〔未完〕

【註】 1. 子供は眠つてゐる。—2. 犬は吠えた。—3. 父は出立した。4. 彼は到着したであらう。

II. 被　働

主　語	客　語
Der Knabe	wird gelobt. 〔現〕
Der Hund	iſt geſchlagen worden. 〔現•完〕
Karl	war getadelt worden. 〔過•完〕
Anna	wird gelobt werden. 〔未〕
Der Sperling	wird geſchoſſen worden ſein. 〔未•完〕

【註】 1. 男の兒は褒められる。—2. 犬はうたれた。—3. カールは叱られた。—4. アナは褒められるだらう。—5. 雀は射たれたらう。

即ち最も簡單な形に於ける能働文では、客語は一個であり得るけれど(例へば、現在•過去における如く)、被働文に於ては、いかに簡單な形でも、客語は二個から成立せざるを得ない(同じく現在•過去に於ける如く)。即ちその一つは過去分詞で、他の一つは被働形をつくるのに必要なる werden が主語の人稱、數に應ずる諸形である。

更に進んで、客語動詞に話法の助動詞が加はるときには、客

語部分はいかに少くとも、二個から成立するし、時稱によつては、更に多くのものから組み立てられる。

【註】 話法の助動詞とは、勿論 dürfen, können, mögen, müſſen, ſollen, wollen, laſſen である。

主　語	客　語
Wir	können ſchwimmen. 〔現〕
Ich	werde arbeiten müſſen. 〔未〕
Wir	hatten arbeiten müſſen. 〔過•完〕
Er	wird haben arbeiten müſſen. 〔未•完〕

【註】 I. 1. われわれは泳ぐことが出來る。—2. 私は仕事しなければならないであらう。—3. われわれは仕事しなければならなかつた。—4. 彼は仕事しなければならなかつたらう。

【註】 II. 話法の助動詞が、現在完了及過去完了に於て、動詞の不定法と共に使用されるときは、話法の助動詞の過去分詞の代りに、その不定法形が使用される。即ち過去完了は、Wir hatten arbeiten gemußt. ではなく、本文のとほりである。——又未來完了形に於ては、時の助動詞 haben は二個の不定法の直前に來る習慣である。即ち Er wird arbeiten müſſen haben. ではなく、本文の通りである。(之に對して Er wird arbeiten gemußt haben. などと云ふなら、それは二重の誤謬である)。

〔B〕 客語が動詞と名詞(一格)又は形容詞とから成るものは、例へば、Johann iſt krank. (ヨーハンは病氣である。); Wir waren Soldaten. (われらは兵士であつた。)に於ける主語を除いた部分であるが、此種の動詞として使用せらるるものは、上掲 ſein の外、werden (成る)、bleiben (で居る)、ſcheinen (見える)、heißen (=genannt werden; と云はれる) が使用せられる。この種類では、最も簡短な形は、動詞と名詞、又は動詞と形容詞との二個から出來てゐるものであるが、時稱の如何によつては、數

個となり得るのである。話法の助動詞の加はることは、勿論〔A〕と同樣である。

〔B〕

主　語	客　語	
Ich	bleibe dein Freund.	〔現〕
Karl	wird Offizier werden.	〔未〕
Die Schüler	sind fleißiger geworden.	〔現•完〕
Sie	wird schön gewesen sein.	〔未•完〕
Du	scheinst sein Freund (zu sein).	〔現〕
Der Vater	soll Gelehrter gewesen sein.	〔現〕

【註】 1. 私は君の友人で居る。—2. カールは士官になるであらう。—3. 生徒たちはより勤勉になつた。—4. 彼女は美しくあつたらう。—5. 君は彼の友人であるやうに見える。—6. 父は學者であつたさうだ。

此種〔B〕の客語部分に於ては、名詞•形容詞の外に、(i) 代名詞又は (ii) 前置詞を有する名詞が使用されることがある。

i) Er bleibt stets derselbe. (指示代名詞)
Die Bücher sind mein. (物主代名詞)
(Wer ist der Schuldige?) Ich bin es. (人代名詞)

【註】 1. 彼はいつも相變らずだ。—2. 本(複)は僕のだ。—3. (誰れが責任者だ?) 僕です。—序でに云ふが、Ich bin es. Wir sind es (僕らです)、の如き用法は獨逸獨特のもので、英では It is I. It is we. と云ひ、佛では C'est moi. C'est nous. と云ふのである。此差異に留意せよ。

ii) Der Ring ist von Gold (=golden).
Die Kessel waren aus Kupfer (=kupfern)

【註】 1. 指輪は金製である。—2. 釜は銅製であつた。

なほ〔B〕種に於ける客語動詞は、感動をあらはす文章又は電報或は格言等に於ては、屢省略される。

Frische Fische (,) (sind) gute Fische.
Hilfe (ist) nötig!
Vater (ist) krank, komm!
Nirgends (ist) ein Ausweg!

【註】 1. 新鮮な魚はよい魚だ(今日すべきことを明日に延ばすなの義; sind を除き、コンマを入れてある)。—2. 救助が必要だ。—3. 父病氣、來れ!—4. どこにも逃路なし。

かゝる省略法に就いては、後章になほ詳しく述べるつもりである。

7. 客語部分のうち、主語の人稱•數に應じて變化するものを、**定動詞** (das finite Verb) と云ふ。故に定動詞は一個である。客語動詞が一個なるときは、それと定動詞と一致すれど、客語動詞が多くの部分より成るときは、定動詞は客稱動詞の一部にすぎなくなる。この定義は、〔A〕〔B〕兩種の客語に當て篏るものであることは、言ふを須ゐない。

〔A〕

主　語	客語 定動詞	客語 其附屬物	
Die Nachtigall	singt.		〔現〕
Die Schüler	redeten.		〔過〕
Der Jäger	hat	geschossen.	〔現•完〕
Wir	werden	verreisen.	〔未〕
Wilhelm	wird	angekommen sein.	〔未•定〕
Du	sollst	schweigen.	〔現〕
Die Rehe	wurden	verscheut.	〔過〕
Ihr	seid	geadelt worden.	〔現•完〕
Die Arbeit	wird	vollendet worden sein.	〔未•完〕

【註】 1. 鶯が囀る。—2. 生徒たちは逃べた。—3. 獵師は射擊した。—4. われわれは旅に出かけるであらう。—5. ヴィルヘルムは到着したらう。—6. 君は沈默せよ。—7. 彼は死んだに相違なかつた。—8. 鹿は逐ひ拂はれた。—9. 汝等は叱られた。—10. 仕事は完成されたであらう。

〔B〕

主語	客語		
	定動詞	其附屬物	
Der Rhein	ist	ein Fluß.	〔現〕
Das Blut	ist	rot.	〔現〕
Cäsar	war	ein Kriegsheld.	〔過〕
Ihr	seid	fleißig gewesen.	〔現・完〕
Die Frucht	wird	reif werden.	〔未〕
Karl	wird	Soldat gewesen sein.	〔未・完〕
Wilhelm	muß	Offizier geworden sein.	〔現〕

【註】 I 1. ラインは河流である。—2. 血は赤い。—3. シーザーは勇士であつた。—4. 君たちは勤勉であつた。—5. 果實は熟するであらう。—6. カールは兵士であつたらう。—7. ヴィルヘルムは士官になつたにちがひない。

【註】 II. 客語の〔B〕の種類に於て、sein, werden, bleiben 等は、それが主語と客語たる名詞又は客語たる形容詞その他とを連結するものであるといふ意味で、これを連辭 (Kopula [F.] Satzband [N.]) と名づけ、その殘りの部分を Prädikativum と稱する文法家がある。之に對して、一方には上掲定動詞の變化語尾（例へば Der Mensch denkt, に於ける denkt の t; Du sollst kommen. に於ける sollst の st を Kopula と稱する文法學者もある。然し本講話のやうに解說するときは、Kopula と云ふ術語を使用する必要がない。——又「定動詞」と云ふ術語を決して使用しない文

法家もあるが、筆者は邦人理解の上には、この語による解說を、最も有利だと信ずるのである。

8. 獨逸文章の配語法の根本は、定動詞と主語との位置によつて定まる。i) 定動詞が主語の後に存するところの語次を、**正置法** (die gerade Wortfolge) と云ひ、ii) 定動詞が主語に先立つものを、**倒置法** (die invertierte Wortfolge, die Inversion) と稱する。この二つと、後に說くべき**貶置法**とが、獨逸文章の配語法の三大原則であつて、獨逸作文の出發點は、實にこゝに存するのである。

正置法

(I 主語、II 定動詞)

主語	定動詞		
Die Blume	blüht.		〔現〕
Die Früchte	werden	reifen.	〔未〕
Der Fisch	kann	schwimmen.	〔現〕
Er	wird	gegessen haben.	〔未・完〕
Ihr	seid	fleißig gewesen.	〔現・完〕
Die Feinde	sollen	vertrieben worden sein.	〔現〕
Wer	ist	verwundet worden?	〔現・完〕
Was	war	gekauft worden?	〔過・完〕

【註】 1. 花が咲く。—2. 果實は熟するであらう。—3. 魚は泳ぐことが出來る。—4. 彼は食事したらう。—5. 君たちは勤勉であつた。—6. 敵は追ひ拂はれた由。—7. 誰れが傷つけられたか？—8. 何が買はれたか？

倒　置　法

【註】 これには二種ある。(A) 文頭に定動詞が來り、その次に主語が來るものと、(B) 文頭に定動詞ならぬものが來り、第二に定動詞、第三に主語が來るものがそれである。

〔A〕

(I 定動詞、II 主語)

定動詞	主語		
Kommst	du?		〔現〕
Bist	du	glücklich?	〔現〕
Ist	Ihr Vater	abgereist?	〔現•完〕
Konnte	der Knabe	antworten?	〔過〕
Werden	die Feinde	zurückgetrieben worden sein?	〔未•完〕

【註】 1. 君は來るかれ？—2. 君は仕合せか？—3. 貴君の父は出立しましたか？—4. 男の子は答へることが出來ましたか？—5. 敵は撃退されただらうか？

(I X, II 定動詞、III 主語)

【註】 文頭の X は、下に示す如く、種々なものであり得るのである。例へば代名詞、形容詞、副詞、動詞の不定法又は過去分詞などである。

X	定動詞	主語		
Wer	sind	Sie?		〔現〕
Was	ist	dein Bruder	geworden?	〔現•完〕
Herrlich	sind	die Gestirne!		〔現〕
Lang	lebe	der König!		〔現〕
Es	werden	die Früchte	reifen.	〔未〕

Reifen	werden	die Früchte!	〔未〕
Gesunken	ist	die Sonne!	〔現•完〕

【註】 1. 貴君は誰れですか？(文頭は疑問代名詞)—2. 君の兄弟は何になりましたか？(文頭は同樣)—3. 美しいかな、星辰は！(文頭は形容詞)—4. 國王萬歲なれ！(文頭は副詞; lebe は願望をあらはす Konjunktiv)—5. 果實は熟するであらう (文頭は文法上の主語たる „es")—6. 熟するであらう、果實は！(文頭は動詞の不定法)—7. 沈みたり、太陽は！(文頭は動詞の過去分詞である)

9. 文章をその表現する意味から見ると、四種に大別される。

I. **主張文章** (Behauptungssatz [M.]) は、また敍述文章 (Aussagesatz [M.]) とも云はれ、或事を肯定し、又は否定し、推測し、傳達する文章である。

Karl	schreibt.		〔現〕
Wilhelm	ist	zurückgekommen.	〔現•完〕
Der Fisch	kann	schwimmen.	〔現〕
Alexander	ist	Sieger geblieben.	〔現•完〕
Der Wald	wird	grün geworden sein.	〔未•完〕
Keiner	soll	gesehen worden sein.	〔現〕

【註】 1. カールは書く。—2. ヴィルヘルムは歸つて來た。—3. 魚は泳ぐことが出來る。—4. アレキサンデルは勝利者で居た。—5. 森は綠になつたらう。—6. 何人も見られなかつた由。

II. **疑問文章** (Fragesatz [M.]) とは、疑問を示す文章であるが、これには (A) 疑問詞が文頭に立つものと、(B) 定動詞が文頭に立つものとある。後者には勿論疑問詞はない。

Keinerlei

(A) Wer lacht? 〔現〕
Was ist schädlich? 〔現〕
Wer ist Bürgermeister geworden? 〔現・完〕
Was wird gewonnen worden sein? 〔未・完〕
Wer sind Sie? 〔現〕
Was ist dein Vetter geworden? 〔現・完〕
Wie ist der Knabe? 〔現〕

【註】 1. 誰れが笑ふのか？—2. 何が有害であるか？—3. 誰れが市長になつたか？—4. 何が得られたか？—5. 貴方はどなたですか？—6. 君の從兄弟は何になつたか？—7. 男の兒はどんな風ですか？—以上七個の例を精査すれば、すぐにわかる通り、前四者は疑問が主語に關し、後三者は疑問が客語に關する。即ち第一問 Wer lacht? は lachen する人を問ふもので、Wer sind Sie? は Sie なる人が誰れであるかを問ふのである。故に前者の答へは、例へば Wilhelm lacht. であり、後者の答へは、例へば、Ich bin Johann. である。

(B) Kommt er? 〔現〕
Sind Sie zufrieden gewesen? 〔現・完〕
War er glücklich? 〔過〕
Sind die Bücher eingebunden worden? 〔現・完〕
Wird der Feind zurückgeschlagen worden sein? 〔未・完〕

【註】 1. 彼は來るか？—2. 貴君たちは滿足してゐましたか？—3. 彼は幸福でしたか？—4. 書物は製本されましたか？—5. 敵は撃退されましたか？—以上の五例でわかるやうに、此種の疑問文は、(A) のそれとは異なり、問はれるのは、主語でも客語でもなく、文章全體の意味が問はれるので、これに對しては、ja (然り)、nein (然らず) を以て答へられ得るものである。

疑問はまた、疑問詞を須ゐず、倒置法にもよらないで (即ち

正置法により)、語調によつてその意味を示すことが出來る。尤もかゝる表現は、普通の問ではなく、話者の怪訝の念をあらはすものである。

Er hat geschrieben? 〔現・完〕
Er wird Soldat werden? 〔未〕
Er ist fleißig gewesen? 〔現・完〕
Das Bild ist verkauft worden? 〔現・完〕

【註】 I. 1. 彼が書いたつてのか？—2. 彼は兵士になるだらうつてのか？—3. 彼は勤勉であつたつてのか？—4. 畫は賣れたつてのか？

【註】 II. 主張文章の形式を有する疑問文でも、後尾に nicht wahr? (さうではないのかえ？ さうだらう？=ist es nicht so?) を添加するときは、自らはさう信じつつも、なほ念を押す形の問ひとなるのである。Er ist fleißig gewesen, nicht wahr? (彼は勤勉だつたらう、ねえ?) Sie können lesen, nicht wahr? (貴君は讀めるでせう、ねえ?)

【註】 III. 前註の如く nicht wahr? を添加せざるもの、即ち本文所掲のものには、文頭に感動をあらはす was, wie, ei 等を附して、怪訝の情の表現を强めることがある。Was, er ist Kaufmann geworden? (え、あの人が商人になつたつてのかえ?) Wie, das Bild ist verkauft worden? (え、畫が賣れたつて?) Ei, der Vogel hat gesungen? (え、鳥が鳴いたつて?)

III. 要望文章 (Begehrungssatz [M.]) とは、(A) 命令又は (B) 願望をあらはす文章で、前者は命令法又は可能法を使用し、後者には可能法を使用する。

(A) 命令をあらはすもの。

Lies! (Lest! Lesen Sie!)
Sei fröhlich! (Seid fröhlich! Seien Sie fröhlich!)

Werde ein Mann!
Laßt uns fröhlich sein!

【註】 I. 1. 讀め [單]! (讀め [複]! 貴君、およみなさい!——此 lesen は直說法ではなく、可能法である。) — 2. 快活であれ [單]! (快活であれ [複]! 貴君快活であり玉へ!——此 seien は勿論可能法である。) — 3. 男になれ! — 4. われわれをして快活ならしめよ! (— laßt は命令法複數。)

【註】 II. 命令法はまた sollen (或は müssen) を用ゐても云ひあらはされ得る: Du sollst (od. mußt) schweigen (=Schweige)! (君は默るがよい!)

【註】 III. 不定法又は過去分詞だけが、命令法の代りに使用される事がある。 Aufpassen od. Aufpaßt! (注意さよ = Attention!) Hier bleiben od. Hier geblieben! (こゝに止まれ!)

(B) 願望をあらはすもの。

Der König lebe (od. Es lebe der König)!
Friede sei mit euch!
Er ruhe im Frieden!
Gesegnet seist du allezeit!
Käme er nur!
Wäre ich doch gesund!
Wäre ich doch gesund geblieben!
Mögest du glücklich werden!

【註】 I. 1. 國王萬歲なれ! — 2. 平和がおんみらと共にあれかし! — 3. 彼はやすらかに休めかし! — 4. おんみはいつも祝福されてあれ! — 5. 彼が今來ればよいがな (今居ないのは遺憾だ)! — 6. 私は健康だといふのだが (目下不健康で困る! — 7. 私が健康だつたらよかつたのだが (當時不幸にして健康がわるかつた意)! — 8. 君が幸福にならんことを!

【註】 II. (B) の部の文章に用ゐらるる doch 又は nur (時に einmal)

は、願望の意を强むるもの。— 可能法現在を使用するのは、實現の見込ある (又はありと思惟さるる) 願望に關する場合であり、可能法の過去は、現狀に反對する願望を、過去完了形は、過去の狀態に反する願望を云ひあらはすのである。

【註】 III. 願望をあらはすものには、上揭以外の云ひあらはし方もある。それは次の感動文章についての註の中にかゝげよう。

IV. **感動文章** (Ausrufsatz [M.]) とは、一切の感動を云ひあらはす文章で、往々感動詞が添加される。

Der Würfel ist gefallen!
Das Leben ist doch schön!
Wie hell leuchtet der Abendstern!
Ei, wie schmutzig sind die Straßen!
Pfui, wie die Straßen schmutzig sind!
Ei, wie das Kind artig ist!

【註】 1. 骰子は投げられた! — 2. 人生は實際美しいものだ! — 3. 何んと明らかに、宵の明星がかゞやくことよ! — 4. まあ、往來がなんてきたないんだらう! — 5. ペッ、なんて往來がきたないんだ! — 6. まあ、なんて子供はおとなしいんだらう!

上例第五・第六の如く、定動詞が文末に來るところの配語法を名づけて、**貶置法** (transpositerte Wortfolge, Transposition [F.]) と稱する。前揭の正置法・倒置法と合せて、獨逸文章の配置法の三大區別をなすもので、この他には配語法はあり得ないのである。

【註】 貶置法と云ふ術語が出た序でに云ふのであるが、要望文章中、願望をあらはすもの〔即ち (B)〕は、文頭に daß (that) 又は wenn (if) を加へて、貶置法の形を取らしめることもある。

O, daß ich reich wäre! (あゝ、私が金持であればよいのだが!)

Wenn er doch gesund gewesen wäre! (彼が丈夫だつたらよかつたんだが!)

10. 主語•客語の主成分からばかり成つて居る一個の文章を、單一單文章 (der nackte einfache Satz) と稱する。いづれの意味をあらはす單一單文章にも、正置法と倒置法とは、使用され得る。

【註】 單一單文章はまた單純單文章ともいふ。

正　置　法

Der Knabe hat geschrieben.	〔主〕
Der Brief wird geschrieben worden sein.	〔主〕
Wer ist fleißig gewesen?	〔疑〕
Was wird verkauft worden sein?	〔疑〕
Er komme (=Er soll kommen)!	〔要•命〕
Der König lebe!	〔要•願〕
Der Würfel ist gefallen!	〔感〕

【註】 1. 男の子は書いた。〔現•完〕—2. 手紙は書かれましたらう。〔未•完〕—3. 誰れが勤勉であつたか?〔現•完〕—4. 何が賣られたであらうか?〔未•完〕—5. 彼は來るがよいぞ!—6. 國王萬歲なれ!〔現〕—7. 骰子は投ぜられた!〔現•完〕

倒　置　法

Reifen werden die Früchte.	〔主〕
Grün wird der Wald geworden sein.	〔主〕
Es schwimmt der Fisch.	〔主〕
Wer ist der Knabe?	〔疑〕
Was ist Ihr Vetter geworden?	〔〃〕
Sind Sie zufrieden gewesen?	〔〃〕
Es lebe der König!	〔要•願〕
Gehen Sie!	〔要•命〕
Seid (ihr) fröhlich!	〔〃〕

Wäre er gesund geblieben!	〔要•願〕
Ist das schön!	〔感〕
Wie artig ist das Kind!	〔感〕

【註】 1. 熟するであらう、果實は!〔現〕—2. 綠りに森はなつたであらう。〔未•完〕—3. 魚が泳ぐ (es は文法上の主語)。〔現〕—4. 男の子は誰れですか?(名前を訊れる。)〔現〕—5. 貴君の從兄弟は何になりましたか? (職業をたづれる。)〔現•完〕—6. 貴君は滿足でしたか?〔現•完〕—7. 國王萬歲なれ!〔現〕(未來にわたつての願望なることは勿論である。)—8. 貴君お行きなさい!(gehen は可能法である。)—9. (君達は) 快活であり給へ!(seid は勿論命令法; 主語は普通省略される。)—10. 彼が丈夫であたらよかつたんだが! (遺憾ながら當時之に反してゐた。—時稱の形は過去完了だけれど、事は單に過去に關係する。)—11. これは美しい(結構だ)!—12. 子供はなんておとなしいんだらう! (wie [how] artig は artig の强めで、此二つを一つと見る。)

11. 單一單文章とは、主成分卽ち主語•客語だけから成る文章であることは、前に述べた。文章を構成する諸成分のうち、主成分ならぬものを副成分 (Nebenbestandteil [M.]) と云ふのであるが、單一單文章に、これら副成分の一つ又はそれ以上が加はつたものを、修飾(擴張)單文章 (der bekleidete od. erweiterte einfache Satz) と稱する。副成分を大別して三種とする。補足語•副詞的規定及び附加語がそれであつて、前二者は、客語を規定し、附加語は他の成分中にある名詞を修飾限定する。主成分二個•副成分三個は、文章を構成するすべての成分であつて、これ以外に如何なる成分もあり得ないのである。

Die Biene stach **den Knaben.** 〔補〕

Der Soldat dient **dem Vaterland.** 〔補〕

Der Knabe hat **mir** 〔補〕 einen Brief 〔補〕 geschrieben.

Ich kann **schnell** 〔副〕 laufen.

Mein Neffe lebt **jetzt** 〔副〕 **in Amerika** 〔副〕.

6 Er war blaß **vor Neid** 〔副〕

7 Der tapfre 〔附〕 Feldherr hat gesiegt.

8 Das Heer **der Franzosen** 〔附〕 floh.

9 Die Lilie **auf dem Feld** 〔附〕 blüht.

【註】 1. 蜂が男の兒を刺した。〔補足語は四格〕—2. 軍人は祖國に仕へる。〔三格〕—3. 男の子が私に一本の手紙を書いた。〔三格と四格〕—4. 私は速かに走ることが出來る。〔方法をあらはす副詞〕—5. 私の甥は今アメリカに居る。〔前のは時の副詞、後のは處の副詞語〕—6. 彼は嫉妬のために青白くあつた。〔原因の副詞語〕—7. 勇敢なる將軍は勝つた。〔形容詞〕—8. 佛蘭西人の軍隊 (=das französisch Heer=フランス軍隊) は逃げた。〔名詞の二格〕—9. 野の上の百合は花咲く。〔前置詞附の名詞〕

これら諸種の副成分に就ては、一々後章に説明する筈である。

第二節

文章の副成分

(修飾單文章)

其一

附加語

12. 副成分中、附加語 (Attribut [N.], Beifügung [F.]) と稱せられるものは、上に述べたとほり、文章中の名詞または名詞的に使用されたる詞に附加して、これを修飾•限定するものであつて、主として „如何なる?" („was für ein?") と云ふ問に對す

るものである。附加語としては、いろいろな詞類が使用される。今これを列擧すると：

I. **形容詞** (Adjektiv [N.], Eigenschaftswort [N.]).

der tapfre Feldherr (勇敢なる將軍)
das große Haus (大きな家)
kräftiges Atmen (力づよき呼吸)

II. **名詞** (Substantiv [N.], Hauptwort [N.]).

これは三樣に使用される。

(1) 二格の名詞

Der Hund des Jägers (獵夫の犬)
Der Feldherr des Königs (國王の將軍)

(2) 前置詞 (Präposition [F.], Vorwort [N.]) を有する名詞。

Die Liebe zum Vaterland (祖國に對する愛)
Das Kind in der Wiege (搖籃中の小兒)

(3) 同格の名詞 (Apposition [F.]): これには (i) 先行するものと (ii) 後につくものとがある。

i) König Wilhelm (王ヴィルヘルム)
ii) Der Löwe, der König der Tiere (百獸の王なる獅子)
Friedrich der Große (フリードリッヒ大王)

【註】 Komma の有無に留意せよ。細則は後に說く筈である。

III (4) **數詞** (Numerale [N.], Zahlwort [N.]).

Drei Herren (三人の紳士)
Der vierte Band (第四卷)

IV (5) **代名詞** (Pronomen [N.], Fürwort [N.]).

Dieses Buch (此本)

Dieselbe Person (同一人物)
Meine Freunde (私の友人たち)

二格の代名詞も亦使用せらる。

Ihre Freundin und deren Schwester
(彼女の女友と、その人〔女友〕の姉妹)

V(6) 分詞 (Partizip [N.], Mittelwort [N.]).

Der sterbende Offizier (瀕死の士官)
Die gelobte Schülerin (褒められた女生徒)

【注】 前者は動詞の現在分詞 (das Partizip des Präsens), 後者は過去分詞 (das Partizip des Perfekts) を形容詞的に使用したものであることは、云ふまでもない。

VI(7) 副詞 (Adverb [N.], Umstandswort [N.]).

Die Bücher hier gehören dem Lehrer.
(こゝにある本は、先生のだ。)
Die Berichte von gestern (昨日の報告)

VII(8) zu を有する動詞の不定法 (Infinitiv [M.], Nennform [F.]).

Die Kunst zu schreiben ist alt. (書く技術は古い。)
Es ist Zeit zu schlafen. (眠る時刻だ。)

13. 形容詞が、名詞の附加語となるときは、名詞に先行するのが普通である。然るに上掲八種の附加語のうち、數詞・代名詞・分詞は、形容詞の如く名詞に前行して置かれるから、これらを形容詞的附加語 (Adjektivische Attribute) と稱する。その取扱ひ方は、一定してゐるから、一括して下に述べよう。

(1) 形容詞及び形容詞的に使用せらるる附加語は、名詞の前に置かれて、これと性・數・格に於て一致するのが原則である。

〔男〕 guter Knabe, ein guter Knabe, der gute Knabe.
(良き男の兒。)
〔女〕 gute Frau, eine gute Frau, die gute Frau.
(良き婦人。)
〔中〕 gutes Kind (良き子供〔單〕), gute Kinder (良き小供たち〔複〕)。
dieser Wein (此葡萄酒), jene Bücher (あれらの本〔複〕)。

然るに詩的文章・諺・格言等に於ては、形容詞は、(a) 後に置かれるか、(b) 前に置かれても、語尾をつけないことがある。この (b の) 現象は、特に中性の名詞の前に於て、顯著である。

(a) ein Röslein rot (=ein rotes Röslein 赤い小薔薇)
Von der Stirn heiß (=von der heißen Stirn) muß rinnen der Schweiß [Schiller]. (熱い額から汗がながれなければならぬ。)〔シラアの詩から〕。
ein Mädchen gar schnurrig [Bürger] (=ein gar schnurriges Mädchen 一人の全く異つた少女)〔ビュルガアの詩から〕。

(b) ein kindlich (=kindliches) Gemüt (無邪氣な心情)
Ein unnütz (=unnützes) Leben ist ein früh (=früher) Tod. 〔ゲェテ〕(無益な生は、早い死である。)
Gut (=gutes) Ding will Weile haben. (大器は晩成する。)
Unrecht (=unrechtes) Gut gedeiht nicht.
(不正の富は昌えず。)

又 allein, selbst, alle 等は名詞の後に附加せられ、數詞は代名詞の後に置かれる。

Du allein kannst mir helfen.
(君丈けが僕を助けることが出來る。)

Der König selbst führte die Soldaten in die Schlacht.
(國王自身が、兵士を戰爭に率ゐて行つた。)

【註】 selbst が名詞・代名詞の前に來るときは、「すらも」の意味を持つ: Selbst die Weisesten haben Fehler. (最も賢明な人すら、過ちを持つ。)

Sie alle kämpften. (彼等すべては戰つた。)

Wir drei grüßen euch alle.
(われら三人が君たちすべてに會釋する。)

【註】 Wir は代名詞だが、名詞ならば、數詞はその前に置かれる: Drei Herren saßen im nächsten Zimmer. (三人の紳士が次の部屋に坐つてゐた。); 序數の例: Der siebente Tag ist ein Ruhetag (第七日目は休日である。)

數詞 形容詞の前 形容詞の後

(2) 名詞の前に置かれたる形容詞的附加語に屬する部分は、該附加語の前に置かれる。

ein **ziemlich** fleißiger Schüler
(一人の可成り勤勉な生徒; ziemlich は fleißig を限定する副詞である。)

das **munter** hüpfende* Reh (活潑に跳ねる小鹿; munter は hüpfende を修飾する副詞である; hüpfend は動詞 hüpfen の現在分詞で、これを形容詞として用ゐたもの; 語尾變化は形容詞通りである。)

der **auf dem Schlachtfeld** gestorbene* Krieger
(戰場で死んだ戰士; auf dem Schlachtfeld は gestorbene にのみ關係する副詞語である。)

Das **durch Überschwemmung** zerstörte Dorf
(氾濫によつて破壞された村; durch Überschwemmung は zerstörte にのみ關する副詞語である。)

【註】 かゝる場合、現在分詞は概れ能動の意味を有し、過去分詞は大體

受動の意味を持つものである。例へば der lobende Lehrer (褒める先生) は能働で、der gelobte Schüler (褒められる生徒) は被働である。然し現在分詞でも、die vorhabende Reise (企てられた旅行) の如く、受働的なものもあるし、der gefallene Schnee (積つた雪) の如く、過去分詞を用ゐても、能働的なものもある。概して云へば、自動詞で sein と結合するものの過去分詞は、能働の意味を持つ。例へば、上の fallen の如きものである。一又現在分詞でも過去分詞でも、最早分詞たる性質がなくなり、純然たる形容詞と同じになつたものもある。例へば wüten (暴れ狂ふ) の現在分詞 wütend を、形容詞的に用ゐたる ein wütender Mensch は「暴れ狂ふ人」ではなく、「狂暴な人」であり、erfahren (經驗する) の過去分詞を用ゐた ein erfahrener Mann は、單に「熟練家」を意味するのである。〔詞論「分詞」の條、又は拙著『文法講話』255—259 を見よ〕。

der **mir freundlich** gesinnte Mann
(私に好意ある人; gesinnt は人の三格と gesinnt の內容を示す形容詞と共に使用されるもので、例へば einem freundlich gesinnt sein は、「或人に對して好意を有する」ことで、einem übel gesinnt sein は、「或人に惡意を有する」ことである。こゝでは、此 gesinnt を附加語として使用し、これに附屬する部分を先行せしめたのである。)

die zum **Widerstande** ausreichende Streitkräfte
(反抗するに足る兵力; ausreichen (足る) は zu etwas と共に使用される; 例へば; Zu einer Weste reicht der Rest gerade noch aus. (殘りで丁度一枚のチョッキが出來る。) Ausreichend は勿論 ausreichen の現在分詞であつて、これに所屬の部分は、先行するのである。)

【註】 1. かくの如く、形容詞的附加語に附屬する部分を、その附加語に

先行させるのは、獨逸語獨特の修辭法である。例へば ein jeden Morgen nach der Stadt gehender Bote (毎朝町へ行く使者) と云ふ云ひ現はしは、英語では、すべての修飾部分 (modifier) を名詞の後へ廻はして、a messenger going to the town every morning と云ふのである。

註】 II. 名詞の前に現在分詞が置かれる場合に、その現在分詞に zu (to) が附加するときは、此現在分詞に屬する部分は、zu の前に置かれる：ein hoch zu verehrender Mann (大に尊敬さるべき人；a man highly to be honored)；die unter der ersten Rublik zu betrachtenden Unterschiede (第一の見出しのもとで觀察さるべき差異；the differences which come under the first head).

(3) 不定代名詞 etwas, was, nichts, alles 等に形容詞が屬するときは、それらは後置され、前三者に於ては、强變化の語尾を；後一者にあつては、弱變化の語尾を採り、形容詞の頭字は大書される。

etwas Gutes (或良きもの；something good).
nichts Neues (何等の新らしいものも……せぬ；nothing new)
alles Beste (すべての最よきもの)
(et)was Rechtes (或一かどの事、或然るべき事)
Er tut nichts Rechtes. (彼はろくな事はしない。)

(4) 二つまたはそれ以上の形容詞的附加語が、名詞の前に置かるるときには、und 又は oder によつて接續されざる限り、Komma によつて、その間を分ける。又かゝる接續詞を使用する場合でも、三つ以上の附加語のあるときは、und は最後のものの前にのみ附し、他はみな Komma によつて分けるのである。

der tüchtige und fleißige Arbeiter (敏腕で勤勉な勞働者)

etwas, was, nichts = so
alles

dürres oder welkes Gras (乾き切つた又は枯れた草)
ein kostspieliges, aber nutzloses Besitztum
(高價な、しかし無益な所有)

〔以上接續詞あるもの〕

das gute, ordentliche und folgsame Kind
(善良な几帳面な而して從順な小兒)

〔最後のものに接續詞ある例〕

der junge, tapfre Soldat (=der junge und tapfre Soldat；若い・勇敢なる兵士)
das kleine, fleißige Mädchen (=das kleine und fleißige Mädchen；小さい勤勉なる少女)

然るに名詞の直前に立つ形容詞と名詞とが、まづ合して一概念をつくり、この概念に他の形容詞が結びつくときは、兩者の間に Komma をつけない。

echter russischer Kaviar
(本ものの露西亞鹽漬鱈(ハラゴ)；v は w に發音する。)
der neue türkische Sultan
(新らしい土耳其皇帝)
feinste italienische Weine
(極上の伊太利葡萄酒)
eine liebenswürdige alte Jungfer
(一人の愛嬌のある老嬢；alte Jungfer=old miss).
ein allerliebstes weißes Mützchen
(非常に可愛らしい白帽子)
der schadenhafte kupferne Kessel
(破損〔腐敗〕せる銅の釜)

〔以上 Komma なき例〕

【註】 I. 上掲の例でも、解る通り、名詞の直前に來るものは、出所を示すもの (例へば chinesisch, japanisch, indisch), 或は材料・色彩を示すもの (例へば eisern〔鐵の〕、weiß〔白き〕) などが主である。—— 又かゝる場合 (特に冠詞なき場合) に、先行の形容詞の語尾變化と、後の形容詞の語尾變化とを異にするのは、今は許されない。即ち語尾變化は同一でよいのである。例へば、やゝ古くは neuester englischer Schnitt (最新の英國風の裁ち方)に於て、前者を强變化とし、後者を弱變化として取扱ふ事があつた: nach neuestem englischen Schnitte. 但し今では、nach neuestem englischem Schnitte と云はればならない。

【註】 II. Komma なき附加語の配列方については、上に述べたが、其置き方の如何によつては、意味の異る時があるから、注意しなければならぬ。例へば、der letzte schwere Tag と云へば、苦しい (schwer) 日がいく日か續いた後の最後の日で、たとへば、苦しい試驗の最終の日の如きものであるが、der schwere letzte Tag と云へば、「苦しい最後の日」、即ち臨終の日が意味される。

(5) 一個の名詞の前に置かれたる色彩に關する附加語は、それらの色彩が集まつて、一個の名詞で示された物を構成するときは、最終のものの外には語尾がなく、それらの色彩の一つが、各一個の名詞で示された物を構成するときは、すべての附加語形容詞に、語尾を附けるのである。例へば、Blaue und rote Fahnen と云へば、青い (blau) 色の旗(一色旗)と赤い (rot) 色の旗(一色旗)とを意味し、Blau-und rote Fahnen と云へば、青色と赤色とを有する二色旗のいくつかを意味する。而して後者は、また und を略して、Blau-rote Fahnen とも云はれる。その他の例をあげると:

blauweiße Schürzen (=blau und weiße Schürzen)
(青色と白色と、二色の前掛〔複〕; 單數は Schürze [F.])

blaue und weiße Schürzen (=blaue Schürzen u. weiße Schürzen) (青色の前掛と白色の前掛)
schwarzrotgoldene Fahnen
(黑色と赤色と金色との三色旗〔複〕)
schwarze, rote und goldene Fahnen
(黑色旗と赤色旗とそれから金色旗)

(6) 複合名詞 (das zusammengesetzte Substantiv) の前にある附加語はすべて、基礎詞に關係すべきものである。

【註】 複合名詞とは、名詞を基礎(最終語)として、その前に一つ又はそれ以上の獨立の詞を附着せしめて、一個の名詞に複合させたもので、基礎となるものを、基礎詞 (Grundwort [N.]) と云ひ、これを規定するものを、規定詞 (Bestimmungswort [N.]) といふ。例へば、Steinweg (石道) に於ては、Weg (道) が基礎詞で、Stein は規定詞であり、Unterseeboot (潛航艇) に於ては、Boot が基礎詞で、unter と See とが規定詞となるのである。

即ち der schöne Herbsttag (うららかな秋の日) に於ては、schöne は Tag につくもので、Herbst には直接の關係なく、die erquickende Frühlingsluft (爽快ならしむる春の空氣) に於ては、erquickende なる附加語は、Luft にのみ關して、Frühling なる規定詞には、つゞかないのが原則である。

【註】 しかるに獨逸でも、隨分この原則に違反した用法をして、いつも文法家の非難をうけるのである。例へば『カトリック教會の建築』は、der Bau der katholischen Kirche と云ふべきのに、簡を擇ぶべしと思つてか、der katholische Kirchenbau と云ひ、『三階建の家の所有者』は、der Besitzer des dreistöckigen Hauses と云ふべきものに、つゞめて der dreistöckige Hausbesitzer などと云ふ。又『電車車掌』は、der Schaffner der elektrischen Bahn と云ふべきのに、これも der elektrische Bahnschaffner と唱へ

たりする。『絹靴下工場』は、die Fabrik seidener Strümpfe といふべきところを、die seidene Strumpffabrik などと稱する。上掲の規則に依れば、附加語は基礎詞に關係するのだから、第一の誤用例では、katholisch が Bau に關し、第二の例では、dreistöckig が Besitzer につき、第三のものでは、elektrisch が Schaffner に附隨し、第四の例では、seiden が Fabrik につくことになつて、全く意味を失つてしまふ(何となれば、例へば elektrische Schaffner など云ふものはあり得ないからである)。かゝる誤用法は名詞的附加詞にも多い。これは後に說く筈である。

(7) (A) 二つ又はそれ以上の同一附加語が、性•數を異にするいくつかの名詞に附くときには、これらの附加語は繰り返へされる。— (B) 又二個以上の名詞が、同一の性を有するときにも、異なれる人又は物をあらはすときには、同樣に繰り返へされなければならぬ。

(A) solcher Eifer und solche Beständigkeit
(斯樣な熱心と斯樣な耐久)
mein schwarzes Kleid und mein schwarzer Hut
(私の黑い衣服と私の黑い帽子)
ihr jüngerer Bruder und ihre jüngere Schwester
(彼女の弟及彼女の妹)
Sein altes Gewehr und seine alte Pistole sind verrostet.
(彼の古い銃と彼の古いピストルとは銹びてゐる。)

〔以上性を異にせるもの〕

große Überraschungen und große Freude
(大きな驚愕〔複〕と大きな喜び)
für Ihren Besuch und (für) Ihre trostreichen Worte
(貴君の訪問と貴君の慰め多き言葉〔複〕とに對して)

〔以上數を異にせるもの〕

(B) mein neues Tuch und mein neues Kleid
(私の新らしい襟卷と私の新らしい衣服)
Unser alter Lehrer und unser alter Prediger waren angekommen.
(われらのもとの先生ともとの說教師とが到着した。)

〔以上性•數が同じでも別の人物をあらはせる場合〕

從つて此場合いくつかの名詞が、同一の人又は物を示す時には、附加語を繰り返へさない。

Mein alter Lehrer und Prediger ist angekommen.
(私の舊先生で又舊說教師なる人が到着した。)

【註】從つて二個の人又は物にても、その性質上關聯して一個のものと見做してよいもの、又は二個に綾別するほどの事もなきものにあつては、附加語を共通にする。例へば zu ewiger Freude und Wonne (永久の歡喜のために)、mit großem Fleiß und Eifer (大なる勤勉と熱心とを以て) などの如きもので、前者にあつては、Freude と Wonne とが、ほとんど同義であり、後者は Fleiß と Eifer とを一概念的に考へたからである。然しこれを二つに分けたからとて、わるい事はない。例へば mit großem Fleiß und (mit) großem Eifer と云つてもよろしいのである。かゝるときは、二者の性質上の區別がはつきりして、全體の云ひあらはしが、より重苦しく又强くなるのである。

14. 第十二項に揭げた八種の附加語のうち、(a) 二格の名詞、(b) 前置詞を有する名詞、(c) 及び同格名詞を一括して、**名詞的附加語** (substantivische Attribute) と稱する。以下に此種の附加語の取扱方を述べよう。先づ二格の用法から初める。

i) **二格** (Genitiv [M.]) は、普通それが規定 (bestimmen) する詞の後に立つものである。

der Diener des Herrn (主の召使)
der Geist des Zeitalters (時代の精神)
ein Haufe Volks (民衆の一團)
die Werke Shakespeares (沙翁の著作)

然れども、二格は往々、その規定する詞の前に置かれることがある。かくて先行する二格を、ザクゼン二格 (sächsischer Genitiv) と稱する。これは特に人名の場合に多いが、その他の場合にも、屢行はれる。この際には、規定さるる名詞が、冠詞を失ふ事に留意せよ。

Shakespeares Werke (沙翁の著作)
Meines Bruders Hut (=der Hut meines Bruders)
Undank ist der Welt Lohn (=der Lohn der Welt).
(忘恩は浮世の報償である；忘恩は世の習ひの義。)

かく規定する二格の有する意味は、いろいろあるけれど、その大體を示すと、下の各種に區別される。

〔A〕 **主語的二格** (Subjektsgenitiv [M.]): これは主格の價値を有する二格で、例へば die Himmelfahrt Christi* (基督の昇天；基督『が』昇天すること)、der Flug der Vögel (鳥類の飛行；鳥『が』飛行すること) の類である。

【註】 Christus (基督) の變化に注意せよ：Christus, Christi, Christo, Christum である。

〔B〕 **補足語的二格** (Objektsgenitiv [M.]): これは補足語の資格を有する二格である。例へば die Erbauung des Hauses (家の建築；家『を』建築すること)、die Wahl des Berufs (職業の選擇；職業『を』擇ぶこと) の如きである。

【註】 他動詞としても、再歸動詞としても使用し得る動詞から來た名詞

を規定する二格は、〔A〕種なりや、〔B〕種なりや、俄かに判別しがたい場合がある。かゝるときには、前後の關係から、そのいづれであるかを、判定しなければならない。例へば die Verteidigung des Angeklagten (被告の辨護) の如きものであつて、被告『が』自分を辨護するのか、他の人が、被告『を』辨護するのか、わからないのである。——かゝる兩義的なものは、單に四格を支配する動詞から來た名詞に關係する二格にも發見される。即ち das Lob des Lehrers (先生の賞讃)、die Pflege der Mutter (母の看護) の如き例で、前者は、先生『が』或人をほめるのか、或人が先生『を』褒めるのか、判明せず。後者では、母『が』看護するのか、子供が母『を』看護するのか判明しない。この意味が、前後の關係によつて定まることは、前と同樣ある。

〔C〕 **部分二格** (Teilungsgenitiv [M.]): 二格によつて規定されるものは、二格であらはされたものの部分であることを示すものである。例へば ein Teil meiner Schüler (私の生徒たちの一部)、einige unserer Freunde (われらの友人の二三)、ein Gramm dieses Stoffes (此物質の一グラム) などである。

【註】 I. 但し現今では、この二格は、規定する名詞に冠詞があるか、形容詞又は代名詞があるかの場合に於てのみ使用され、然らざる場合には、名詞と同格にするのが普通である。例へば『金の或高 (=或金高)』と云ふときには eine Summe (a sum) Geldes とは、云へないことはないが、まづ通常 eine Summe Geld といふ。これ即ち同格である。此同格的用法は、形容詞のあるときにも、亦行はれて居る。例へば『新鮮なる水一杯』は、ein Glas frischen Wassers (二格) といひ、或は ein Glas frisches Wasser と云ふ。後者は同格だから、mit がつけば、mit einem Glas frischem Wasser と云ふ(但しこの際は口調のために、mit einem Glas frischen Wassers と云ふ方がよい)。單に『水一杯』は ein Glas Wasser であつて、ein Glas Was-

ſers とは云はない (英語の a cup of water と比較して、差異を記憶せよ)。

【註】 II. 又 eine Art (一種; a kind) の次に來る名詞も、上陳のものと同じやうに取扱はれる。即ち『一種の石』は eine Art Stein (a kind of stone) であるが、形容詞などの附加語のつくときは、eine Art ſchöner Stein (同格) か、或は eine Art ſchönen Steins であり、後に來るものが複數ならば、eine Art ſchöne Steine (同格) 又は eine Art ſchöner Steine (二格) である。——複數を示す Menge, Anzahl, Maſſe 等の後も、同樣である。

【註】 III. 若し人代名詞が部分二格として用ゐられるときには、いつも規定する詞の前に立つのである。Es waren unſer (of us) fünf. (われらは五人であつた; unſer は wir の二格である)。——指示代名詞についても同樣である: Er hat fünf Schweſtern, ich habe deren zwei. (彼は五人の姉妹を持つ、私はそれを二人持つ; deren は指示代名詞の複數 die の二格である)。

〔D〕 **所有二格** (Poſſeſſivgenitiv [M.]) は、二格であらはされたものの所有に係ることを示すもので、例へば der Leib Chriſti (基督の肉體)、die Ufer des Rheins (ライン河の岸)、das Haus meines Bruders (=meines Bruders Haus; 私の兄弟の家) などがその例である。

〔E〕 **同一の二格** (Genitiv der Gleichſetzung, Genitiv der Identität) とは、規定するものと規定さるるものとが同一なることを示すもので、多くは『と云ふ』の義を持つてゐる: der Fehler des Argwohns (猜疑と云ふ缺點)、das Übel der Armut (貧乏と云ふ禍); Friedrich der Zweite erhielt den Namen des Großen. (フリードリッヒ二世は大王と云ふ名前を得た)。

【註】 I. これはまた、意味の上から見て、同格的二格 (appoſitiver Genitiv) とも、說明二格 (erläuternder Genitiv) とも稱せられる。

——固有名詞では、英語とちがつて、全く同格となる。例へば『伯林(といふ)市』は、die Stadt Berlin であり、「一月といふ月」は、der Monat Januar であつて、英の the city of Berlin とか、the month of January とかと異なるところに留意せよ。此の直譯として、往々 von が (例へば die Stadt von Berlin) 邦人の獨語に見えるから、特にかう述べるわけである。

【註】 II. なほ此二格は、往々所有の二格とあやまれるから、熟考しなければならぬ。例へば die Tugend der Treue (誠實と云ふ德) を、所有二格に解して、『誠實の有する德』とするが如きは、その一例である。

〔F〕 **性質の二格** (Qualitätsgenitiv [M.]) は、規定するものの性質•屬性•特徵などをあらはすもので、例へば ein Mann der Tat は行爲の人•事業の人であり、Waren erſter Güter は最上等の商品 (goods of the best quality) である。又 Dinge des bitterſten Ernſtes は、此上なく眞劍な事柄を意味し、ein Werk der Barmherzigkeit は、或慈善事業 (ein barmherziges Werk) を意味するのである。

〔G〕 **起源の二格** (Genitiv des Urſprungs) は、起源•系統•系譜•行爲者•創作者などを示す二格で、例へば die Nachkommen Abrahams (アブラハムの後裔) は系譜を示し、die Taten des Herakules (ヘラクレスの事業) は、行爲者; Goethes Fauſt (ゲエテのファウスト) は著作者を示してゐる。Der Sohn des Fürſten, die Kinder dieſer Frau などもそれであり、die Verwüſtungen zweier Kriegsjahre (二年間の戰爭から來た荒廢) なども之に屬する。

【註】 所有關係もまた、既述の如く、二格で云ひあらはされ得るから、本項のものと區別する必要あるときには、前者には二格を使用し、本項のものには von をつけてあらはす。例へば das Buch

meines Onkels と das Buch von meinem Onkel とを對用するときには、前者は私の叔父の『所有』する書物を指し、後者は、私の叔父の『著』にかかるものを指す。然しこれは特に區別する必要ある時のことである。又二格の形は、それを對照とせる作品をも示す：ein Bild Böcklins はベックリンの所有の畫、又はベックリンを描ける畫の義であり得るのである。

〔H〕 **材料の二格** (Genitiv des Stoffes) は、規定せらるるものが、それから成立せる材料を示すものである。但これは今ではあまり行はれない。例へば ein Schmuck des feien Goldes は、純金の裝飾品を指し、ein Dach schattender Buchen は、蔭を投ずる山毛欅の木〔複〕から成れる屋根を意味する (a roof of shady beeches) のである。

【註】 しかし今では、二格の代りに von 又は aus を有するものが使用される：ein Schmuck vom feinen Gold.

ii) **用法上の注意。** 一個の名詞を規定する二格名詞に、更に二格の名詞が後續する時は、その一個は前置詞を有する附加語に代えるがよい。これは意味を明瞭ならしめ、語調を整へる爲である。例へば das Getöse der Räder der Maschine (機械の車輪の騷音)に於ては、der Räder が das Getöse を規定し、der Maschine は更に der Räder を規定するのであるが、二個の複數二格の連續は、煩らはしいので、これは das Getöse von den Rädern der Maschine とする。又 Die Soldaten des ersten Regiments des Generals H. (H 將軍の第一聯隊の兵士だち)と、二つ des を重ねるよりも、die Soldaten vom ersten Regiment des Generals H. と云ふ方が宜しく、die Dramen des größten Dichters des englischen Volkes (英國民の最大の詩人の戲曲) とするよりも、die Dramen von dem größten Dichter des englischen Volkes とした方がよろしい。又 die Bücher des

Sohnes meines Lehrers (私の先生の息子の本) は、改めて die Bücher vom Sohne meines Lehrers とし、更に die Übersetzung des dritten Wortes dieses Satzes (此文章の第三番目の語の飜譯) は、同じく改めて、die Übersetzung des dritten Wortes in diesem Satz とする方が調子がよろしい。

【註】 I. 語尾變化などに依つて、附加語が二格であることの明瞭である時の外は、上の場合と同じく、附加語に前置詞を持たしめるがよい。例へば die Köpfe von vier Schlangen (四匹の蛇の頭部) に於ける von はこの例で、vier Schlangen の二格を用ゐて、二格たることを明示する印しがないから、意味が解らないのである。尤 die Köpfe großer Schlangen ならばよろしい、何故なら形容詞 groß の語尾で、二格たることがわかるからである。——地名に於ても、二格の語尾 -s を附せられぬものは、此 von をつける。例へば die Straßen Berlins (伯林の街々) はよろしいが、Maniz や Paris には -s がつけにくいから、die Straßen von Mainz, 又は die Umgebung (周圍) von Paris とする。地名の前の此 von の使用は、今では大分廣くなり、前記の條件なくとも使用されるやうである。例へば der Brand von Moskau (モスクワの大火)。

【註】 II. 二格の附加語に關する細則は、まだ二三ある。例へば一個の名詞に二格の規定語が二つかかるときには、その一つを前に置くことであり——例へば Witkowskis Leben Goethes (ヴィトコウスキー著ゲエテ傳)——、今一つは、規定する二格と規定さるる名詞との間は、分離せざることである。——例へば『參謀本部の戰史課』は、„Abteilung des Generalstabs für Kriegsgeschichte" と云ふべきのに、規定さるるものと、規定するものとをわけて、Abteilung für Kriegsgeschichte des Generalstabs としたり、『神經衰弱者に對する第一流の高地療養所』は „Höhenkurort ersten Ranges für Nervenschwache" とすべ

きのを、„Hohenkurort für Nervenschwache ersten Ranges"とする。かうなると『第一流の神經衰弱者のための高地療養所』となつて、顛變なものであることに留意しなければならぬ。——序でに Nervenschwache と Nervenschwäche とを區別せよ。後者は本來の名詞で「神經衰弱」そのものを云ひ、前者は形容詞を名詞的につかつたもので、ein Nervenschwacher, der Nervenschwache と活用するものである。——尤本註掲ぐるところの後者(II. の四行以下) の方は、彼地の人のよく犯す過誤であると見えて、文法書や誤謬指摘書などには、よく見えるが、邦人はあまりこの誤りはなさぬやうである。なほかゝる方面の誤謬に就いては、Grunows grammatisches Nachschlagebuch; Wustmann, Allerhand Sprachdummheiten; Kutzsche, Übungen im richtigen und gefälligen Gedankenausdrucke. 等を參照せよ。

15. 名詞的附加語の第二は、前置詞を有する附加語 (das Attribut mit Präposition) であるが、これはいつも自らの規定する言葉のうしろに置かれる。

【註】 規定さるる言葉を、支配語 (das regierende Wort) と云ひ、規定する方の言葉を、被支配語 (das regierte Wort) と稱す。規定語•被規定語 とは、全く反對の關係に立つ云ひあらはしであるから、注意を要する。なほ支配語•被支配語といふ術語は、前掲のものについても云へる、即ち二格の規定語が、被支配語となるのである。

今この種のものの例をあげると、 der Aufenthalt auf dem Lande (田舍における滯留)、ein Mann von Bedeutung (重要な人物)、ein Mord aus Eifersucht (嫉妬による殺人)、ein Buch zur Unterhaltung (娯樂用の書物)、eine Uhr aus Gold)金時計)、das Faß für Tinte (インキ入れ)、die Liebe zum Vaterland (祖國に對する愛)、Suppe ohne Salz (鹽を入れないスープ)、die Fahrt nach Madrid (マドリットへの旅行)な

どであるが、これらの附加語は大抵、一個の複合名詞、又は形容詞を有する名詞に書き換へられ得る。即ち der Aufenthalt auf dem Lande は ländlicher Aufenthalt (田舍の滯在) に、eine Uhr aus Gold は eine goldene Uhr に、das Faß für Tinte は、das Tintenfaß と云ふ複合名詞に、ein Buch zur Unterhaltung は、Unterhaltungsbuch (娯樂本) に、die Liebe zum Vaterland は die Vaterlandsliebe に書き換へられる。

此際注意すべきことは、〔I〕或動詞と同一語源から出た名詞の後に置かるべき前置詞は、該動詞が採るところの前置詞と、大抵の場合同一な事である。而して或動詞の採る前置詞は一定してゐるから、或名詞の後に來る前置詞は自らきまつてることにならねばならない。例へば、erwidern (答へる) と云ふ動詞は、auf (十四格) を要求するから、之に對應する名詞 Erwiderung もまた、auf (十四格)を取るのである。即ち Ich habe ihm auf seinen Brief erwidert. (我は彼の手紙に返事を出した。) であるから、meine Erwiderung auf seinen Brief (彼の手紙に對する私の返事) となり、動詞 beitragen (貢献する、あづかつて力がある) は zu を採るから、これに對應する名詞 Beitrag [M.] もまた zu を採る。即ち zur Gesundheit beitragen (健康に貢献する) であり、Beiträge zu einer Zeitschrift (或雜誌への寄書) である。又 berechtigen は einen zu etwas berechtigen (或人に或事をなす權利•資格を與へる)の形で使用されるから、名詞 Berechtigung [F.] もまた Berechtigung zu etwas (或事をなす權利•資格) の形で使用される。又 teilnehmen は an etwas (三) teilnehmen (或事に參加する; 例へば an der Arbeit teilnehmen 或仕事に參加する•協力する) の形で使はれるから、名詞 Teilnahme [F.] も同樣に an (十三格) を取るのである。例へば

Teilnahme an der Arbeit (或仕事への參加•協力)の如きものである。かゝる例について、一々枚擧することは、—作文の練習上有益ではあるけれど、—その暇がないからこの位でやめよう。

〔II〕 次に記憶すべきのは、上述のやうに、動詞との關係はないが、或名詞の次に來る附加語につく前置詞は、名詞によつては、一定して居て、その他の前置詞を持つて來ても、間に合はない事である。これらは、平常讀誦の際に、名詞と結びつけて、器械的に記憶すべきものである。例へば、前にも擧げたとほり、Liebe は次に zu を取る。卽ち Liebe zum Vaterland であつて、Liebe für V. とか、Liebe gegen V. とかにしてはならない。—然し lieben は他動詞で、einen lieben (或人を愛する) の形でのみ使用されることにも留意せよ。— 今これらについて二三の例をあげると、Beweis [M.] (証明) は、für を取り(例へば、die Beweise für meine Behauptung 私の主張に對する証明)、Einfluß [M.] (影響) は、auf (十四格) を取る (例へば、der Einfluß auf seinen Charakter (彼れの性格に及ぼす影響)。又 Mittel [N.] (手段) は zu を (例へば Mittel zum Zweck 目的への手段)、Pflicht [F.] (義務) は gegen を採る (例へば、seine Pflicht gegen seine Nebenmenschen (同胞に對する彼れの義務)。この他に、(a) 同一意味にて、二個の前置詞を採るもの (卽ち二つのうちいづれにてもよきもの) と、(b) 意味の異なるに從つて、別の前置詞を採るものとがある。例へば Schutz [M.] (保護) といふ字は、前置詞 vor (十三格) をも gegen をも採ることが出來る。卽ち「敵に對する保護」は Schutz gegen den Feind 又は Schutz vor dem Feind と云ふ。又 Bericht [M.] (報告) のうしろには、同じ意味に於て、von etwas 又は über etwas 〔四〕を採ることが出來るけれど、Freude [F.] (喜悅) は次に über 〔四〕を採るか、auf 〔四〕を採るかによつて意味を

異にする。例へば Freude über den Erfolg は、成功についての喜悅であり、Freude auf das Fest は、祝祭を樂しみにして待つ心である。又 Freude のうしろに使はれる an 〔三〕と、über 〔四〕とは、悉しく云ふと、いさゝか意味を異にし、前者は見聞する對象物を、後者はむしろ原因を示す。卽ち Freude am Schönen は美(いもの)をたのしむ心で、Freude über den Erfolg は成功の喜びである。

【註】 Bericht については、von etwas berichten 又は über etwas berichten (或事について報告する) の形を、Freude については、sich über etwas 〔四〕 freuen (或ものについて喜ぶ)、sich auf etwas 〔四〕 freuen (或事を樂しみにして待つ)、sich an etwas 〔三〕 freuen (或ものを喜ぶ) を聯想したら、すぐわからう。

上に述べたのは、或名詞の後に、必然的に從ひ來るべき前置詞のことであるが、かく必然的なものでなくとも、規定される名詞 (卽ち支配詞) の代りに、意味の似たる動詞を置くと、大抵は彞の規定詞 (被支配詞) は、その形を變ずることなくして、一個の副詞的規定となるのである。例へば der Aufenthalt auf dem Lande は、sich auf dem Lande aufenthalten (田舍に滯在する) となり、die Fahrt nach Madrid は勿論 nach Madrid fahren となり、ein Buch zur Unterhaltung は zur Unterhaltung lesen (娛樂のために讀む) となる。そして auf dem Lande や、nach Madrid や zur Unterhaltung は、みな立派な副詞的規定なのである。

16. 名詞的附加語の第三は、同格 (Apposition [F.]) である。同格とは、或名詞と格を同じうして、これを規定する名詞である。詳しく云へば、兩方の名詞がともに、同一の人物又は事物を

指し、規定するものは、規定さるるものの稱號•職業•種族•身分•資格•性質などを云ひあらはすもので、それは規定するものの前又は後ろに置かれる。

(A) 概して云へば、一語より成る同格名詞は前に置かれ、その間に Komma を採ることなし。例へば Fürst Bismarck (ビスマルク公)、der Papst Gregor (グレゴール法王)、der Evangelist Johannes (福音書の著者ヨハネス)、Onkel Tom (トム伯父さん)。

【註】 I. かく身分等をあらはす先行同格名詞から誘導されたものは、die Sammlung Göschen (ゲッシェン叢書)、das Ministerium Luther (ルテル内閣)、das Hotel Rheingold (旅館ラインゴルト) などで、die Stadt Frankfurt の如きは、之と異なり、die Stadt zu Frankfurt (フランクフルトにある町) から來たもので、形は同じでも起源を別にする (Behagel).

【註】 II. 度量衡の單位をあらはす名詞のうしろに來る物質名詞も、前行の名詞と同格なれど、これはもと二格なりしものが、いつしか同格となつたもので、性質上上揭のものとは別である。例へば ein Pfund Mehl (一ポンドの穀粉)、ein Stück Fleisch (一片の肉) 等がそれで、これは古くは、後者は ein Stück Fleisches と云つたものである (Behagel).

(B) 規定するものが長いときは、規定されるものの後につける。これに、兩者の間に Komma のあるものと、ないものとがある。

i) 規定するものが規定されるものと合して、一個の概念 (Begriff [M.]) を作るときには、兩者の間に Komma を置かない。實際的に云ふと、これらは大抵規定される名詞の特質をあらはす綽名、又は後稱となつてゐるもので、形容詞から作られ

たものが多い。例へば、Alexander der Große (アレキサンデル大王)、Karl der Kühne (カール大膽王)、Nathan der Weise (賢者ナータン) などであつて、これらはみな形容詞から來てゐるが、Eduard der Bekenner (エドゥアルト懺悔王; "Edward the confessor")、Friedrich der Rotbart (フリードリッヒ赤髯帝) などは名詞である。

ii) 前項以外の場合には、Komma が挿入される。此同格は、例へば、Gustav Wasa, der Stifter des schwedischen Reichs (スヴェーデン王國の創立者、グスターフ•ヴァーザ)、Schiller und Goethe, die größten Dichter des deutschen Volkes (獨逸民族最大の詩人シラア及びゲエテ) の如きもので、これが文中にあるときには、同格名詞のうしろへは、Komma をつける。即ち:

Rom, die Hauptstadt Italiens, ist auf sieben Hügeln erbaut worden. (伊太利の首府なる羅馬は、七つの丘の上に建設された。)

Ostende, ein bekanntes Seebad, liegt an der Küste Belgiens. (世に知られたる海水浴場なるオストエンデは、白耳義の海岸にある。)

この種類の同格名詞に關する細則は、次の通りである。

(A) 此種の同格名詞にあつては、大抵は定冠詞又は不定冠詞が附けられる: der Baigarsee, ein sibirischer Landsee (西比利亞の一湖水なるバイカル湖)、Shakespeare, der größte englischer Dichter (最大の英國の詩人なる沙翁)、Paris, die Hauptstadt Frankreichs (佛國の首府巴里) などの如くである。

但し王侯•貴顯又は治者の名前の後に來る稱號 (Titel [M.]) で

此種類（卽ち Komma を要するもの）に屬するものには、冠詞をつけなくてよろしい。例へば：Wilhelm der Erste, Deutscher Kaiser und König von Preußen（獨逸皇帝兼普魯西國王ヴィルヘルム第一世）の如きもので、der Erste は、本項 i）の方に屬するから、こゝに關係はないが、注目すべきのは、Deutscher Kaiser と König von Preußen とに冠詞のない事である。

【註】「獨逸皇帝」は Deutscher Kaiser であつて、Kaiser von Deutschland でないことを牢記せよ。これは一定した稱號で、勝手に變更の出來るものではない。邦人には時々かゝることを、放漫に考へて居るものがあるから、特にこゝに注意して置く。

なほ二三の例をあげれば、Friedrich Wilhelm, Prinz von Preußen（普魯西の皇子フリードリッヒ・ヴィルヘルム）、Maria Theresia, Kaiserin von Österreich（墺國女帝マリア・テレージア）、George Washington, Präsident der Vereinigten Staaten（合衆國大統領ジョージ・ヴァシントン）の如きものである。

(B) 同格名詞は、勿論それの規定する名詞と同格で、變化することを本則とする。

Die Werke Shakespeares, des größten englischen Dichters, sind von Schlegel und Tieck ins Deutsche übersetzt.

（英吉利の最大の詩人なる沙翁の作は、シュレーゲルとティークとによつて獨逸語に飜譯された。）

規定さるる名詞の前に前置詞あるときは、同格名詞の前に、之を繰り返へす必要はないが、格は規定される名詞のそれに依らなければならぬ。さうでなければ、同格ではないからである。

〔二格〕 Jenseits des Graniko, eines kleinen Flusses, erwarteten die Perser das Heer Alexanders.

（小さい河なるグランコスの向ふ岸で、波斯人たちがアレキサンダアの軍隊を待ち設けてゐた。）

〔三格〕 Am zweiten Dezember 1805, dem Jahrestage seiner Krönung, siegte Napoleon der Erste bei Austerlitz.

（千八百〇五年十二月二日、卽ち彼れの戴冠式の記念日に、ナポレオン一世は、アウステルリッツで戰勝した。）

〔三格〕 Wir waren diesen Sommer in Ostende, einem vielbesuchten Badeorte Belgiens.

（われらは此夏、白耳義の繁昌する海水浴場なるオストエンデに居た；動詞 waren は靜止を示すから、in の次には三格が來る；卽ち Ostende は三格、從つて Badeort も三格でなければならぬ。）

Wir reisen nächsten Sommer in die Alpen, das höchste Gebirge Europas.

（われらは此次の夏には、歐洲の最高の山脈なるアルプス山へ旅行する；die Alpen と das Gebirge とは同格で、共に四格である；reisen は運動をあらはすから、in が四格を採るのは當然である。）

(C) 前揭諸種の同格とは異なつて、前行文の內容を總統して、これに對して同格的意味に於て立つ一個の名詞がある。これも廣義に於て Apposition と云はれるが、この種のものは、定冠詞又は不定冠詞を有して、いつも一格に立つのである。例へば、Leonidas beschloß, mit seinen Spartanern die Thermopylen nicht zu verlassen, ein ebenso notwendiger, wie heldenmütiger Entschluß.（レオニーダスは彼れのスパルタ人と共に、テルモピューレーンを棄てまいと決心した、これは必要であり勇敢でもある決心であつた；此 ein.....Entschluß は、前文の意味を總括してあらはしたものである。）又 Pappenheim starb gleich am folgen-

den Tag zu Leipzig an seinen Wunden, ein entsetzlicher Verlust für das Heer. (バッペンハイムはすぐ翌日ライプチッヒでその傷のために死んだ、それは軍隊のためには一つの大損失であつた; ein entsetzlicher Verlust 云々は、勿論前文の意味を總括して、これを解說したものである。) 以上の二つの例は、不定冠詞を持つて居るが、意味によつては、勿論定冠詞もあり得るのである。

【註】 I. 書物や詩文の題となつてゐる同格名詞は、變化しない。例へば、der Inhalt von Schillers Drama Don Karlos, Infant von Spanien (シラアの戲曲、西班牙の王子•ドン•カルロスの內容) の如きである。之に對して der Charakter des historischen Don Karlos, Infanten von Spanien (歷史上の西班牙の王子•ドン•カロルスの性格)の如きである。之に對して der Charakter des historischen Don Karlos, Infanten von Spanien (歷史上の西班牙の王子•ドン•カルロスの性格) に於ては、本の表題ではないから、Infant が變化する。又 Wir lesen einen Auftritt aus „Nathan der Weise". (われらは〔レッシングの作〕『賢者ナアタン』の一場面を讀む。) や、ein Teil des Gedichtes „die Glocke" (『鐘』といふ〔シラアの〕詩の一部分) などもさうである。大抵は後二者のやうに、引用符 (Anführungszeichen [N.], Quotation-mark) をつけるが、第一の例のやうに、それのないのもある。

【註】 II. 前行名詞がいくつかあつても、これに後續すべき同格的意義の名詞の前に、前行名詞を總括すべき beides とか、alles とか、sämtlich (すべては) とかがあるときには、次の同格的意義の名詞は變化しない。例へば Wir waren längere Zeit in Hamburg, Bremen, Stettin, Danzig und Königsberg, alles große Hafenplätze Deutschlands. (われらは暫らくの間漢堡やブレーメンや、シュテティンやダンチッヒやケエニッヒスベルヒなど、獨逸の大きな港場に居ました。)に於て große Hafenplätze は一格形で

あるが、もし alles がないときには、Wir waren.....Königsberg, den großen Hafenplätzen Deutschlands. となり、Hafenplätze の格を、Hamburg 以下の地名と同格にしなければならぬ。——此場合 alles の代りに sämtlich を用ゐても同じである。

【註】 III. 曜日のうしろに、同格の意味に於て置かるべき日附は、形に於ても同格にすべしといふ議論と、これを二個の副詞的規定 (一は前置詞附き、他は四格) と考へてよいと云ふ說と、二つある。前者は am Dienstag, dem 3. April (火曜日即ち四月三日) の形でなければならぬと主張し、後者は am Dienstag, den 3. April でよろしいとする。即ち後の den 3. を副詞的四格だと見るのである。われらは議論の正否は別として、前者の例にならつたら、疵がなくてよからうと思ふ。

(D) 同格はまた als (wie, nämlich) 等を戴くことがある。これを非純粹同格 (unreine Apposition) と稱する。これは勿論それの關係する詞と同一の格に於て立つものである。此種のものにあつては、普通定冠詞をつけない。例へば、Ich rate dir als gutem Freund. と云へば、dir と gutem Freund とは同格であるから、同一人物を意味し、『私は親友たる君に忠告する』義となり、Ich rate dir als guter Freund. と云へば、ich と guter Freund とは同格であるから、同一人物を意味して、『(君の) 親友たる私は君に忠告する』義となるのである。同樣に Mir als seinem Freunde teilte er dies mit. は『彼は彼の親友としての私にこの事を告げた』義であり、Als mein Freund teilte er mir dies mit. は『私の友人としての彼は、私にこれを告げた』義になるのである。又 wie の例は、Sie liebten ihn wie einen Vater. (彼等は彼を父のやうに〔父ではないが〕愛した) であり、nämlich の例は、Er setzte einen seiner Verwandten, nämlich seinen Neffen zum Erben. (彼は彼の親戚の一人を、卽ち彼の甥を、相續人に定めた) である。——旣述の通り、

定冠詞は普通はないが、あることもなくはない：Wir sind den Eltern als den Vertretern Gottes Gehorsam.（われらは神の代表者としてを兩親に從順である。）

17. 副詞（Adverb [N.]）は元來、形容詞・動詞又は他の副詞を規定するために使用されるものだけれど、場所（Raum [M.]）、時間（Zeit [F.]）又は理由（Grund [M.]）を云ひあらはす副詞は、直接に、或は前置詞を伴隨して、名詞に附いて、附加語の働らきをする。此場合大抵は後ろに立つが、稀れには前に立つこともある。例へば mein Nachbar rechts（右隣りの人）、der Hut dort（あそこにある帽子）、das Haus drüben（あちらの家）、der Flug nach oben（上方への飛行；nach は前置詞で、oben が副詞である）、der Ball gestern（昨日の舞踏會）、sein Brief von gestern（彼の昨日の手紙；）——又前行するものは、Dort der Hollunderstrauch verbirgt mich ihm [Schiller].（あそこにある接骨木の叢が私を彼に對してかくす[シラア]）。

【註】副詞の附加語は、本來は名詞に附屬せる副文章の一部のみが殘つたものである。例へば、das Buch hier（こゝにある本）は、元來 das Buch, das hier ist（こゝにあるところの本）から來たものであり、der Weg herunter（こちらへ下りて來る道）は、der Weg, der herunter führt（こちらへ下の方へ通ずる道）から來たもので、das hier ist も、der herunter führt も、共に、關係文章（Relativsatz [M.]）である。

18. 動詞の不定法（Infinitiv [M.]）に zu (to) を附したるものも、附加語として使用される。これは二格の名詞又は前置詞を有する名詞でもつて書き換へ得るものである。例へば、Die Kunst zu schreiben ist alt.（書く術は古い。）に於ては、zu schreiben は die Kunst につく附加語であつて、此 zu schreiben はまた des Schreibens としてもよい。即ち die Kunst zu schreiben は、die Kunst des Schreibens と同義である。而して des Schreibens は云ふまでもなく、二格の附加語である。又 Die Neigung zu verschwenden hat seinen Ruin beschleunigt.（浪費する性癖が、彼の沒落をはやめた。）に於て、zu verschwenden の代りに zum Verschwenden を使用して、die Neigung zum Verschwenden とすることが出來る。而して zum Verschwenden は前置詞を有する附加語である。又 Ich habe heute keine Lust zu studieren.（私は今日は勉强する氣がない。）に於ても Lust zu studieren の代りに、Lust zum Studieren とすることが出來る。

【註】I. 此不定法にいろいろの規定や補足語の附いたものは、廣義に於ては、同じく附加語と見ることが出來るけれど、これは、元來それが規定する名詞に屬する副文章（所謂附加語〔的副〕文章〔Attributivsatz〕）の短縮されたもので、上揭のやうな單純なものとは、異なるから、それらは後に複合文章のところで、說くことにするが、今その一二の例をあげるなら、Die Kunst, weise und gut zu leben, will gelernt sein.（賢明で且つ善良に生活する術は、學ばれなければならぬ；gelernt sein wollen=gelernt werden müssen）と云ふ文章に於ては、die Kunst, weise und gut zu leben は、die Kunst, wie man weise und gut leben kann の意味であり、從つて前者は wie 以下の副文章の短縮（verkürzen）されたものである。又 Er hatte keine Lust, sich mit vieler Arbeit zu beschweren.（彼は多くの仕事で自らを煩はす氣はなかつた。）に於ては、keine Lust, sich mit vieler Arbeit zu beschweren は、keine Lust, daß er sich mit vieler Arbeit beschwert と同義であるから、前者は daß 以下の副文章の短縮されたものである。從つてかく複雜したものは、後の複合文章の條で說くことにする。

【註】II. 上揭の註に關聯して云ふべきことは、副文章もまた附加語

的關係に於て、一個の名詞に附屬し得ることである。例へば die Hoffnung, daß wir ewig leben, ist tröstlich. (われらが永久に生きると云ふ希望は、慰めを與へるものである。) に於ける daß wir ewig leben は die Hoffnung に對して附加語的關係を有するのであり、Das Buch, das hier ist, gehört meinem Bruder. (こゝにある本は私の兄弟のものだ。) に於ける das hier ist は das Buch に對して附加語的關係に立つのであるが、これは複合文章中附加語文章のところで取り扱ふべきである。

19. 冠詞 (Artikel [M.]) も亦、嚴密に云ふときは、附加語と認められ得るけれど、通常は名詞に附屬するものと見做して、特にこれを分けて附加語だと區分はしないことになつて居る。從つて文章中の名詞に冠詞があつたからとて、これを修飾 (擴大) 單文章だとは云はない。然し定冠詞は指示代名詞 der, die, das から來たものであり、不定冠詞 ein, eine, ein は數詞 ein から來たものであることを考へるとき、附加語的意味を有するものである事は解るし、名詞でも意味により場合によつては、無冠詞なることがあり得ることを考へるならば、冠詞が名詞に對して絶對的に附隨するものでないこともわかるであらう。

さて此附加語的のものとして、最も輕やかな示別を與へるものは、未だ云ひあらはされぬもの、又はなほはつきりときめられて居ない個體をあらはすものとしての不定冠詞 (der unbestimmte Artikel) である。定冠詞 (der bestimmte Artikel) は之に反して、既に云はれたもの、或は既に精しく規定されたものを指すものであることは、いづれの文典も教えてゐるから、こゝで詳しく再說することもあるまい。

Es war einmal ein Kind, und seine Mutter war krank, da ging das Kind hin. (昔し子供があつた、その母が病氣であつた、そこでその子供はやつて行つた; 突然あらはれたときは

不定冠詞で、之を受ける時は定冠詞たる事をあらはす例。)

Leute, die eine große Wohltat gleich ohne Bedenken annehmen können, sind der Wohltat selten würdig. (大きな親切をいきなり考へずに受け容れることの出來る人は、その親切にふさしい人であることは稀れである; der Wohltat は、eine große Wohltat をうけて、これを他の同じものから區別する役を、して居るのである。)

【註】 I. もつとも定冠詞の受けるものは、言葉の上で既に云ひあらはされた確定のものたるを要しない。前からの關係上、觀念のなかで、既に定まつてゐるものでもよい; 例へば、Das Kind geht zum Teich und füttert die Fische. (その子供は池へ行つて、魚に餌をやる; 此場合は、zum Teich と云はれてゐる池の觀念が、一定の魚の觀念をよび起したのである。)

【註】 II. 定冠詞は、その指示代名詞的の意味に於て、又これから話の題目となるべき人物や事柄をも指すことが出來る。物語の冒頭に、いきなり人間や事物・動物などが定冠詞を帶びてあらはれるのは、この意味だと考へてよい時がある。

【註】 III. 不定冠詞は、未知の個性をあらはすものだと云ふ意味に於て、今云はれてゐる客體は、これまで云はれたものとは異つてゐると云ふ意味をもあらはすのである。即ち前にあげられたものとは、無關係だと云ふ事を、あらはし得るのである。

又定冠詞は、その種屬全體を、他の種屬より區別するものとして、その種屬全部に對する批判を示し、不定冠詞は、その種屬中より、どれにても一個を取り出して、種屬全部を代表せしめる。かくして同じやうに、種屬全體に關する批判をあらはすことが出來るのである。例へば、Ein Mensch ist in seinem Leben wie Gras. (人間はその生涯ちう草の如きものだ; As for man his days are grass.) と云ふのは、任意の一人の人間を出し

て、全體を代表させてゐるが、Der Mensch ist sterblich. (人間は死ぬものだ。)と云ふ文章では、der Mensch は「人間」と云ふ種屬を代表してゐる。尤も定冠詞を複數にして、種屬を代表させたり、不定の多數を以て全體を代表させたりすることも出來る。例へば、Die Menschen sind sterblich. とも云へるし、Kinder und Narren sagen Wahrheit. (子供や愚人は本當を云ふものだ) とも云へるのである。

冠詞の意義や用法について、より詳しく知るためには冠詞發生の理由から、その用途の沿革について語らねばならず、かやうなことは、實用上には大して益のないことだから、大體の說明は、如上の程度に止めて置き、實用上の心得について、次に少しく述べて見ようと思ふ。

20. 冠詞の用法

i) 二個又はそれ以上名詞が並列される時、性•數が同一なる場合には、それらが一個のものと見做される恐れなき限り、第一のものにのみ、冠詞を附ける。

Der Löwe, Tiger, Bär und Leopard sind Raubtiere.
(獅子と虎と熊と豹は猛獸である。)
Der Vater und Sohn sind ausgereift.
(父と息子とが出立した。)

【註】同一人又は同一のものだと思はれる恐れのあるときには、冠詞は、これを繰り返へす。例へば der dritte und letzte Band と云へば、第三卷にして最終卷なるもの (即ち一册) を指し、der dritte und der letzte Band と云へば、第三卷目と最終卷とを (即ち二册) を指すのであつて、der Lehrer und Nachbar と云へば、一人を意味し、der Lehrer und der Nachbar と云へば、二人を指す。かく混同される恐あるときには、冠詞でもさうである通りに、物主代名詞も、これを繰返へすべきである。例へば sein

Lehrer und Nachbar と云へは一人で、sein Lehrer und sein Nachbar と云へば、二人である。これはまた定動詞の數にも影響して、後者ならば、定動詞は複數、前者ならば、單數なことは勿論である: Der Lehrer und der Nachbar sind krank. (先生と隣人とが病氣だ); Der Lehrer und Nachbar ist krank. (先生で且つ隣人たる人が病氣である。)

ii) 數多の名詞が、たとへ性及び數に於て一致して居ても、對照的に、全く相異なれる種類のものが枚擧されてあるときには、定冠詞はわざと各々の名詞につける。

Der Oberzeremonienmeister, der Schweinhirt, der Millionäre, der Bettler — alle sind sterblich. (式部長も豚飼ひも、百萬長者も乞食も — みんな死ぬものである。)

Das gleiche Los des Herrn und des Diners (主人と召使との同じ運命; これを des Herrn und Dieners としてはいけない。)

iii) いくつかの名詞の性•數が相異なるときは、勿論冠詞を反覆する。

Das Schaf, die Katze, der Hund und das Pferd
(羊と猫と犬と馬; 各性を異にして居る。)
Der Vater und die Söhne sind abgereist.
(父と息子たちとが出立した; 數がちがふ。)

【註】I. 前揭 iii) とは反對に、相異なる性のものにあつても、敍述に大なる生氣 (Lebendigkeit [F.]) を添へんがために、わざと冠詞を略することがある。但しこの場合、略しても意味の明瞭さに於て、缺けるところなきことが、條件である。In seinem Antlitz war Hoheit, Seelenruh', Ernst und Erbarmen. (彼のおもてには、尊貴と心の安靜と眞摯と而して憐憫とがあつた; Hoheit は女性、Seelenruh(e) も同樣; Ernst は男性; Erbarmen は中性である。)

【註】 II. 性•數を異にしても、相伴的聯關を有するもの、又は對立的關係を有するものは、全く無冠詞で使用されることがある。例へば、Tinte und Federn (インキとペン〔複〕) は第一の例である。——但し die Tinte und die Federn と云つてわるい事は決してないが、冠詞のない方が、相伴的の意味が顯著である。——又 Himmel und Erde (天地) の如きは、第二の例である。Rock und Mütze (上衣と帽子)、König und Königin (王と王妃)、Vater und Mutter (父母)、Tag und Nacht (晝夜) などは、本註に關する。但し二格に於ては、冠詞をつける; Gedenke des Vaters und der Mutter! (父母を忘れるな!)

iv) 複數名詞がいくつか連續するときは、最初のものにのみ、冠詞をつける。

Die Verwandten, Bekannten und Freunde ihrer Mannes
(彼女の夫の親戚•知人や友人たち)
Die Schüler und Schülerinren spielen auf dem Hofe.
(男生徒や女生徒たちが、庭で遊んでゐる。)

【註】 冠詞なしに、複數名詞を並べることも勿論あり得る: Dabei sind Väter, Kinder, Verwandte, Freunde, Dienstboten eingeladen worden. (その際父親•子供•親戚•友人•召使たちが招待された。)

v) 熟語•成句•格言•諺などにては、固定せる語法となつて、無冠詞のものが多い。格言•諺などは、そのまゝ用ゐればよいのであるが、熟語•成句等は、いろいろの文章中に挿入されるものであるから、よく諳誦して置いて、普通の用法と區別しなければならない。一般にこの種のものには頭韻 (Alliteration [F.]) に依るものが多い。——頭韻とはいくつかの言葉の頭字が同じな押韻法で、Mann und Maus とか Glück und Glas とか、Lust und Liebe とか云ふような形のものである。今四五の例をあげると:

Haus und Hof (家屋敷) Kind und Kegel (全家族)、über Stock und Stein (まつしぐらに)、Er speit Gift und Galle (彼は肝癪玉を破裂させる。) 又前置詞を有するものは、an Ort und Stelle (直ちに) zu Grund gehen (亡びる)、bei Gesundheit sein (丈夫である。) 〔諺〕 Salz und Brot macht Wangen rot. (パンと鹽さへあれば立派に生きて行ける。)

【註】 I. 上文所掲のものと、IV) 〔註〕 II. のものとは、關聯して記憶すべきであるが、大體かゝるものの組合せには、次のやうな順列が行はれてゐるやうである。 a) 綴の長い方のものが、後に立つ: 例へば Land und Leute (國土と人民)、Tod und Teufel! (畜生め!)。— b) 或は意味の重い又は大切な方が先に立つ: 例へば Kaiser und König (皇帝と王)、Herr und Diener (主人と召使)。— c) 積極的の意味のものは、消極的の意味のものに先行する: Für und Wider (賛否)、Liebe und Haß (愛と憎)。— d) あまり使はぬ言葉や、難解のものは先に立つ: in Bausch und Bogen (=im ganzen) (大體に於て)、Hülle und Fülle (滿山; Fülle (充實) に實義がある)。— なほ一方は、一語より成り、他方は二語より成れる時は、後者の方が、後に置かれる。例へば: Gold und edles Gestein (黃金と貴金屬)。(Behaghel)

【註】 II. und によりて連結されたるいくつかの名詞に、(1) 冠詞なきときは、前置詞を一つにして、間に合はせてよろしい。例へば Vater und Sohn (父子) の前に、von をつければ、von Vater und Sohn となり、Wald und Feld (林野) に über をつければ、über Wald und Feld となる。— (2) 之に冠詞があるときでも、兩方の冠詞が同じ形なら、前置詞は、前だけで間に合はせる: **von** dem Vater und dem Sohne, **über** dem Walde und dem Felde. — (3) 然し兩方の形がちがつてゐるなら、大抵は前置詞をくりかへす: 例へば **an** dem Ohr und **an** der Stirne (耳と額とに); **von** dem Vater und **von** der Mutter (父と母

とから)。尤もこの場合意味に差支へない限り、第二の前置詞は略してもよろしい。但し第一の冠詞が前置詞と結合して居る場合には、必らず第二の冠詞の前に、前置詞を繰り返へさなければならぬ。即ち **am** Ohr und **an der** Stirne. であつて、**am**-Ohr und der Stirne ではなく、**vom** Vater und **von der** Mutter. であつて、**vom** Vater und der Mutter ではない。—(4) 又連結するものが、und でなく、**weder**.....**noch, entweder**.....**oder, sowohl**.....**als auch.** (並びに)、**teils**.....**teils** (或は.....或は) 等であるときには、前置詞を繰り返へす。冠詞あるときは、勿論それも略されない。例へば、**entweder** über dem Walde **oder** über dem Felde (森の上か、或は野の上に); **weder** für die Kunst **noch** für die Wissenschaften (藝術に對しても、諸科學に對しても.....せぬ); **teils** mit Güte, **teils** mit Strenge (或は親切を以て、或は嚴格を以て); **sowohl** im Hause **als auch** im Hofe (家の内でも庭の中でも) などの如くである。(Weise)

冠詞の個々の用法について、より詳しく知らうと思ふものは、普通の文典の詞論「冠詞」の部、又は拙著『獨逸文法講話』三十頁乃至三十六頁を參照せられよ。

第　三　節

文章の副成分

(修飾單文章)

其　二

補　足　語

21. 補足語 (Objekt [N.], Ergänzung [F.]) とは、客語たる動詞又は形容詞の意味を補足して、これを完全ならしめるもので、これがないと、客語動詞又は客語形容詞の表現する意味が

不完全であつて、自然に聽者からの質問を誘起するのである。例へば、Die Biene stach (密蜂が刺した) と丈けでは解らない。聽者は、Wen? (誰れを?) と問かなければ、理解に缺陷を生じて、不滿足を感ずる。そこで den Knaben (男の兒を) なり、das Pferd (馬を) なりを附加すれば、この缺陷は充足される。即ち動詞 stechen は第四格の補足語を要求するのである。又 Die Tochter ist ähnlich (娘は似てゐる) 丈けでは、解りかねる。聽者は Wem? (誰れに?) と問はなければ、不滿足を感ずる。そこで der Mutter (母に) なり、dem Vater (父に) なりを入れれば、意味は充實する。即ち客語として使用されたる形容詞 ähnlich は、三格の補足語を要求するのである。

夫れ故に、補足語にも二通りあつて、一は客語動詞によつて要求されるもの、他は客語形容詞によつて要求されるものであるが、共にその性質上、その動詞なり、形容詞なりによつて、必需的に要求されるもので、これらが完全なる表現をなさんがためには、どうしてもなくてもならないものである事を、牢記して置かねばならぬ。

尤も動詞のすべてが、或補足語を要求すると云ふのでは、決してない。補足語がなくて、充分の意味を表はし得る動詞は、勿論數多くある。例へば、kommen (來る)、gehen (行く)、fliegen (飛ぶ)、stehen (立つ)、schlafen (眠る)、sein (ある)、sterben (死す) などで、これらを主語動詞 (subjektives Verb) と稱する。—〔例〕Ich komme morgen zu dir. (明日は僕は君のところへ行くよ; zu dir は副詞語である)。Mein Onkel ist vorgestern gestorben. (私の伯父は一昨日死んだ); Wo steht das Schloß des Grafen? (どこに伯爵の館はあるか?); Ich bin hier. (僕はこゝに居る)。—主語動詞に對して、何等かの補足語を要求する動詞を、すべて補足語動詞 (objektives Verb) と稱する。

但しこれらの主語動詞のうち、この動詞と同一の語源から來て、同一又は近似的の意味を有する名詞の四格を、補足語の形でもつて採ることがあるが、これは普通の補足語ではなくて、所謂**内的補足語** (das innere Objekt) と稱するものである。例へば、gehen に同語源の名詞 Gang の四格を伴はせて、Jeder geht seinen Gang. (各人は自分の道をあるく。); 又 sterben に Tod をつけて、Er starb den Heldtod. (彼は英雄的最後をとげた。); その他 Er lebt ein elendes Leben. (彼は情けない生活をする); Er schlief einen erquickenden Schlummer. (彼は元氣づけるまどろみをした。); Ich möchte bittre Tränen weinen. (私はさめざめと泣きたい。)

上に述べたやうに、補足語にも、客語動詞によつて要求されるものと、客語形容詞によつて要求されるものとある。まづ順序として、動詞に補足語から述べよう。尤も補足語については、普通の詞論で述べることになつて居るから、以下は文章學の方面から見て、必用な部分だけを說くことにしよう。

(A) 動詞の補足語

22. 補足語動詞の或るものは、一個の補足語を要求し、他のものは二個のそれを要求する。

今 〔I〕 一個の補足語を要求するものを彙類すると:

i) 二格の補足語を採るもの。
ii) 三格の 〃 〃 〃 〃 〃 〃
iii) 四格の 〃 〃 〃 〃 〃 〃
iv) 前置詞を有する 〃 〃 〃

となる。

i) 二格の補足語を採るもの。

例へば: Er bedarf (彼は要する) 丈けでは解らぬから、聽者は Wessen (何を)? と問ふ。之に對して、例へば deines Beistandes (君の援助を) と云へば、文意は完成する。此 deines Beistandes が、二格補足語 (Genitivobjekt [N.]) である。Wir gedenken der Freunde. (われわれは友人たちを偲び出づる。); Vergiß mein nicht! (私を忘れるな!; mein は ich の二格 meiner の語尾を略したもの); Der Diener harrte des Befehls. (召使は命令を待つてゐた。)——以上は自動詞の例であるが、再歸動詞にも二格を要求するものがある: Die Feinde bemächtigten sich der Burg. (敵は城塞を占領した; 此 sich は勿論四格である); Der Knabe schämte sich seiner Torheit. (男の兒は自分の愚を恥じた。); Ich enthalte mich der Abstimmung. (私は投票を棄權する。)

【註】 I. 四格を要求する動詞を、他動詞 (transitives Verb) と稱し、再歸代名詞を採る動詞を、再歸動詞 (reflexives Verb) と名づける。そして動詞の全體から、この二種を控除したものを、自動詞 (intransitives Verb) と名づける。二格の補足語でも、四格の補足語でも、邦語に譯すると、みな「を」となるから、二格支配の動詞は特に注意して覺えて置かればならぬ。

【註】 II. 二格補足語は、古くは數多くあつたが、今ではその形があまり古めかしいために、二格補足語の代りに、四格を採つたり、前置詞をつけた補足詞を要求したりする事の方が、より普通になつたものが隨分ある。例へば、warten (待つ) と云ふ動詞は、古くは普通に二格を取つて、Sollen wir eines andern warten? (我々はは別の人を待たなければならないのか?) などと云つたものだが、今では Sollen wir auf einen andern warten? と云つて前置詞 auf を有する補足語を採らせる。又 schonen (いたはる) と云ふ動詞は、Schone seiner (二格)! (彼をいたはれ!) などと使つたものだが; 今は普通に Schone ihn (四格)! と云ふ。

【註】 III. 然し二格は、四格が全體を示すに對して、部分を示すことがある；Er aß das Brot. と云へば「彼はそのパンを食べた。」であるが、Er aß des Brotes. と云へば、その一部を食べたことになる。かゝる補足語を、**部分を示す補足語** (partitives Objekt) と名づける。

ii) 三格の補足語を採るもの。

これは、二格のものが、Wessen? の問に答ふるものであるのに對して、Wem? (誰れに、何に?)の問に答へるものである。例へば、Das Bild gefiel (畫は氣に入つた) 丈けではわからない。これに對して聽者は、Wem? (誰れに?) と問ふにちがひない。そこで mir (僕に) と云へば、文意が完全する。此 mir を**三格補足語** (Dativobjekt [N.]) と稱するのである。この種の動詞は頗る多い。例へば：Wir folgten dem König. (われらは王に從つて行つた。)；Der Soldat dient dem Vaterland. (兵士は祖國に奉仕する。)；Ich glaube den Worten des treuers Freundes. (私は忠實な友人の言を信ずる。) などであるが、これも悉しくは、上揭の個所を見るがよい。

【註】 この補足語は、一部は「に」と譯され、一部は「を」と譯される。例へば「僕は彼を助けた。」は、獨譯すれば、Ich habe ihm geholfen. である。これを ihn としてはいけない。上にあげた glauben もその一例で、邦語とちがふものは、矢張注意して、その差異を覺えて置かればならぬ。でないと einen glauben などと云ふ事になるのである。

再歸動詞で更に三格を要求するものもある。例へば、Er hat sich der Militärpflicht entzogen. (彼は兵役義務を忌避した。)；Er hat sich dem Spiel ergeben. (彼は諸博に耽つた。) の如きものであるが、これはあまり數多くはない。

iii) 四格の補足語を採るもの。

四格の補足語を採る動詞は、Wen? (誰れを?) Was? (何を?) の問に對するもので、Der Vater schickte (父は送つた) 丈けでは、表現が不充分で、上揭のやうな質問が出るときまつて居るから、これに例へば das Buch なりを入れて、意味を完全にする。これが**四格補足語** (Akkusativobjekt) である。この種の動詞は數多い。Der König besiegte **die Feinde.** (王は敵を征服した。)；Das Volk begrüßte **den Fürsten.** (民衆は公爵に敬禮した。) Er tadelt **uns.** (彼はわれらを非難する。)；Der Steuermann lenkt **das Schiff.** (舵手が船をあやつる。)

【註】 此格は邦語では、大抵「を」と譯されるけれど、上揭 begrüßen の要求する四格の如く「に」と譯されるものもある。

iv) 前置詞を有する補足語を採るもの。

例へば、Wir hoffen (われらは待望する) と云ふ丈けでは、待望されてゐるものが解らない。これに對して **auf** bessere Tage をつけると、「われらはより良き日を待望する。」となつて、意味は完成する。この auf bessere Tage の如きものを、**前置詞を有する補足語** (Präpositionales Objekt) と稱する。此例をあげると、Er fragte **nach dem Weg.** (彼は道をたづねた。)；Ich glaube **an Gott.** (私は神を信ずる。) Ich warte **auf meinen Freund.** (私は私の友人を待つてゐる。)；Der Vater sorgt **für seine Kinder.** (父は子供たちの世話をする。)

【註】 これらの補足語は、動詞と連結して記憶するがよい；例へば hoffen 一字を覺える代りに、auf etwas hoffen とつづけて覺えるのであるが、こゝに注意しなければならぬのは、三格又は四格を支配する前置詞を頂く補足語についてであつて、同じ auf なり

an なりを有して居ても、それらの支配する格が、動詞によつて異なるのである。例へば an etwas sterben（云々の病で死す）に於ける an は三格を支配するけれど、an etwas denken（或物を考へる）に於ける an は四格を支配する如きである。だからかう云ふ種類の動詞にあつては、an なり auf なりの支配する格までを、暗記することが必要である。

再帰動詞のなかにも、前置詞を有する補足語を要求するものがある。例へば sich schämen（恥ぢる）は、四格を支配する über を有する補足語を要求し、sich gewöhnen（慣れる）は、四格の an を有する補足語を必要とする：〔例〕Er schämt sich **über seine Unwissenheit.**（彼は彼の無識を恥ぢる；但し sich schämen は、古くは二格を支配したもので、今でも上掲の文の代りに、Er schämt sich seiner Unwissenheit. とも云へる）：Im Winter muß man sich **an die Kälte** gewöhnen.（冬には人は身體を寒さに慣らさなければならぬ。）

23. 補足語動詞のうち、

〔II〕 二個の補足語を要求するものを彙類すると：

i) 四格と二格を要するもの。
ii) 四格と三格とを要するもの。
iii) 二個の四格を要するもの。
iv) 四格と前置詞を有する補足語を要するもの。

以上の四種となる。今順次に之を説明すると：

i) 四格と二格とを要するもの。

この場合、大體人は四格に於て、物は二格に於てあらはれる。例へば berauben は此例で、Die Brüder beraubten（兄弟共は奪つた）の次には、人の四格卽ち Joseph, 事物の二格、卽ち des Rockes が來て、Die Brüder beraubten **Joseph** des Rockes

（兄弟共はヨーゼフの上衣を奪つた。）とする。又 Der Fürst hat ihn（人の四格）des Amtes（物の二格）entsetzt.（君主は彼の官職を免じた。）; Man hat **ihn eines Mordes** angeklagt.（人は彼に殺人の罪ありとして訴へた。）などがその例で、受働形ではこの種のものは、能働形の四格が一格となり、二格はそのまゝに殘留する。例へば最後の例を、受働で云へば、Er ist **eines Mordes** angeklagt worden. である。

【註】 I. 二格の補足語の條で述べたとほり、二格形なるものは、古めかしい感じを與へるので、本項の場合でも、補足語に或前置詞を載かせることが、よくある。例へば überführen（白狀させる）と云ふ動詞は、Der Richter **überführte ihn** seines Verbrechens.（裁判官は彼に服罪させた。）とするのに對して、seines Verbrechens の代りに **von seinem Verbrechen** を使用したり、Er hat **den Knecht des Dienstes** entlassen.（彼は男に暇をやつた）に於て、des Dienstes の代りに **aus dem Dienste** を使用したりする。

【註】 II. 兼に、四格を取るものを他動詞といふと定義したが、或動詞が四格の外に、二格を取らうと、三格を取らうと、或は前置詞附きのものを採らうと、それらはすべて他動詞である。

ii) 四格と三格とを支配するもの。

この種類にあつては、四格は大抵物を、三格は大抵人をあらはすのであるが、之に屬する動詞は多數である。例へば Der Vater hat **dem Sohne**（人•三）**ein Buch**（物•四）gegeben.（父は息子に本を與へた）; Der Diener öffnete **uns**（人•三）**die Tür**（物•四）。（召使はわれらに戸を開けて呉れた。）などで、これはありふれてゐるから、多く云ふ要はない。

iii) 二個の四格を支配するもの。

これに二種類あつて、(A) その一つはこれまで述べたすべてのものと同じ意味に於ける補足語で、一は人をあらはし、他は物を示すものである。例へば lehren は、教へられる人も、教へられる事物も、共に四格であらはされる。即ち「私は彼に畫を教へる。」は、Ich lehre **ihn die Malerei.** となり、kosten にあつても、Das kostet **dich dein Leben.** (それはお前にはお前の生命に價する。) となつて、二つとも四格であるが、この種は甚乏しい。

【註】 I. 一つの四格は人であるが、他の四格が、中性代名詞又は不定代名詞であるときに限り、本項の形式を用ゐる動詞もある。Er fragte **mich etwas.** (彼は僕に或ことをたづねた; fragen は通常 einen (人の四格) nach etwas fragen 〔或人に或事を問ふ〕 の形で使はれる); Kannst du **mich das** heißen? (君は僕にそれを命ずることが出來るかね?; 普通は、einem etwas heißen 〔或人に或事を命ずる〕の形で使用される); Bitte **mich** alles in der Welt, nur **das** nicht! (どんな事でも僕にたのみ玉へ、たゞそれ丈はたのみ玉ふな 〔御免だ〕!) の如きである。

【註】 II. 註 I. にかゝげたものは、或極限された場合に使用されるものであるが、本項所掲の lehren, kosten も今や漸次形を變じて、人の三格と物の四格とを取るやうに傾きつつある: 即ち、Ich lehre **ihm die Malerei.** Das kostet **dir das Leben.**

【註】 III. 二個の四格を支配する場合の lehren を、受動形へなほす場合には、いろいろの形がある。例へば、(1) Ich werde das 〔四〕 nicht gelehrt. (2) Das 〔一〕 wird mich nicht gelehrt. などであるが、共に可笑しい。矢張 〔註〕 II の形を基として、Das wird mir nicht gelehrt. とするがよろしい。

さて四格を二個要求する第二の種類は、(B) その一つが眞の補足語であつて、他はこの補足語の客語たる價値を有するもの、即ち所謂補足語的客語 (objektives Prädikat) (或は客語四格

prädikativer Akkusativ とも云ふ) に過ぎざる場合である。例へば、Sie nannten ihn einen Verräter. (彼等は彼を裏切者といつた。) に於ては、(A) の二個の補足語とちがつて、einen Verräter は ihn に對して客語の價値を持つ (即ち、Er ist ein Verräter. である) にすぎない。かゝる種類のものは、nennen (名づける)、heißen (同)、schelten (罵る)、schimpfen (同)、taufen (洗禮名を與へる) 等である。例へば:

Man schilt **ihn einen Narren.** (人は彼を馬鹿と罵る。)
Warum heißt ihr **mich euren Herrn?** (何故に汝等はわれを、汝等の主なりと云ふや?)

【註】 I. (B) 種のものは、他の補足語と、かくの如く異なるが故に、或文法家は、この種の動詞を、二個の四格補足語を要求するもののうちには、算入して居ないのである。

【註】 II. (B) 種の補足語的客語としては、名詞以外のものも使用されることがある。例へば、

i) 動詞の不定法: Ich sehe ihn **laufen.** (私は彼れの走るのを見る; =Ich sehe, daß er läuft. なることを思ひ合せよ); Ich höre Vögel **singen.** (私は禽類の囀ずるのを聞く。)
ii) 動詞の分詞: Ich sehe ihn **laufend.** (=laufen の現在分詞); Ich fand den Hund **getötet.** (私は犬が殺されてゐるのを見出した; Ich fand, daß der Hund getötet war (od. wurde); 過去分詞)。
iii) 形容詞: Ich preise ihn **glücklich.** (私は私を幸福だとほめたゝえる); Ich fand ihn **krank.** (私は彼の病氣なのを見出した; =Ich fand, daß er krank war).

【註】 III. (B) 種のものは古くは、可成り多かつたが、今に殘留せるものは、本文所掲の數語にとゞまり、他は前置詞 zu, als, für 等を取ることになつた。例へば、machen は古くは、Wer wird

mich Ritter machen? 誰れが私を騎士にするだらうか?) に於けるやうに、二個の四格を採つたのであるが、今では machen は einen zu etwas machen の形で、使用されるから、zum Ritter と云はなければならぬ。又 halten は「考へる」と云ふ意味に於て、二個の四格を取つたものである: Ein jeder soll sich (四格) den untersten halten. 〔Luther〕 (各人は自らを、最も下級なものと考ふべきである。)〔ルテル〕——然るに今では、此意味に於ける halten は、einen für etwas halten の形で用ゐられる。故に現今では、für den untersten と云はなければならぬ。又 ansehen (見做す) も、この種類で、今では als 又は für を一方に採るのである: Wir sehen es als eine Ehre an. (われわれはそれを一つの名譽だと考へる。); Für wen sehen Sie mich an? (貴君は私を誰れだと思ひますか?)——その他、この種類は少くはない。

iv) 四格と前置詞を有する補足語とを採るもの。

例へば、Die Gesandten baten den König (使節たちが王に乞ふた) 丈けでは、何を乞ふたのかわからない。そこで um Frieden (平和を) を入れて文意を完全にする。かく一個の四格の外に、前置詞づきの補足語を要求する動詞は、少くはない。かゝる動詞については、いつも聯想的に自然に出るように、人又は物の四格と前置詞と動詞とを結合して覺えて置く。例へば einen um etwas bitten (或人に或ものを乞ふ)、etwas in etwas 〔A.〕 verwandeln (或ものを或ものに變へる)、einen mit etwas versehen (或人に或ものを供給する) などとつゞけて記憶し、且つ an, auf, in, vor, über 等の支配する格にも留意することが必要である。なほ二三の例をあげれば、Der Reisende fragte mich nach dem Wege. (旅する人は私に道をたづねた。einen nach* etwas fragen); Ich erinnere ihn an sein Versprechen.

(私は彼に彼の約束を想起させる; einen an* etwas 〔四〕 erinnern); Oft habe ich ihn vor dieser Frau gewarnt. (屢私はこの婦人に對して彼に警告を與へた; einen vor einem 〔三〕 warnen) などである

【註】 fragen が einen um etwas fragen となるときは、「或人に或事を乞ふ」義となり、erinnern が再歸代名詞を採るときは、(自分が) 思ひ出す、記憶することに用ゐられる。それらは區別して覺えなければならぬ: Er hat mich um Rat gefragt. (彼れは私に助言を求めた); Ich erinnere mich an ihn. (私は彼を思ひ出す。)

二個の補足語を採る動詞は、普通上掲の如く、四種に區別せられるけれど、此外に、

v) 一個の三格と前置詞を有する補足語とを要するものを擧げる文法家がある。それは、例へば einem zu etwas raten (或人に或事をすすめる)、einem zu etwas dienen (或人に或役に立つ) の如きものである。〔例〕 Er dient mir zum Spaß. (彼は私の慰みものだ。) Er riet mir zu Flucht. (彼は逃亡するやうに私に忠告した。)

【註】 此種のものは、前置詞を有するものが、單なる副詞的規定としても、解釋され得る觀があるためか、普通の文法家は、特に此項を立てることを敢えてしてゐない。

24. 動詞の補足語としては、別になほ、非人稱動詞のそれがある。(A) 四格の補足語を採るものは、例へば、es hungert mich. (私は空腹である)、es dürstet mich. (私は渴してゐる)、es friert mich. (私は凍える。) のやうなもので、これにはまた (a) 二格の補足語を取るもの; Es erbarmt mich dieser armen Frau. (私は此氣の毒な婦人をあはれに思ふ。); Es jammert

mich **des Unglücken.** (私はその不幸な人に深く同情する。)—(b) 前置詞を有する補足語を採るもの: Es dürstet mich **nach seinem Blut.** (私は彼れの血に渇してゐる。) があり、(B) 三格の補足語を採るものには、例へば、es träumt **mir.** (私は夢みる)、es graut **mir.** (私は恐ろしい)、es ekelt **mir.** (私はいやで、嘔氣を催す) などがあり。これには更に、前置詞づきの補足語を要求するものがある。例へば、Es graut mir **vor ihm.** (私は彼が恐ろしい。); Mir hat **von diesen Taten** nur geträumt. (私はこれらの行爲について一寸夢みたばかりだ。) —— なほ缺乏を示す動詞 mangeln, fehlen, gebrechen は、非人稱の主語 es を取り、缺乏を感ずる人の三格と、缺乏するものを示す an＋三格とを取る: Es fehlt **uns** (三) **an frischem Wasser.** (われらには新鮮な水が缺乏する。) —— これらについての詳細は、詞論「非人稱動詞」の項、又は拙著『獨逸文法講話』381—386 を見られよ。

〔B〕 形容詞の補足語

25. 形容詞の採る補足語は、次の種に區別される。

i) 二格なるもの。
ii) 三格なるもの。
iii) 四格なるもの。
iv) 前置詞を有するもの。

これを順次に概說すると:

i) 二格を要求する形容詞。

例へば mächtig と云ふ形容詞は、「或ものを自由にする」「或ものを支配する」といふ意味に於て、einer Sache 〔二格〕 mächtig sein の形で用ゐられる。即ち Er ist **des Englischen** vollkom-

men mächtig. と云へば、「彼は英語が全く自由だ。」の義である。他の例: Ich bin **des Lebens** und **des Herrschens** müde. 〔Schiller〕 (私は生にも統治にも倦んでゐる。); Er ist **des Beistandes** bedürftig. (彼は援助を要する。)—— 然し此種に屬するものの中には、同じ意味に於て、(a) 前置詞を採り得るものと——(b) 四格を採り得るものとがある。例へば frei (自由な; free) は、Er ist **aller Sorgen** frei. (彼は何等の心配なし。) とも、Er ist frei **von allen Sorgen.** とも使はれる。又 froh (よろこんで) は、二格と共に **eines Dinges** froh sein (或ものを喜んでゐる) とも、**über ein Ding** froh sein とも云へる。第二 (即ち b) の例は、例へば gewohnt (慣れて) は二格と共に用ゐられて、**Einer** solchen **Behandlung** bin ich nicht gewohnt. (かゝる取扱には、私は慣れてゐない。) とも、**Eine** solche **Behandlung** bin ich nicht gewohnt. とも使用する如きである。又 wert (價して) は、實際の價のときには四格を、比喩的の價のときには二格を採る: Er ist **des Lobes** wert. (彼は褒める値がある。); Das ist **keinen Pfennig** wert. (それは一文の價もない。)

【註】 前掲 gewohnt の如きは、實は眞の形容詞ではなくて、gewohnen (慣れる) の過去分詞であるが、この場合、他の形容詞と同樣に取扱はれる。又この種に屬して、eines Dinges **benötigt** sein (或ものを必要とする) に於ける benötigt も、實は動詞 benötigen (强ゆる、迫まる) の過去分詞である。——此故に精確に云へば、本項は『二格を要求する形容詞及び形容詞的に用ゐられたる分詞 (adjektivisch gebrauchte Partizipien)』と稱すべきであらう。

序でに述べるのであるが、此項のみならず、補足語を要する形容詞について、一般に注意すべきことは、それらが裸 (ハダ

カ）の格を採るときには、この格を自らの前に置き、前置詞附きのものを要求するときは、これを自らの後ろに置くことである。尤もこれも絶對的とは云へない。口調によつては、前置詞附きのものをも、自らの前に置くこともあるし、更に進んでは倒置法によつて、これらを文頭に置くこともある（尤も文頭に置くことのあるのは、二格の補足語も同樣であるが）。——なほ詳細は詞論『形容詞』、又は拙著『獨逸文法講話』386—390を見よ。

ii) 三格を要求する形容詞。

例へば gehorſam（從順な）と云ふ形容詞は、Der Schüler iſt **dem Lehrer** gehorſam.（生徒は教師に從順である。）と云ふやうに、三格の補足語を要求する。他の例：Der Vorfall iſt mir bewußt.（その事故は私は知つてゐる。）；Sein Herz iſt dem Volke geneigt.（彼の心は民衆に傾いてゐる。）；Er iſt mir verhaßt.〔Goethe〕（僕は彼が嫌ひだ）。——此種類に屬するもののうちにも、同じ意味に於て、前置詞を採り得るものがある。例へば、Er iſt **mir** freundlich.（彼は僕に親切である。）はまた、Er iſt freundlich **gegen** mich.（彼は私に對して親切だ。）と云ふことが出來るし、Das iſt **mir** vorteilhaft.（それは私には有利である。）は、また Das iſt vorteilhaft **für mich.** とも云へる。

【註】 I. この種にも形容詞的に使はれた分詞がある。例へば上掲の geneigt は、動詞 neigen（傾く）の過去分詞であり、verhaßt は verhaſſen（憎む）の過去分詞である。

【註】 II. bewußt は、また ſich〔三〕eines Dinges bewußt ſein の形に於ても使用される；Ich bin **mir meiner Fehler** bewußt.（私は私の缺點〔過ち〕を意識してゐる）。——此場合の三格は、主語と同一のものたることを記憶せよ。

【註】 III. 前掲 bewußt とは少しく異なつて、再歸的の意味でない三格と、普通の四格とを——即ち二重の補足語を要求するものもある。例へば、ſchuldig（負債ある）と云ふ形容詞がそれで、これは einem etwas〔四〕ſchuldig ſein（或人に或ものを負ふて居る、借りてゐる）がそれである；Ich bin **Ihnen Dank**〔四〕ſchuldig.（私はあなたに御禮申さなければならぬ）。

iii) 四格を要求する形容詞。

大小・廣狹・長短・高低・輕重等をあらはす形容詞は、これらのものの程度・重量・尺度などをあらはす名詞の四格を採るのである。そしてこれらの名詞は、形容詞の前に置かれる。例へば、Der Tiſch iſt **ein(en) Meter** breit.（机は幅が一メートルだ；Meter は男性又は中性である；男性ならば einen Meter, 中性なら ein Meter であることは云ふまでもない。）Die Sache iſt **keinen roten Heller** wert.〔Schiller〕（此事件は銀一文の價値もない；wert の事については、二格のときに述べた；Heller は古への獨逸の小貨幣の名 $=\frac{1}{2}$ Pfennig = 二厘五毛。）Das Kind iſt **einen Monat** alt.（小兒は生後一ケ月である。）Dieſer Sack iſt **einen Zentner** ſchwer.（此袋は壹ツェントネルの重さがある。壹ツェントネルとは百ポンドを云ふ。）

【註】 此四格を形容詞の補足語と考へないで、單なる副詞的四格（der adverbiale Akkuſativ）と解釋する人がある。どちらでもよからうと思ふ。副詞的規定については後に述べる。

iv) 前置詞を有するものを要求する形容詞。

例へば、eitel（自負して）と云ふ形容詞は、Sie iſt eitel **auf ihre Schönheit.**（彼女は自分の美を自慢してゐる、器量自慢だ。）に於けるやうに；auf etwas〔A.〕と云ふ補足語を要求する。他の例：Das Herz war **an Wünſchen**〔三〕leer.（心には願望がな

かつた；leer=空虚で)；Er ist zu solcher **Schandtat** nicht fähig. (彼にはかゝる破廉恥な行爲は出來ない；zu etwas fähig sein 或ことをなす力、資格がある；fähig が又二格をも要求するすることは前にも述べた。) Er ist **in allem** erfahren. (彼は萬事に老練である。)

【註】 I. これにも純粹の形容詞と、形容詞的に用ゐられた過去分詞とがある。例へば上掲 erfahren の如きは、動詞 erfahren (經過する) の過去分詞である。同樣に **von** etwas überzeugt sein (或事を確信してゐる) に於ける überzeugt は動詞 überzeugen の過去分詞、**über** etwas 〔四〕 beschämt sein (或事を恥ぢてゐる) に於ける beschämt は beschämen の過去分詞；**in** etwas 〔三〕 geübt sein (或事に熟練してゐる) に於ける geübt は üben の過去分詞である。

【註】 II. 形容詞がかく補足語を採るのは、ほとんどたゞ客語的に使用される場合のみであつて、附加語的の場合には、あまり見出されないが、然しあることはある。例へば、Der Graben ist zwei **Meter** tief. (溝は二メートルの深さがある。) に於ては、zwei Meter は、客語的に使用された形容詞 tief によつて要求されてゐるけれど、Der **zwei Meter** tiefe Graben (深き二メートルの溝) に於ては zwei Meter は附加語的に用ゐられた tief に要求されてゐる。これは獨り四格の補足語に限つた話ではなく、他のものについても云はれ得る。例へば、Der Bauer ist **des** Weges kundig. (百姓は道に通じてゐる) に對して、Der **des** Weges kundige Bauer. (道に通じてゐる百姓) の如きであるが、かゝる用法は、上述の通り稀れである。

26. 格の支配、即ち補足語の形についての概說は、この位に止めて置いて、これから文章法として必要なる「**補足語の位置**」について、やゝ詳しく述べようと思ふ。まづ動詞の補足語から

初める。但し此場合、副詞的規定は論外に置き、且つ正置法に於ける語次から初めよう。

(I) 一個の補足語の場合

i) 單一時稱 (einfache Zeit; 一つの動詞のみで表はし得る時稱で、現在及過去を指す) に於ては、補足語は云ふまでもなく、客語動詞 (同時に定動詞) に後續する。

Der Knabe schlägt **den Hund.**
Das Volk gehorcht **dem König.**

但し分離動詞のときは、分離規定詞が文末に來るのは、言ふまでもない。

Die Schüler luden **den Lehrer** ein.
(生徒たちは先生を招待した；einladen は分離動詞)。
Wir hörten **seiner Erzählung** zu.
(われらは彼れの物語に傾聽した；zuhören は分離動詞)。

ii) 複合時稱 (zusammengesetzte Zeit; 助動詞を用ゐてあらはす時稱；即ち現在過去以外の時稱) に於ては、定動詞と過去分詞又は定動詞と不定法との間に來る。(英語との差異に留意せよ)。

Der Knabe hat **den Hund** geschlagen. (現•完)
Die Schüler werden **den Lehrer** einladen. (未•來)
Er wird **den Brief** geschrieben haben. (未•完)
(彼は書簡を書き終つたらう。)

iv) 動詞が說話法の助動詞を伴ふときは、單一時稱に於ては

補足語は、助動詞（定動詞）と動詞；複合時稱に於ては、定動詞と動詞と助動詞との間に入る。

Sie mögen **diesen Brief** lesen.
（貴君は此手紙を讀んでよろしい。）
Ich werde **diesen Brief** abschrieben müssen. （未來）
（私はこの手紙を寫さなければならないだらう。）
Er kann **diesen Brief** geschrieben haben.
（彼は此手紙を書いたかも知れない。）
Er hat **keinen Brief** schreiben **können**.
（彼は手紙をかくことは出來なかつた。）

(II) 二個の補足語の場合。

(a) 二個共に名詞なるとき。

i) 補足語が二個共に名詞にして、一方が人、他方が事物をあらはす時は、格の如何に關せず、人をあらはすものが先行す。

Der Bote hat **meinem Bruder** (人) **das Geld** (物) gegeben. 〔三＋四〕
（使者は私の兄弟にその金を與へた。）
Der Lehrer lehrte **den Schüler** (人) **den** richtigen **Ausdruck** (事)。〔四＋四〕
（先生は生徒に正しい表現法を教へた。）
Er beschuldigt **den Mann** (人) **des Diebstahls** (事)。〔四＋二〕
（彼はその人に竊盜の罪を負はした。）

【註】然し人を示すものが後に置かれることもある。
Die europäischen Mächte gaben **dem** befreiten **Griechenland** (物) **einen König** (人).
（歐洲の諸國は自由になつた希臘國に一人の王を與へた。）

ii) 補足語名詞の兩方が、共に人をあらはす場合には、四格が先行する。

Ich habe **meinen Sohn** 〔A〕 **seinem** neuen **Lehrer** 〔D〕 zugeführt.
（私は私の息子を彼の新らしい先生に紹介した。）

iii) 補足語名詞の兩方が、共に物をあらはす場合には、口調により、或は四格、或は三格が前行する。

Ich habe **dem Vereine** 〔D〕 **die Einladung** 〔A〕 zurückgeschickt.
（私は協會に招待狀を送りかへした；三格が先行する。）
Er hat **ein Buch** 〔A〕 **der Öffentlichkeit** 〔D〕 übergeben.
（彼は一冊の本を公にした；der Öffentlichkeit übergeben＝公けにする。）

(b) 一個が名詞、一個が代名詞なる場合。

此場合には、代名詞が先行する。

Ich habe **ihm** 〔代〕 (＝dem neuen Lehrer) meinen Sohn 〔名〕 zugeführt. （私は彼に私の息子を紹介した。）
Der Lehrer lehrte **ihn** 〔代〕 (＝den Schüler) den richtigen Ausdruck 〔名〕. （先生は生徒に正しい表現を教えた。）
Ich habe **sie** 〔代〕 (＝die Einladung) dem Vereine 〔名〕 zurückgegeben. （私はそれ〔招待狀〕を協會に返しました。）

(c) 二個共に代名詞なるとき。

i) 人代名詞は他の代名詞に先行する。
（但し再歸代名詞については後に說く。）

Der Lehrer lehrte **ihn** (人・代) (＝den Schüler) **denselben** (指・代) (＝den richtigen Ausdruck).

Seine Mittel erlauben **ihm** (人•代) **dies** (指•代)。
(彼の資產は彼れにこの事を許す。)

ii) 双方が人代名詞なるときは、通常四格が先行する。

Ich habe **sie** (=die Briefe) **ihr** (=der Post) zurückgegeben.
(彼はこれら〔手紙〕をそれに〔郵便局へ〕返した。)
Ich werde **ihn** (=meinen Sohn) **ihm** (=dem neuen Lehrer) zuführen. (私は彼を彼に紹介するであらう。)

【註】 I. 但し四格に力を籠めて云ふときは之を後に置く：Ich bedarf eines Rates von Ihnen. Wollen Sie mir **ihn** (=den Rat) geben? (私はあなたに助言していたゞきたい。あなたは私にそれ〔助言〕を與へますか？

【註】 II. 話者の感情的參與を示し、又は對者のそれを要求する意味における所謂感情的三格 (ethischer Dativ) の人代名詞は、普通輕く發音され、四格の人代名詞の前又は後に置かれる。

Schilt ihn **mir** (od. **mir** ihn) nicht, den lieben Jungen!
(あれを叱らないで呉れ玉へよ、あの可愛らしい子供を!)

iii) 再歸代名詞中四格のものは、すべての補足語に先立つ。

Ich erinnerte **mich** der Freunde (od. ihrer).
(私は友人たちを〔彼等を〕〔二格〕思ひ出した。)
Er hat **sich** 〔四〕 mir entzogen.
(彼は私から遠ざかつた。)

iv) 三格二格の再歸代名詞は、四格の他の代名詞の後に來る。

Er nahm ihn **sich** 〔三〕 zum Muster.
(彼は彼を自分の手本にした。)

【註】 四格の補足語が名詞になるときは、三格の再歸代名詞が先行する事は、云ふまでもない。

Ich getraue **mir** die Bitte.
(私はお願ひを敢えてする。)

v) 代名詞 es は、すべての補足語に先行する。但し再歸代名詞とは、前後いづれにてもよき場合がある。尤も es が再歸代名詞の後に立つときは、大抵これと縮合する。

Lehre **es** ihn (od. uns)! (それを彼(われら)に教へよ!)
Ich sagte es ihm. (私はそれを彼に云つた。)
Ich werde es mir (oder **mir's**) merken. (私はそれを覺えておかう。)
Er ließ **es sich** (od. **sich's**) gefallen.
(彼はそれを甘受した。)

【註】 es と人代名詞の三格又は四格との關係に於ても、es が後に來て、該人代名詞と縮合することがある。

Lehre **mich's** (=Lehre es mich)! (それを私に教へよ)!
Gib **mir's** (=Gib **es mir**)! (それを私に與へよ!)

但し ihn's, uns's, ihnen's の形は使はれないで、es ihr, es uns, es ihnen の形に於て使用される。 (Curme)

(d) 一個が前置詞を有する補足語なるとき。

i) 前置詞附の名詞なる場合は、他の補足語に後續する。後者(即ち他の補足語)は名詞にても、代名詞にてもよろし。

Man muß den Weisen **von einem solchen Vorwurf** freisprechen.
(人は賢者をかゝる非難から救ひ出さねばならぬ。)
Der Reiter fragte mich **nach dem Weg**.
(騎馬者は私に道をたづねた。)

ii) 前置詞附の代名詞の場合には、他の補足語に先行することもあり、後續することもある。

Deine Worte haben keinen Eindruck **auf ihn** gemacht.
(君の言葉は、彼れに何等の印象も與へなかつた。)
Er wird **auf dich** einen großen Eindruck machen.
(彼は君に大なる印象を與へるであらう。)

27. 以上は動詞の要求する補足語に就いてであるが、この項では、形容詞の要求する補足語の位置について述べよう。但しこれは、簡短にすむ。

i) 二・三・四格の名詞又は代名詞は、形容詞の前に立つ。

Der **Bote war des Weges** kundig. 〔二格〕
(使者は道案内を知つてゐた。)
Es ist **mir** vorteilhaft. 〔三格〕
(それは私に有利である。)
Dieses Haus ist **fünf Meter** hoch. 〔四格〕
(此家の高さは五メートルある。)

ii) 前置詞を有する名詞又は代名詞は、通常形容詞の後に置かれる。

Sie ist stolz **auf ihre Schönheit.**
(彼女は彼女の美をほこつてゐる。)
Ich bin frei **von allen Verpflichtungen** (od. frei **davon**) geworden. (=Ich bin **aller Verpflichtungen** frei geworden. 私はすべての義務を免れた。)
Er ist vorteilhaft für **mich.**
(=Es ist **mir** vorteilhaft).

【註】 然れども、折々前置詞を有するものが、先行する事もある：Das

Gaslicht ist **dem Auge** (od. **für das Auge**) angenehm. (ガスの光は眼に快い。)

28. 前二項に亘つての說明は、正置法に就いてであるが、特に高調さるべき一個の補足語は、文頭に抽き出され得る。然しこれは、一つの補足語であつて、二つ以上であつてはならない。——二個の補足語があつても、これらを文頭に置くことは絕對的に許されて居ない事を、邦人は牢記しておかねばならぬ。——さてかく一個の補足語が、文頭に來ると、其次に置かるべきものは、云ふまでもなく、定動詞（卽ち主語の人稱・數に應ずるもの）で、主語はかくして第三位を占めるが、その他のものの位置には影響がない。かくして定動詞を第二位とする倒置法 (Inversion [F.]; invertierte Wortstellung) が生ずるわけである。

Geld 〔四・補〕 sollte der Bote mir bringen.
(正置法：Der Bote sollte mir Geld bringen. 使者が私に金を持つて來べき筈だつた。)
Mir 〔三・補〕 sollte der Bote Geld bringen.
Der Gottlosigkeit 〔二・補〕 hat man den Sokrates beschuldigt.
(正置法：Man hat den Sokrates der Gottlosigkeit beschuldigt. 人はソークラテースに不信神の罪をきせた。)
Den Sokrates 〔四・補〕 hat man der Gottlosigkei beschuldigt.

此形はまた、補足語の一つについて問はれるところの疑問文章に於ても使用される。

Was 〔四〕 hast du getan? (君は何をしたね?)
Wem 〔三〕 hast du das Buch gegeben?
(誰れに君は本を與れたか?)

Wessen〔二〕 hat er sich getröstet?
(何を彼はたのみにしたか?; sich eines Dinges getrösten =或ものを頼みにする、或物を恃む。)

又倒置法に於て、主語が名詞なるときに限り、代名詞（又は簡單なる副詞〔こゝではこれは論じないが〕）が、主語に先行することが出來る。例へば:

Geld sollte mir der Bote bringen.
Wessen hat sich der Knabe getröstet?
(何を男の兒は頼みにしたか?)

【註】 Wessen hat sich er getröstet? の如き形は全然ない。何となれば、主語が代名詞だからである。一體かく主語の前に代名詞を置くのは、前に輕きものを置き、後に重きものを据ゑるといふ獨逸流の修辭感から來たものであるから、主語が代名詞の場合には、それが先行しなければならぬのは、勿論である。

疑問詞なき疑問文に於ては、定動詞が文頭に立つから、第二位は主語となり、他に變りは起らない。但し主語が名詞なるときは、すぐ前に述べたやうな置き換へが起り得るのである。

Hast du deinen Sohn dem neuen Lehrer zugeführt?
(君は君の息子を新らしい先生に紹介したかね?)
Hat sich das Kind vor der Strafe gefürchtet?
(子供は罰をおそれたかね?; これは Hat das Kind sich vor der Strafe gefürchtet? としても、同じである。)

第　四　節

文章の副分成

(修飾單文章)

其　三

副詞的規定

29. 副詞的規定 (adverbiale Bestimmung [F.]; Umstandsbestimmung [F.]) とは、形容詞・動詞又は他の副詞を修飾し限定するものであつて、例へば、Er arbeitet fleißig. に於ては、fleißig は arbeitet と云ふ動詞を限定し、Er ist sehr fleißig. に於ては、sehr は fleißig と云ふ形容詞を修飾し、更に、Er arbeitet sehr fleißig. と云ふ文章に於ては、sehr は副詞として用ゐられたる fleißig を規定する。副詞的規定は:

i) 副詞

jetzt (今)、hier (こゝに)、schnell (速かに)、deshalb (夫故に)。

ii) 二格の名詞

ruhigen Schrittes (ゆつくりと歩いて; ruhiger Schritt の二格)。
hiesigen Ortes (當地では; hiesiger Ort の二格)。

iii) 前置詞を有する名詞

am Morgen (朝に)、in der Nacht (夜に)、vor Kummer (悲しみのために)、mit eigenen Augen (自分の眼で)

iv) 四格の名詞

den ganzen Tag (一日ぢう)、jeden Freitag (毎金曜日に) einen halben Kopf (頭の半分の長さ丈け〔短かいとか長いとか〕)

などから成る。

【註】 I. 名詞化されたる形容詞が、前置詞を有しつつ、副詞的規定となるものがある。例へば kurz と云ふ形容詞を中性の名詞的に取り扱ひ、その前に vor をつけて vor kurzem (先日) と云ひ、weit を同様に取扱ひ、bei と組合せて bei weitem (更に)、その比較級を ohne とつゞけて ohne weiteres (端的に) とするやうなものである。

【註】 II. 前者とは少しく異つて、副詞そのものを前置詞と組み合せたものもある。例へば immer (常に) と für とを組み合せて、für immer (永遠に) とし、bis と jetzt とを連れて bis jetzt (今まで) とするが如きものである。

【註】 III. 名詞の二格が、その儘の形で、副詞となつたのもある。副詞となつた以上は、頭字を大書しない事は云ふまでもない。例へば Abend [M.] の二格 Abends をそのまゝ副詞にして abends (夕に) と云ひ、Freitag [M.] (金曜日) の二格 Freitags をそのまゝ副詞にして、freitags とするやうなもので此種類は頗多い。

さて副詞的規定を、意味の上から、大別して四種とする。

i) 時 (Zeit [F.]) をあらはすもの。

Er besuchte mich **neulich** (=vor kurzem).
(彼は先日私を訪問した。)
Ich werde ihn **in einigen Tagen** besuchen.
(私は二三日のうちに彼を訪問するでせう。)

ii) 處 (Ort [M.]) をあらはすもの。

Er ist **hierher** gekommen.
(彼はこちらへやつて來た。)

Ich werde **zu meinem Onkel** gehen.
(僕は私の叔父のところへ行くであらう。)

iii) 方法 (Art und Weise) をあらはすもの。

Der Vogel singt **schön**.
(鳥はうつくしく囀づる。)
Er richtet **nach dem Gesetze**.
(彼は掟通りに裁く。)

iv) 原因 (Grund [M.]) をあらはすもの。

Er ging **meinetwegen** zum Kaufmann.
(彼は私のために商人のところへ行つた。)
Der Knabe springt **vor Freude**.
(男の兒はよろこびのために小躍りする。)

【註】 I. もつと細かく分ける人があるが、以上の四種を廣義に解すれば、それらは大抵上の四種のうちに包含され得る。例へば、材料をあらはすものは、第四類即ち原因をあらはすものの中へ、また否定•肯定をあらはすものや、程度をあらはすものは、第三類即ち方法を示すもののなかに收めることが出來る。詳しくは、各類の項目で述べる。

【註】 II. 副詞的規定が二つ以上並んでも、その間を、英語や、特にフランス語のやうに、Komma でもつてわける必要はない。例へば、Der Löwe brüllt des Nachts (時) laut (方法) vor Hunger (原因) (獅子は夜空腹のために吼ゑる。) の如く、三個の副詞的規定が並んでも、その間にコンマを打つ必要はない。尤も好んで此 Komma をうつ人がある。例へば、Schopenhauer などがその例である。これは上に云ふたとほり必要のないことだが、時にはつけてもよい事がある。それは後に述べよう。まづ一般には、Komma はないものと心得てよろしい。また二個以上並列された副詞的規定の順序については、後に述べる。

30. 時の副詞的規定 (Adverbiale Bestimmung der Zeit) は、Wann? (いつ? When?)、或は Wie lange? (どの位長く? How long?)、又は Wie oft? (いかに屢々? 何度?; How often?) の問に答へるもので、第一のものは時點 (Zeitpunkt [M.]; 時の或一點)、第二のものは時間 (Zeitdauer [F.]; 時の繼續)、第三のものは、時の反覆 (Wiederholung [F.]; 何回か? 屢なるか? 稀れなるか? など) を表はすものである。

そこで時の副詞的規定となるものは:

i) 時の副詞

Vorgestern hat er meinen Onkel besucht. 〔時點〕

(一昨日彼は私の伯父を訪問した。)

【註】 此文章では、副詞的規定 (こゝでは vorgestern) が先行してゐる。補足語の一つが先行すれば、文章は倒置法となると同じ理由で、副詞的規定の一つが、文頭に來るとき〔但し一個に限る〕、文章の配置法は、倒置法 (Inversion [F.]) となる。即ち定動詞が、第二位を占めるのである。

Ich werde **inzwischen** mit meinem Vater sprechen. 〔時間〕

(私はその間に私の父と話ししませう。)

Man sprach **tagelang*** nur von diesem Ereignisse.

(人々は數日間たゞ此出來事に就てのみ話ししました。)

【註】 此 tagelang は mehrere (od. viele) Tage dauernd (「數日間つゞいて、幾日か續いて」) の義で、一日ぢうではない; jahrelang も同樣。邦人學生はよく誤るから注意せよ。

Da verläßt er **auf immer*** seiner Väter Schloß. 〔時間〕

(そこで彼は彼の祖先の城を永久にすてて去る; seiner Väter は先行二格で複數である。)

【註】 單なる副詞 immer と前置詞 auf とが結合して、auf immer となれるもの。——かく副詞を名詞的に取扱つたものは、他にもある; zwischen heute und morgen (今日と明日との間に)

Schweigen ist **zuweilen** die beste Antwort.

(沈默は折々最上の答である。)

ii) 二格の名詞

これは一定の時刻、又は時の反覆 (常習) をあらはすものである。

Hier wußte man **Sonntags** noch nichts von diesem Unglück; erst **andern Tages** hörte man davon. 〔時點〕

(こゝでは日曜日には、その不幸について、まだ何事も知られて居なかつた; 翌日になつてやつとそれについて聞いたのである。)

Viele Tiere gehen nur **des Nachts** (=in der Nacht) auf Raub aus. 〔時間〕

(多くの獸は、たゞ夜間だけ、餌を搜しに出かける; auf Raub ausgehen=餌をさがしに出る。)

【註】 上掲の des Nachts は、des Morgens (朝に)、des Mittags (正午に)、des Nachmittags (午後に)、des Abends (夕方に) などの類推 (Analogie [F.]) から來たものであつて、この類推は勿論間違だが、正しい形たるべき二格形 der Nacht は、こゝでは用ゐられないで、却つて間違つた形なる des Nachts が使用されてゐるのである。但し in der Nacht は勿論よろしい。——此間違つた類推からで、面白い諺が出來てゐる。

Des Morgens denk an deinen Gott;
Des Mittags fröhlich iß dein Brot;
Des Abends denk an deinen Tod;
Des Nachts verschlafe alle Not.

(朝は汝の神を考へよ；晝には汝のパンを食べよ；夕には汝の死を考へよ；夜にはすべての困苦を眠つて忘れよ。)

Kommst du **Nachmittags** zurück? Nein, ich komme erst **Abends** zurück. 〔時刻〕

(君は午後歸つて來ますか？ いや夕方になつて歸つて來ます。)

Post kommt **Montags** (=an jedem Montag). 〔反覆〕

(郵便は毎月曜日に來る。)

Mittwoch und Sonnabend **Nachmittags** ist kein Unterricht. 〔反覆〕(毎水曜日の午后及毎土曜日の午后には、授業はない。 これは英語で云へば、every Wednesday and Saturday afternoon の意味である)。

【註】 I. 同じ形の二格でも、——例へば同じ des Morgens なり、des Abends なりにしても、——時點（時刻）をあらはす場合と反覆（常習）をあらはす場合とがあるから、全文の意味によつて、そのいづれに屬するかを、決定しなければならぬ。

【註】 II. 不定の單數の時日をあらはすには、不定冠詞を附けた二格形が使用される。例へば、eines Tages (或日のこと；one day), eines (schönen) Morgens (或朝のこと；one fine morning；獨の schön, 英の fine は此際譯す必要がない。); eines Mittwochs (或水曜日のこと；on a certain Wednesday).

【註】 III. 不定の複數の時日をあらはすには、複數形の二格が使用されることがある。例へば、nächster Tage は nächste Tage の二格であるが、「近々に」(some time soon) を意味し、dieser Tage は、diese Tage の二格で、これには二義ある。一つは「先日」(recently) の義で、他は「近日のうちに」(in a few days) を意味するから、注意せよ。

iii) 前置詞を有するもの。

これはあらゆる時間的關係をあらはすことが出來る。

Am dritten Tage kehrte er traurig zurück. 〔時點〕

(第三日目に彼はしほしほとして歸つて來た。)

Entschuldigen Sie mich **auf einen Augenblick**! 〔時間〕

(一寸の間御免下さい！)

Von Zeit zu Zeit besucht der Lehrer seinen kranken Schüler. 〔反覆〕(折々先生は病氣の生徒を訪問する。)

Goethe starb **im Jahre** 1832. 〔時刻〕

(ゲエテは千八百卅二年に死んだ。)

Der Vogel singt **seit dem Morgen**. 〔時間〕

(鳥は朝から囀つてゐる。)

iv) 四格の名詞

四格の名詞、は一定の時刻と、期間とをあらはすに用ゐれらる。

Mein Vetter ist **diese Nacht** gestorben. 〔時點〕

(私の甥は昨夜死んだ。)

【註】 I. diese Nacht 及 heute nacht は、今夜 (=die nächstkommende Nacht) の意味に用ゐられることもないではないが、よく昨夜 (die letztvergangene Nacht) の意味に使用される。殊に午前に於てさうである。——第一の意味だけしか記憶してゐないのでは困る。

【註】 II. 上註 I の heute nacht の如く、名詞も時をあらはす副詞と連記されるときには、今は頭字を小書する。Er ist gestern **abend** angekommen. (彼は昨夕到着した。) に於ける abend は、本來名詞 Abend の四格であるが、連記の關係から小書したもの、heute morgen (今朝)、gestern morgen (昨朝) 等みな同一である。

Lange Zeit erhielten wir von ihm kein Lebenszeichen. 〔期間〕

(長い間、われわれは彼から何等の消息も受け取らなかつた。)

Ich bin **den vierten** (=am vierten) Januar geboren. 〔時點〕
(僕は一月四日に生れた。)
Wir plauderten **ein Weilchen** über den gestrigen Ball. 〔時間〕 (われわれは暫らくの間昨日の舞踏會についておしやべりした。)
Er trifft **diesen Vormittag** noch ein. 〔時點〕
(彼は此午前中にも到着する。)
Er lebte **alle Tage** herrlich und in Frieden. 〔期間〕
(彼は毎日華やかにそして喜びのうちに生活した。)

【註】 最後のもののやうに、複數の形もまたあり得るのである。Er war beim König zwei volle Stunden. (彼は丸二時間王のもとに居た。)

Ein amerikanischer Schnellzug fährt achtzig Kilometer **die*** **Stunde.** 〔期間〕 (アメリカの急行列車は一時間に八十キロメートル走ります。)

【註】 *此四格は、時間期間の單位を示すもので、Wie viele Stunden geben Sie die Woche? (貴君は一週に何時間授業しますか?)に於ける die Woche の如きも、それである。尤もこれは「時」ばかりではなく、尺度・分量その他にも使用される。

31. 處の副詞的規定 (Adverbiale Bestimmung des Ortes) は Wo? (どこで?)、Woher? (どこから?) 及び Wohin? (どこへ?) の問に對するもので、第一は存在の場所 (Ort des Seins) を示し、第二は運動の出發點 (Ausgangspunkt der Bewegung) を、第三は運動の目標 (Ziel der Bewegung) を示すものである。これを構成するものは、他のものと同じく、單なる副詞、二格又は四格の名詞、或は前置詞を有する名詞である。

i) **處の副詞**

Jenseits schwindet jede Trauer. 〔Salis〕〔Wo? に對す〕
(彼岸〔あの世〕では、いづれの悲しみも消え失せる。)〔ザーリス〕。
Das loben die Menschen **allerorten.*** 〔同〕
(それを人々は到るところで褒める。)

【註】 *aller Orten と分けてかく事もある。此 Orten は弱變化の複數二格である。

Der Segen kommt **von oben.** 〔Woher? に對す〕
(祝福は上方(天)から來る。)

【註】 これは副詞 oben の前に、前置詞 von をつけたものであるが、かゝる種類のものは、いくつかある。例へば von rechts (右から)、nach oben (上方へ)、nach links (左方へ)。——又うしろへ副詞を添へたものもある; von außen her (外部から)、von oben herab (上から)。

Ich werde bald **dahin** gehen. 〔Wohin? に對する〕
(私は間もなくそちらへ行くであらう。)
Aufwärts (od. **Nach oben**) sollst du immer schauen! 〔同〕
(上の方を汝は常に眺めなければならぬ!)

ii) **二格の名詞**

Jetzt gehe jeder **seines Weges**! 〔Wo! に對す〕
(今は各人は己れの道を行け!)

【註】 seines Weges は單數形であるが、之を複數形で云ふこともある。例へば Geh **deiner Wege** (od. **deines Weges**! (汝の道を行け!)

Hiesigen Ortes weiß man noch nichts davon.
(當地ではまだそれについて何事も知られてゐない。)
Meine Stube liegt **rechter Hand** am Eingang des Hauses. 〔同〕(私の部屋は家の入口の右手にある。)

【註】 此種のものは、數が少ない。上揭のものの外、des Weges (「道」を)、desselben Weges (同じ道を)、gerades Weges (眞直に)、linker Hand (左手) などがそれである。

iii) **四格の名詞**

Er stieg leise **die Treppe** hinunter.
(彼は靜かに階段を降りて行つた。)
Zwei Wandrer sieht er **die Straße** ziehen.
(二人の旅人が街道をあるいて行くのを彼は見た。)

【註】 これは、Er sieht, daß zwei Wandrer die Straße ziehen. と同義である。

Ich begleitet dich **eine Strecke** Weges.
(私は少しの道の里丈け君と一緒に行く。)

【註】 上揭の諸例でわかるやうに、四格はよく運動の動詞に伴つて、運動の距離・延長をあらはす。之に對して二格は靜止の場所を示すことが多い。然し兩方とも絕對的ではない。例へば: Die Festung liegt Mitte des Weges zwischen Venedig und Turin. (要塞はヴェネーディツヒとトゥーリンの間の道の眞中にある。) に於ては、Mitte なる四格は、靜止の地點を示すにすぎないのである。

iv) **前置詞を有するもの。**

これは、時のそれと同じく、自由自在にすべての關係をあらはすことが出來る。

Vor diesem Hause hielt er wundernd an. 〔Wo? に對す〕
(此家の前に彼は怪しみながら立どまつた。)
Morgen ziehen die Saldaten **in die Stadt** ein. 〔Wohin に對す〕(明朝は兵士たちが市の中へ進入する。)

Hinterm Berge wohnen auch Leute. 〔Wo? に對す〕
(山のうしろにもまた人々が住んでゐる。)
Man muß den Teufel nicht **an die Wand** malen. 〔Wohin? に對す〕(人は惡魔を壁に描いてはならぬ;「緣喜の惡い話はしてはならぬ」の義である。)
Von lauteren Brunnen fließen lautere Wasser. 〔Woher? に對す〕(清澄な泉からは清澄な水が流れ出づる。)

【註】 lautere は lauter (=rein, echt, durchsichtig) といふ形容詞に語尾をつけたものであるが、これと語尾を採らざる lauter とは、區別しなければならぬ 後者は「全く」「唯」「計りの」義である。例へば: Es ist lauter Gold. は「それは金づくめだ」の義で、lauteres Gold は「純金」の義である。別の事ながら、序でに注意して置く。

Aus dem Leeren kann nie das Leben kommen. (Woher? に對す) (空虛からは決して生命は生じ得ず; 一格は das Leere)

【註】 概して云へば、Wo? に對しては、前置詞 an, bei, auf, über, unter, in, gegenüber, unweit, unfern 等を以て答へられ (例へば、Wo steht er? Er steht am Fenster.); Wohin? の問に對しては、zu, nach, bis, gegen, wider 等を以て答へられるし (例へば、Wohin gehst du? Ich gehe zu meinem Lehrer.), Woher? の問に對しては、von 及 aus が使用される (例へば、Woher kommst du? Ich komme aus der Kirche.) のである。

3) **方法の副詞的規定** (adverbiale Bestimmung der Art und Weise) は、廣く云へば、Wie? (いかに? How?) の問に對するものであるが、之を詳しく見ると:

i) 狭義に於ける方法をあらはすもの。
ii) 程度（又は順序）をあらはすもの。
iii) 話法をあらはすもの。

なほ其他にも分けられるが、細別は餘り重要ではない。——但し iii) の中、否定の副詞のみは、特に重要だから、別に說かう。——これらを構成するものは、前のものと同樣；i) 本來の副詞（又は副詞として用ゐられたる形容詞）、ii) 二格又は四格*の名詞、iii) 前置詞を有するものの外に、 iv) 分詞が用ゐられるのを、屢發見する。それらは勿論、副詞として用ゐられた分詞である。

【註】 *四格は極めて少ない。

i) 副詞

Die Jahre fliehen **pfeilgeschwind.*** 〔Schiller〕〔方法〕
（歲月は矢の如く速かに過ぎ去る。）

【註】 *これは本來の形容詞 geschwind に名詞 Pfeil を結合して作つた複合形容詞で、こゝでは fliehen を限定する副詞となつてゐる。

Das Mütterchen sah **ängstlich** nach dem Himmel. 〔同〕
（お母さんは心配げに空を見てゐた。）
Es kostet **nur** einen Taler. 〔程度〕
（それはほんの一ターラーにしか價しない。）
Ich habe **erst** drei Briefe gelesen. 〔同〕
（私はやつと三本丈け手紙をよんだ。）

【註】 かゝる erst は、或想像されたる過程に於て、丁度今達した點を示すもので、なほその外になすべきことの存在する事を意味する。

Sie haben **vielleicht** recht. 〔話法〕
（恐らく貴君は正當でせう。）

Mein Onkel wird heute **gewiß** kommen.
（私の叔父は今日は確かに來るだらう。）
Sonderbar **genug*** mag ich ausgesehen haben. 〔程度〕
（充分奇妙に私は見えたかも知れない。）

【註】 *genug は、それ修飾する詞の後ろに置かれる；reich genug（充分富んで）。——但し nicht genug tun können は「いくらやつても充分でない」と云ふ義。Er kann nicht genug bekommen.（彼はいくらもらつても充分ではない、滿足しない）；Er konnte dieses Buch nicht genug bewundern.（彼は此本をいくら褒めても褒め切れなかつた；これは正面から直譯すると、誤解が生するから、注意を要する。）

Er kommt **wohl** noch heute. 〔話法〕
（彼は多分今日の中にも來るだらうよ；wohl は、ich denke の意味。）
Die Vögel sangen **auf das beste** (=**aufs beste**). 〔程度〕
（鳥は非常によく歌つた。）

【註】 上掲 auf das beste は、副詞の絕對的最高級で、單に程度の高いことを示すもの。次の二つの例もさうである。

Ich danke Ihnen **schönstens**. 〔程度〕
（あなたにあつくお禮を申します。）
Kommen Sie **möglichst** früh! 〔程度〕
（出來る丈け早くおいで下さい！）
Die schönsten Äpfel sticht der Wurm **am ersten**. 〔順序〕
（虫は一番美しい林檎をまつさきに食ふ。）

ii) 二格の名詞

Wir fahren **dritter Klasse**. 〔Storm〕〔方法〕
（われわれは三等で旅行する；We travel third class.）

Sie kamen **unverichteter Sache** (od. **Dinge**) zurück. 〔方法〕
(彼等は手を空うして〔得るところなくして〕歸つて來た
=They came back without accomplishing anything.)
Leichten Kaufes ist der Ruhm nicht zu haben. 〔方法〕
(名聲は容易には得られない; 他動詞に zu をつけて sein と結合すれば、被働の意味となる; leichten Kaufes=easily =たやすく)
Ruhigen Schrittes ging er seines Weges. 〔方法〕
(悠々たる足取で彼は彼の道を行つた。)
Die Griechen erwarteten **festen Fußes** die Scharen des Feindes. 〔方法〕
(希臘人は毅然として敵勢を待ちかまへて居た。)
Ich habe ihn **allen Ernstes** ermahnt. 〔方法〕
(私は大眞面目で彼に警告した。)
Meines Wissens ist er solcher Tat nicht fähig. 〔程度〕
(私の知れる限りでは、彼にはかゝる行爲は出來ない。)

【註】 此 meines Wissens は、soviel ich weiß (私の知るところでは、私の知れる範圍では) の義であるが、此外に「種別」を示す二格がある。例へば Seines Zeichens ist er Schneider. (彼の職業は裁縫師だ; seines Zeichens は「彼の職業から云へば」の義である。=〔英〕by trade or profession)。或文法家は「種別」の二格も、本項に所屬させてゐる (Curme).

iii) 四格の名詞

狹義の方法を示すものには、四格の形はない。たゞ程度をあらはすものに、若干ある丈けである。

Das Thermometer ist **einen Grad** gefallen. 〔程度〕
(寒暖計は一度さがつた。)

Das kümmert mich **kein Haar**. 〔程度〕
(私はちつともそれを氣にかけない; That does'nt worry me in the least.)
Gehen Sie **einen Schritt** weiter! (今一度進み玉へ!)〔程度〕

【註】 此 einen Schritt は、純粹の空間的距離と考へるときは、場所をあらはす四格と解釋される。Das Dorf liegt **eine Stunde** von der Stadt. (村は町から一時間行程のところに在る。) と云へば、eine Stunde と云ふ四格は、明かに距離を示してゐる。即ち「處を示す四格」に屬する。

iv) 前置詞を有するもの。

此種は、例のとほり多い。

Lange betrachtet der Fremde **mit Verwunderung** das kostbare Schloß. 〔方法〕
(長い間他鄕人は驚嘆して立派な館を眺めてゐた。)
Ohne Zweifel hat er uns verraten. 〔方法〕
(疑もなく彼はわれわれを裏切つたのである。)
Sie ist **über alle Maßen** kokett. 〔程度〕
(彼女は非常にあだつぽい。)
Mit allen Kräften versuchten sie ihn aus dem Ansehen beim König zu verdrängen. 〔方法〕
(全力をつくして彼等は彼を王のもとにおける信用から排斥しようと試みた〔信用を落さうと試みたこと〕。)
Er wollte seinen Freund **um jeden Preis** retten. 〔話法〕
(彼は彼の友人をどうしても救はうと思つた; um jeden Preis=durchaus.)
Im Gegenteil hat man mir jede Freiheit gewährt. 〔話法〕
(反對に人々は私にあらゆる自由を與へた。)

Er mußte die Abreise seines Bruders **nach Möglichkeit** beschleunigen. 〔程度〕(彼は彼の兄弟の出發を極力早めなければならなかつた。)

Seinen Segen **erteilt** Gott **mit weiser Hand.** 〔方法〕

(彼れの祝福を、神は賢き手もて頒ち與ふ。)

Sein Respekt vor dem jungen Mädchen war **um ein Bedeutendes*** gewachsen. 〔程度〕

(若い少女に對すする彼の尊敬は著しく增した。)

【註】 *bedeutend と云ふ形容詞を、中性の名詞に取扱へるもの; 此用法は beträchtlich (著しく) にもある; um ein Beträchtliches (著しく)。

v) 分詞 (Partizipien)

分詞には、現在分詞と過去分詞とあるが、共に副詞として使用される。例へば Er sprach **fließend.** (彼は流暢に話す。)と云へば、fließend は fließen から現在分詞であり、Er kam **gelaufen.** (彼は走つて來た。)と云へば、gelaufen は laufen の過去分詞であつて、共に動詞 sprach, kam に對して、副詞の役割をつとめて居る。

Die Freunde sahen **sich fragend** an.

(友人たちは、互に問ひたげに、顏を見合した; fragen から來た現在分詞。)

Das graue Kleid steht ihr ganz **ausgezeichnet.**

(灰色の服は彼女に全くよく似合ふ; auszeichnen から來た過去分詞。)

Er griff den Feind **wütend** an.

(彼は憤激して敵を襲ふた; wüten の現•分。)

Draußen **trocknete** er **verstohlen** die feuchten Augen.

(そとで彼は人知れず彼のしめつた眼を乾かした; verstehlen の過去分詞。)

【註】 程度をあらはすものに關聯させて、比較 (Vergleichung [F.]) をあらはすものを、『方法の副詞的規定』のなかに入れる文法家もある。これは接續詞 wie, als, so wie, so.....wie 等を頂かせた名詞又は代名詞で云ひあらはされる。例へば、Er zürnt wie ein grimmiger Löwe. (彼は憤れる獅子の如く怒つた。); Machen Sie es so wie ich! (それを僕のやうにやり玉へ!) Er läuft so gut wie du. (私はお前と同じやうに走れる。)—— 比較級では、Er besucht mich öfter als sein Bruder. (彼は彼の兄弟よりもより屢私を訪問する) 等

32. **原因の副詞的規定** (Adverbiale Bestimmung des Grundes) は、細別すると

i) 狹義に於ける原因又は理由を示すもの。
ii) 目的 (Zweck [M.]) をあらはすもの。
iii) 手段 (Mittel [N.]) をあらはすもの。
iv) 材料 (Stoff [M.]) をあらはすもの。
v) 條件 (Bedingung [F.]) をあらはすもの。

等となる。これを構成するものは、i) 單なる副詞、又は前置詞を有する名詞である。

i) 狹義に於ける (im engeren Sinne) 原因 (Grund [M.]) 又は理由 (Ursache [F.]) を示すもの。

これは Weshalb? 又は Warum? の問に答へるもので、副詞は少なく、大抵は前置詞を有するものを以て表現される。

Deswegen (od. Deshalb) habe ich es getan.

(夫故に私はその事をなした。)

Der Stein fällt **vermöge** seiner Schwere zu Boden.
(石はそれの重力のために地上に落ちる。)
Die Königin säumt noch **aus arger List.**
(女王は奸策上からまだ躊躇してゐる。)

【註】上掲 der Stein の例の如く、自然の法則に依る原因を、事實上の原因 (realer Grund) と稱し、die Königin の例の如く、個人の自由なる意志に基づく原因を、道德上の原因 moralischer Grund) と名づける〔Gurke〕. しかし此區別は左程重要ではない。

Der Schnee schmilzt **von** (od. **vor**) **der Wärme.**
(雪が暖氣のために融ける。)
Durch ein einziges Wort gewann der Feldherr die Gunst der Soldaten zurück.
(たゞの一語で將軍は兵士達の人氣をとりかへした。)
Die Mutter starb **vor Gram** über den Tod des Sohnes.
(母は息子の死についての悲しみのために死んだ。)
Der Raupen wegen muß man den Baum nicht umhauen.
(毛蟲のために〔毛蟲がゐるからとて〕木を切り倒してはならぬ。)
Der Fuchs küßt den Zaun **um des Gartens willen.**
(狐は庭のために垣根に會釋する; 背景のために或ものを尙ぶ義。)

前掲諸例の示す如く、狹義の原因又は理由をあらはすのに用ゐられる前置詞は、aus, durch, von, vor, vermöge, wegen, um .....willen 等であつて、zufolge, nach, mit, laut (よりて) 等もまた使はれる。

ii) 目的をあらはすもの。

これは Wozu? (何の爲めに?) の問に答へるものであるが、

こゝでも副詞は少なく、大抵は前置詞を有するもので云ひあらはされる。

Dazu ist er da.
(〔1〕その目的のために彼は (雇はれて) 居るのだ:—〔2〕それが彼れの使命だ。)

Ist jene Akte **zu meinem Untergang** ersonnen?
(あの文書は私を滅ぼすために揑造されたのか?)
Man heizt den Ofen nur **um der Wärme willen.**
(暖爐はたゞ暖氣のためにのみ焚かれるのだ。)
Nicht **der Güter wegen** gab uns Gott das Leben.
(財寶を得んがために、神がわれらに生命を與へたのではない。)
Ich habe **für die Freiheit** gelebt und gefochten.
(私は自由のために生きまた戰つて來た。)

これに使用せられる前置詞は、上掲のとほり、zu, um..... willen, wegen, für などであるが、之と同じ形で、目的でなく、結果を示すものがある。それは Mit welcher Wirkung? (いかなる結果を以て?) の問に對するもので、動詞の示す行爲の結果を示してゐる。例へば、Er singt zum Erbarmen. は、彼の歌ひ聲は拙くて憫然に思はしめる義で、「彼は憫然なほど拙く歌ふ」ことを指す。

Sie ist **zum Entzücken** schön.
(彼は人を魅するほど(大變に)美しい。)
Er spielte seine Rolle **zu allgemeiner Zufriedenheit.**
(彼は一般の滿足を得る程に(立派に)彼の役割を演じた。)
Er war **zum Tode** erschrocken.
(彼は死ぬ程(ひどく)驚かされた。)

iii) 手段 (Mittel [N.]) をあらはすもの。

これは Womit? (何を以て?)、Wodurch? (何によつて?) と云ふ問に對するもので、器具•機械•媒介物などをあらはし、これも大部分前置詞を有するもので答へられる。

Man kann **damit** die stärksten Felsen zertrümmern.
(人はそれを以て最も丈夫な岩をも碎くことが出來る。)
Durch falsches Zeugnis glaubt er sich zu retten.
(僞はりの証言で彼は助かると信じて居る。)
Die Diebe öffneten den Kassenschrank **mittelst eines Brechhebels.** (泥棒が金挺で金庫をあけた。)
Er kam **durch das Beil** um.
(彼は斧で死んだ。)

これに使用せらるるものは、前置詞は durch, mit, (ver)mittelst 等である。

【註】 最後の例のやうに道具を示すものも、こゝに加はるのである。

iv) 材料 (Stoff [M.]) を示すもの。

これは Woraus? Wovon? (何で、何から、何によつて?) の問に答へるもので、前置詞を有するものによつて、大抵は云ひあらはされる。

Wir wollen einen Rock **davon** machen lassen.
(われらはそれで(布地の類を指す)上着をつくらせようと思ふ。)
Die Natur schuf mich **aus gröberm Stoff.**
(自然は、より粗末な材料で私をつくつた。)

Von Perlen baut sich eine Brücke hoch über einen grauen See. [Schiller]
(眞珠で橋が灰色の湖の上に高くつくられてゐる。)

この種類のものに使用せらるる前置詞は、vor と aus とである。

v) 條件 (Bedingung, [F.]) をあらはすもの。

これは Unter welcher Bedingung? (どんな條件のもとに於て?)、In welchem Fall? (どんな場合に於て?) の問に對するもので、名詞の二格及びそれから出來た副詞、又は前置詞を有するものによつて、云ひあらはされる。

Nötigen Falls (od. **Nötigenfalls**) kannst du die Bibliothek meines seligen Onkels benutzen.
(必要な場合には、君は私の亡き伯父の書庫を利用してよろしい。)

【註】 上掲の文頭にあるやうに、nötigen Falls と書くときは、nötiger Fall の二格であるが、括弧内にあるやうに續けて書くときは、既に副詞である; bestenfalls (最上の場合には)、günstigenfalls (都合よくば) など皆同じである。

Schlimmstenfalls kann er nur den Zug versäumen.
(どんなに惡くとも、彼は汽車に乘り後れる位のものだ。)
Im Falle eines Sieges würden wir uns anschließen.
(勝利の場合には (勝つたら) われらは聯合しよう。)
Bei gutem Wetter wollen wir ausgehen.
(天氣がよくば、われらは外出しやうと思ふ。)
Nur **bei großem Fleiß** kannst du Fortschritte machen.
(只大きな勉强によつてのみ、君は進步が出來るのだ。=

You can make progress only on condition that you are diligent.)

Bei gutem Willen kann man viel ausrichten.

(善意があれば、多くのことをなし遂げることが出來る。)

Ohne Liebe wäre die Welt aller Freuden leer.

(愛がなければ、世界にはすべての喜びはあるまい; leer は二格を採る; eines Dinges leer sein 或ものがない; wäre は或(事實に遠い)條件に基づく結論を示す可能法で、ohne Liebe が條件を示してゐる。)

Mit gutem Gewissen sitzt man weich auch auf harter Bank.

(心が次しくなければ、人は硬い石の上にも柔く座はる。)

上に掲げたとほり、この場合に使用される前置詞は、bei, mit, ohne 等である。

これらと關聯して、「或條件があるにも拘らず」、「或事情の存在にも係らず」、或事の生ずることをあらはすものがある。——特に一項を立てて、この種のものを收容する文法家もあるが、こゝでは條件をあらはすものに關聯せしめて置く。——これは不充分なる又は反對的なる理由 (unzureichender od. entgegengesetzter Grund) をあらはすもので、(Trotz welches Umstandes?) (どんな事情にも拘らずか?)、Wessenungeachtet? (何に拘らずか?) の問に對するもので、副詞又は前置詞を有するものによつて答へられる。又「よしや云々でも」といふ認容 (Konzession [G.]) をあらはすものも、この中に加へられる。

Jedenfalls werde ich Ihnen Nachricht geben.

(何にしても、僕は貴君に知らせましよう。)

Trotzdem gingen die Beratschlagungen vor sich.

(それにも拘らず相談は進行した。)

Des kaiserlichen Verbotes ungeachtet gingen die Beratschlagungen vor sich.

(皇帝の禁止にも拘らず、相談は進行した。)

Trotz mancher Widerwärtigkeit ist das Leben doch reich an Freuden. (いろいろのいやなことはあるが、人生は矢張喜びに富んでゐる)

Die Deutschen erkennen **bei aller Verehrung** ihrer großen Männer dennoch auch die Schwächen derselben.

(獨逸人は自分たちの偉人を尊敬はするけれど、それでも此人たちの弱點を認識する。)

Schrecklich immer **auch in gerechter Sache** ist Gewalt [Schiller.] (權力は——正しい事に於てであつても——いつも恐ろしい。)

こゝに使用される前置詞は trotz, ungeachtet, bei 等である。

【註】以上は副詞的規定を、其大綱に亘つて、形態及意味の上から說いたのであるが、其分類法は、人によつて異なり、最も少く分類する人は、四種とし、細かく別ける人は七種乃至九種にする。各種類の內容的細別の異なるのも勿論である。然し分類の仕方、そのものは大して必要なものではない。——又同じ文字でも、その保つ內容の相違によつて、所屬を異にするのは云ふまでもない。

33. 次には副詞的規定の位置について述べよう。初めには、補足語なき場合について考へて見ると:

I. 副詞的規定が一種の場合。

正置法に於ては、副詞的規定は定動詞の次に來る。而して文

末に來るものは不定法・過去分詞又は複合動詞の分離規定詞であるから、副詞的規定はその間に入る譯である。

Er spricht **leise.** (彼は低く話す。)
Er will **nach Hause** gehen. (彼は歸宅しやうと思ふ。)
Er ist **schon** abgereist. (彼は既に出立した。)
Er kam **vorgestern** an. (彼は一昨日到着した。)

然し此際副詞的規定に前置詞の存する場合には、それが文章の最後の位置を占めることもあり得る。例へば、Das Boot stößt **vom Ufer** ab. (ボートが岸から離れる) はまた Das Boot stößt ab **vom Ufer.** とも云ふ。Ich will sie einführen **in die Hofburg** meiner Väter [Schiller]. (私は彼女を私の祖先の宮殿へ案内しようと思ふ。) これは abstoßen の ab と stößt との、又 will と einführen との密接な內的關係を、外面的にもあらはさうとする爲めである [Behaghel].

副詞的規定が一種類でも、それがいくつかのものから成ることがあり得る。その時は、範圍の大きなものを前にし、範圍の狹いものを後にするのが、通例である。例へば:

Wir reisen **morgen früh** [大] **sechs Uhr** [中] **50 Minuten** ab. (われらは明朝六時五十分に出立する。)

と云ふ文章に於ては、すべてが時の副詞的規定といふ範圍のうちに入れられるけれど、その表はす範圍の廣狹によつて、上の如く順序づけられるのである。

【註】 I. これは獨逸語と英語との相違するところで、例へば「夕方六時三十分に」と云ふ事は、英語では、at half past six (o'clock) in the evening と云ふけれど、獨逸では、des Abends (od. am Abend) sechs Uhr 30 (Minuten) と稱する。或はこれを des

Abends halb sieben (Uhr) としてもよろしいのであるが、見に角兩者が順序を異にすることに注意してもらひたい。

また、處の副詞的規定で云へば

Der Betrunkene lag **auf der Fahrstraße** [大] **im Drecke** [小].
(酔漢は車道で泥濘のなかに横つてゐた。)

但し範圍の大きな方に、特に重きを置くときは、これを後に据ゑる。

Er muß sich **um acht Uhr** [小] **morgens** [大] zur Weiterfahrt breit halten.
(彼は明朝八時旅行をつゞける用意をしなければならぬ; sich breit halten=用意する)。

【註】 I. 一つの名詞にかゝるいくつかの形容詞にあつても、或はまた一つの動詞にかゝるいくつかの副詞的規定にあつても、內容の重い、或は調子の重い、若しくはより個別的なものが後ろに置かれ、內容の輕い、抽象的な、或は調子の輕い、より一般的なものが前に立つのが、獨逸措辭法の一大原則である。從つてその中の或ものを强調せんとするときは、上掲の例 (morgens) の如く後置するのである。(形容詞の例は既掲の通り、guter weißer Wein, die ganze alte Welt などに於て示されてゐる。)

【註】 II. 副詞的規定の排列の際に注意すべきのは、附加語とこのものとを混同せざることである。例へば、Der Vogel auf dem Baum singt hell. (樹上の鳥は朗かに歌ふ。) の auf dem Baum は der Vogel に附屬するものだが、Der Vogel singt auf dem Baum. は明かに處をあらはす副詞的規定である。これを倒置すれば、Auf dem Baum singt der Vogel. である。この例によつても副詞的規定と附加語との相違が分ると思ふ。附加語は文字通り、他のものに附加する部分である。

II. 副詞的規定が數個ある場合。

この場合には、大抵時•處•方法•原因の順序で排列される。

Er kann jeden Augenblick (od. alle Momente) 〔時〕 ins Zimmer 〔處〕 treten.
(彼は今にも室へ入つて來るかも知れん。)
Sein Vater war lange 〔時〕 gefährlich 〔方法〕 krank.
(彼の父は長い間危險な病氣であつた。)
Du wohnst hier 〔處〕 sehr bequem 〔方法〕.
(君はこゝで甚だ便利に住んでゐる; sehr は bequem のみにかゝり、その程度を示すもの。)
Ich werde nächstens 〔時〕 mit meinem Freunde 〔方法〕 über die Sache sprechen.
(私は近々のうちに、私の友人と、この事について談合するでせう。)
Er kehrt heute 〔時〕 von Paris 〔處〕 mit seinem Freund 〔方法〕 wegen Familienverhältnisse 〔原因〕 zurück.
(彼は今日巴里から、彼の友人と一緒に、家庭の事情のために歸つて來る。)

副詞的規定の排列法は、大體上の如くであるが、これは左程嚴密なものではない。例へば二つの副詞的規定のうち、短いもの•輕いものが、意味の如何に係らず、先行する (前項 I. 註參照)。

Er reiste gern 〔方法〕 nach Paris 〔處〕。

其他の場合でも、意味に變化を起さざる限り、副詞的規定の位置は可なり自由に變じ得るものである。例へば、上に揭げた Ich werde **nächstens** mit meinem Freunde über die Sache sprechen.

と云ふ文章は、意味を變へることなくして、Ich werde mit meinem Freunde **nächstens** über die Sache sprechen. とも云ふことが出來るのである。[Heyse.]

34. 次には一文中に於ける補足語と副詞的規定との排列の順序に就いて述べようと思ふ。

i) 時の副詞的規定は、通常名詞補足語の前、代名詞補足語のうしろに置かれる。

Ich habe **heute** deinen Bruder auf dem Markte getroffen.
(彼は今日君の兄弟に市場で會つた。)
Ich habe **ihn heute** auf dem Markte getroffen.

【註】 時の副詞でも、置きどころによつて、意味の差異を生ずる時があるから、注意しなければならぬ: Er hat **beständig** am dritten Tage des Monats Kopfschmerzen. といへば、「彼はいつも毎月三日には頭痛をする。」の義であるが、Er hat am dritten Tage des Monats **beständig** Kopfschmerzen. と云へば、「彼は月の三日目には、絶えず頭痛がする。」義で、Er hat auf mein Anraten **gestern** die Reise unternommen. と云へば、彼は「昨日の私の勸告に從つて、旅行を企てた。」であるが、Er hat **gestern** auf mein Anraten die Reise unternommen. 「彼は私の勸告に從つて昨日旅行を企てた。」義である。〔Heyse.〕

ii) 處の副詞的規定は、通常名詞又は代名詞の補足語の後、前置詞補足語の前に置かれる。

Ich habe deinen Bruder (od. ihn) **auf dem Markte** getroffen. (私は君の兄弟(彼)に市場で會つた。)
Wir warteten **im Vorzimmer** auf seinen Wink.
(われらは控室で彼の合圖を待つてゐた。)

iii) 方法の副詞的規定は、代名詞補足語の後に置かれる。補足語が名詞なるときは、その前又はその後に置かれる。

Wir haben ihn **gern** empfangen.
(われらは彼をよろこんで迎へた。)
Ich habe ihn **allen Ernstes** ermahnt.
(私は彼を大眞面目で警告した。)
Der Lehrer hat den Schüler **allen Ernstes** ermahnt.
(先生は生徒を大眞面目で警告した。)
Er hat gestern **mit großer Freude** diese Nachricht erzählt.
(彼は昨日大よろこびで此報知を物語つた。)

【註】 I. 名詞補足語が二個なる時も、可なり自由に置かれるのである。

Der Vater schenkte seinem Sohn das Buch **mit Vergnügen.** (父はよろこんで息子に本を與へた。)
Der Vater schenkte **mit Vergnügen** seinem Sohn das Buch.
Der Vater schenkte seinem Sohn **mit Vergnügen** das Buch.
但し Der Vater schenkte seinem Sohn das Buch **gern.** とは云はない これではあまりに文末が輕く、獨逸の措辭的原則にそむくからである。此原則から云ふと第一の例、即ち mit Vergnügen が文末にあるのは、これに重きを措かれてゐるものと解してよい。若し gern を使用するなら、Der Vater schenkte seinem Sohn **gern** das Buch. とすべきである。

【註】 II. 方法をあらはす副詞的規定は、上掲の如く、大した意味上の差異なくして、補足語名詞の前後いづれにも置かれ得るものだけれど、それが補足語名詞に對して客語的關係に立つものあるときには、之を先行させなければならぬ。例へば Er fand **mühsam** den Weg. と云へば、Er fand mit Mühe den Weg. (彼は骨を折つて道を見出した。) の意であるが、Er fand den Weg

mühsam. といふときには、Er fand den Weg beschwerlich. (彼は道を困難なものと考へた。) の意味である。又 Er hat **glücklich** seinen Freund gefunden. は「彼は幸にして彼の友人を見つけ出した。」の義で、Er hat seinen Freund **glücklich** gefunden. と云へば、「彼は彼の友人を幸福だと思つた。」の意味で、Er fand, daß sein Freund glücklich war. と同じで、即ち副詞的規定の場合には、先行するのである。[大體 Heyse に憑る]

iv) 原因の副詞的規定は、代名詞補足語の後、名詞補足語の普通は後、時にはその前に置かれる。

Man pflegte ihn **aus Mitleid.**
(人は同情から彼を世話した。)
Der Lehrer hat den Schüler **wegen seines Unfleißes** getadelt. (教師は生徒を彼の不勉强のために非難した。)
Die Witwe wollte **aus frommer Gewissenhaftigkeit** ihr Erbteil nicht verkaufen.
(寡婦は敬虔なる誠意から、自分の遺產を賣らうとはしなかつた。)

以上でほゞ、副詞的規定の全體の說明を終つたわけであるが、一見副詞的規定と似て、實は動詞と結合して一個の概念をつくつて居り、それを副詞的規定だとして、動詞から放ちがたいものがある。例へば、zu Grunde gehen (滅びる；但し現今は結合して zugrund と書かれる)、zu Stande bringen (成就させる；但し現今では結合して zustande と書く)、in Ordnung bringen (整理する)、in Erfüllung gehen (實現される)、in die Schule kommen (登校する) 等に於て、それぞれの前置詞を有する形は、副詞的規定としては取扱はないで、動詞と密接なる關係あること、恰も複合動詞の分離規定詞の如くであると考へて處理

するのである。卽ち單獨時稱に於ては文末に、複合時稱に於ては、不定法又は過去分詞の前に來るのである。

Der Wunsch ging freilich **in Erfüllung.**
(願は勿論遂げられた。)
Er hat es endlich **zustande** gebracht.
(彼れはとうとうそれを成就した。)
Er kommt heute wegen Krankheit nicht **in die Schule.**
(彼は病氣なので今日登校しない。)

35. 今まで說いたのは、正置法の語次であるが、**倒置法の語次**は、疑問詞なき疑問文に於て定動詞が先行するか、又は副詞的規定の一つが文頭に立ち、定動詞が第二位に立つことによつて生ずるものであることは、云ふまでもない。

Hast du gestern abend meinen Bruder auf der Straße getroffen? 〔疑問詞なき疑問文〕(君は昨夕僕の兄弟に往來で會つたかね?)
Gestern abend hast du meinen Bruder auf der Straße getroffen. 〔時の副詞的規定が先行する〕
Auf der Straße hast du gestern abend meinen Bruder getroffen. 〔處の副詞的規定が先行する〕

第一の種類のものと第二の種類のものとは、定動詞の前に、なほ一つの文章成分がありや否やの相違であつて、定動詞以下は異なるところがないのであるが、此際注意すべきのは、あらゆる機會に於て述べた通り、二種類以上の副詞的規定を、文頭に置かないことである。卽ち文頭に立つ副詞的規定は、單に一個の副詞的規定に限られてゐることである。だから上の例を、

Gestern abend auf der Straße hast du meinen Bruder getroffen. 〔二種の副詞的規定〕

とすることは、許されないので、英語との相違はこゝにも存するのである。

【註】 詩及詩的散文 (散文詩) の如きは別であつて、かゝるものに於ては措辭が、特に自由なることは、云ふを俟たない。

さて、或副詞的規定が、何故に文頭に置かれるかといふと、これには色々の理由があつて、悉くは云ひ切れないが、最も簡短なのは、〔A〕それが一文中の感動 (Erregung [f.]) を負擔する部分である場合である。例へば、Über allen Gipfeln ist Ruh. (すべての峰の上にやすらひあり。) と云へば、Über allen Gipfeln が、此一文の感動を負擔して居るのである。

【註】 客詞動詞に附屬する副詞的規定は、上記の意味でなくとも、よく先頭に置かれることがある: Laut jubeln die Kinder. (子供たちは高く歡呼する。)

〔B〕又いくつかの副詞的規定のあるうち、他のものに比して重要さをより多く有するものは、文頭に置かれる。例へば、

Er ist gestern in der Stadt angekommen.
(彼は昨日町に到着した。)

といへば、正置法で、特にどの副詞的規定に重きをおいて居ると云ふ事もないが、

Gestern ist er in der Stadt angekommen.

といへば、gestern に特に重きを置かれ、

In der Stadt ist er gestern angekommen.

といへば、in der Stadt に特に重きを置かれるのである。

【註】 或文法學者は、最に述べた心理的主語 (psychologisches Subjekt) に對して、心理的客語 (psychologisches Prädikat) なる詞を用

ゐて、文法的には客語でなくとも、心理的には客語たるものを摘出する。例へば、前例に於て、gestern を文頭に置くときは、これは文法的には、勿論副詞的規定とせざるを得ないが、心理的には、客語だといふのである。何となれば、此文は『いつ彼は町に到着したか？』の問に對するもので、此答は『彼が町へ到着したのは昨日だ。』の意味であり、第二の例に於て、in der Stadt が文頭に置かれてゐるのは、『どこへ彼が昨日到着したのか？』と云ふ問に對するもので、この答は畢竟『彼が昨日到着したところは町だ』の義に外ならないからだと解するのである。——かゝる心理的の見方は、まことに興味多いものであるが、心理的主語の場合に述べたとほり、この研究にはいろいろの面倒があり、且つ實用性に——少くともわれら他邦人にとつては——乏しいから、こゝではたゞかゝる解釋の方法の存在して居ること丈けを紹介するに止めよう。悉しくは Hermann Paul の Deutsche Grammatik IV. あたりを見たらよからう。

〔C〕次には、或一つの副詞的規定を强調する爲ではないが、口調の爲に、それを文頭に置く事がある。これも細別すれば、いくつかになるが、こゝではその一つの例丈けにする。例へば、「私は毎日私の兄弟と汽車で町へ行く。」と云ふのを、Ich fahre jeden Tag mit der Eisenbahn mit meinem Bruder in die Stadt. 又は Ich fahre jeden Tag mit meinem Bruder mit der Eisenbahn in die Stadt. とするときは、mit を有する副詞的規定が重複して聞きにくいから、Mit meinem Bruder fahre ich jeden Tag mit der Eisenbahn in die Stadt. とでもする。尤かゝる重複による置き換へは、倒置法の一例に過ぎないのである。

〔D〕その次には、前文を受ける關係上、副詞的規定で初めなければならぬ必要のある事もある。例へば、御伽噺などで、前の事件をうけて、すぐに Nach einem Jahre gebar die Königin wieder einen Sohn. と時の副詞的規定でうけるのは、「其事

あつて後一年 (=ein Jahr danach) 王妃はまたも息子を生みました。」の義で、直前敍述の事實と密接な關係順序をあらはさんがためである。尤この受け方にも色々あるが、あまり詳しくなるから略さう。

これらのほかに、なほいくつかの理由があるが、やゝ複雜してゐるから、後の機會に讓る事とする。

36. 副詞的規定に就いての解說を終るにあたり、最も重要なるものが、一つ殘つて居る。それは否定の副詞 nicht の置きどころである。此詞の置かるべき位置は、或點に於て英語と異なるし、又置かるゝ所によつて、全文の意味を異にするから、特に細心の注意を拂はなければならない。

I. 客語が連辭と名詞又は形容詞とより成るときは、nicht は名詞又は形容詞の前に置かれる。

Er ist nicht faul. 〔現〕
(彼は怠惰ではない。)
Er ist nicht gesund gewesen. 〔現•完〕
(彼は丈夫ではなかつた。)
Er wird nicht Soldat bleiben. 〔未〕
(彼は兵士では居ないだらう。)
Er wird nicht faul gewesen sein. 〔未•完〕
(彼は怠惰ではなかつたらう。)

II. 客語形容詞が、補足語を有するときは、その後に置かれる。

Er ist seinem Vater 〔補〕 nicht ähnlich.
(彼は彼の父に似てゐない。)
Der Bote war des Weges 〔補〕 nicht kundig.
(使は道に通じてゐなかつた。)

前置詞を有する補足語は、通常形容詞の後に來るものであるが、此場合も nicht は形容詞に先立つ。

Das Gaslicht ist nicht angenehm für das Auge.
(ガスの光は眼に快くはない。)

【註】 前置詞を有する補足語が先行しても、nicht は形容詞の前に置かれる。

Das Gaslicht ist für das Auge nicht angenehm.

III. すべての副詞的規定のうち、最後に置かれる。

Er ist gestern〔時〕 bei mir〔處〕 nicht gewesen.
(彼は昨日私のところへは來なかつた。)
Er kann heute〔時〕 wegen Krankheit〔原〕 nicht kommen.
(彼は今日病氣のために來られない。)

IV. 客語動詞が補足語を有する時は、その後に置かれる。

Ich traf ihn〔補〕 nicht.〔過〕
(私は彼に會はなかつた。)
Ich habe ihn〔補〕 nicht getroffen.〔現•完〕
Ich werde ihn〔補〕 nicht treffen.〔未〕
Er wird sie〔補〕 nicht getroffen haben.〔未•完〕
(彼は彼等に會はなかつたであらう。)
Der Schüler hat dem Lehrer〔補〕 nicht gehorcht.
(生徒は先生の云ふ事を聞かなかつた。)
Ich habe ihm〔補〕 das Buch〔補〕 nicht gegeben.

【註】 英語の語次と混同してはならぬ。Er will mir das Buch nicht geben.=He will **not** give me the book.

但し補足語が前置詞を有する時は、nicht は屢其前に置かれる。

Er kümmert sich nicht um meinen Verlust〔前•補〕.
(彼は私の損害を氣にかけない。)
Ich will nicht auf die Bezahlung〔前•補〕 dringen.
(私は支拂を迫らうとは思はぬ。)
Ich halte ihn nicht für dumm〔前•補〕.
(私は彼を馬鹿とは思はぬ。)

【註】 但し後置せる例も、亦發見される。

Er ging auf die Bedingung〔前•補〕 nicht ein.
(彼はその條件を承諾しなかつた。)
Du mußt dich auf einen solchen Handel〔前•補〕 nicht einlassen. (君はかゝる事件に關係してはいけない。)

V. 一文中に補足語と副詞的規定とが、並存して居るときには、上掲の諸種の規則を適用すればよろしい。

Er hat heute seinen Gast auf seinem Spaziergang nicht begleitet.
(彼は今日彼のお客の散歩に同伴しなかつた。)
Dein Benehmen war gestern deiner durchaus nicht würdig.
(お前の振舞は、昨日は全くお前にふさはしくなかつた。)

【註】 此文章に於ける客語形容詞 würdig は、二格の補足語を採るもので、deiner (du の二格) würdig sein (お前身にふさはしくある) とつゞくのであるが、此 würdig に直接關係する nicht は上掲 II. によつて、würdig の直前に來る。又 durchaus (全く) は程度の副詞で、單に nicht 丈けにかゝるものである。

Du hast dich gestern in der Gesellschaft bei N. deiner nicht würdig benommen.
(君は昨日 N. のところの會で、君にふさはしくない振舞をした。)

【註】 こゝでは würdig が、sich benehmen (振舞ふ) と云ふ客語動詞の副詞的規定として用ゐられてゐる。その他は、上註のとほりで解る。

Der Herr hatte es in seiner Angst um* sich selber nicht verstanden. (紳士は自分自身についての不安のために、それを理解しなかつた。)

【註】 *um sich selber は Angst につく附加語である。

VI. 動詞が、名詞又は前置詞を有する名詞と結合して、一個の概念をつくるときは、nicht はその名詞又は前置詞を有する名詞の前に置かれる。

名詞と動詞とが結合せる例は、例へば Zeit haben (時間がある)、Mut haben (勇氣がある)、Lust haben (氣がある)、Ursache haben (理由がある) 等で、nicht はこれらの名詞の前に置かれるのである。Ich habe nicht Lust (=keine Lust) [, etwas zu tun]. (われわれは (云々する) 氣がない); Sie haben nicht Ursache (=keine Ursache) [, mir zu danken]. (貴君は私にお禮を云ふ理由はない。) などである。

次に前置詞と結合もるものは、例へば bei Gesundheit sein (健康である)、in Ordnung bringen (整理する)、in Erfüllung gehen (實現される)、zu Stande (od. Zustande) bringen (成就する)、zu Grund (od. zugrunde) gehen (滅びる)、zu Grunde (od. zugrunde) richten (亡ぼす)、in die Schule kommen (出校する) などであつて、例へば、Er war damals **nicht** bei Gesundheit. (彼は當時健康ではなかつた。) (Er ist gestern bei mir **nicht** gewesen). と比較せよ; Er hat es **nicht** zustande gebracht. (彼はそれを成就しなかつた); Wegen Krankheit kommt er heute **nicht** in die Schule. (病氣のため彼は今日學校へ來ない。); これ

を Er kommt in die Schule nicht. とは云はない。この文章と Heute kann ich zu Ihnen (貴君のところへ) **nicht** kommen. とを比較せよ。

VII. 疑問文・命令文・感嘆文にあつては、nicht が正常の位置を離れ、一切の副成分に先行することがある。

Verwechsle nicht deine Vorstellungen mit den Dingen selbst!
(汝の表象を外物そのものと間違へるな!)
Kämpfe nicht wider das Schicksal an!
(運命に抵抗するな!)
Willst du nicht das Lämmlein hüten?
(汝は小羊の番をしやうと思はぬか?)
但し再歸代名詞は前行する。
Gefalle dir nicht in Vorwürfen!
(非難を樂しむ勿れ!; 〔三〕 sich gefallen は再歸動詞。)
Rühme **dich** nicht deiner Enthaltsamkeit!
(汝の節制を誇るなかれ!; sich 〔四〕 rühmen は再歸動詞である。)

【註】 これらの文章に於ても、勿論正常の位置に存する nicht も、あり得るのである。

Achte des Spottes nicht!
(嘲笑を氣にかけるな!; des Spottes は二格補足語である。)

以上は單文章に於ける普通の一定の場合に nicht の置かるべき位置をあげたものである。而して普通の否定は、文章中の或一個の成分を否定するのではなく、文章全體の意味を否定するのであるから、これを文章否定 (Satznegation [文]) と稱する。

【註】 例へば: Er hat meinen Brief nicht gelesen. は、Er hat meinen Brief gelesen. と稱する文章の否定であつて、主語のみを否定す

るのでもなければ、補足語たる meinen Brief そのもの丈けを否定するのでもない。故に文章否定と名づけられるのである。

然るに否定法にはまた別に、文章中の或一個の成分だけを否定するのがある。これを概念規定 (Begriffsnegation) といふ。或一個の概念のみを否定するからである。

【註】 例へば、前例を以て云ふと、Nicht er hat **meinen** Brief gelesen. といへば、「私の手紙を讀んだのは彼ではなく別の人だ。」の義である。これを概念否定と稱するのであつて、文全體としては、肯定的である。

そこで:

VIII 概念否定 (即ち部分否定) にあつては、nicht は否定せんとする言葉の前に置かれる。

例へば「私は昨日彼に手紙をかいなかつた」と普通に云ふならば: Ich habe gestern ihm einen Brief nicht geschrieben. であるが、Ich habe ihm einen Brief nicht **gestern** geschrieben. と云へば、「私は彼に手紙を書いたことは書いたが、昨日ではなかつた。」義であり; Ich habe gestern einen Brief nicht **ihm** geschrieben. と云へば「私は昨日手紙を書いたが、それは彼にではなかつた。」事を意味するのである。Nicht **ich** habe gestern ihm einen Brief geschrieben. と云へば、「昨日彼に手紙を書いたのでは僕ではない。」と云ふ意味である。

又強く或文章部分のみが否定されるときには、これを文頭に持つて來る。例へば:

Nicht **einen Brief** habe ich gestern geschrieben, sondern eine Karte. (私は昨日手紙は書かなかつたが、端書をかいた。)
Nicht **ihm** habe ich gestern geschrieben, sondern meiner

Schwester. (私は昨日彼には手紙を書かなかつたが、私の姉妹にかいた。)
Nicht **gestern**, sondern schon vorige Woche habe ich ihm geschrieben. (昨日ではなくて、もう先週の事だが、私は彼に書いてやつた。)
Nicht **durch Denken**, sondern durch die Empfänglichkeit seiner Sinne wollte Hamann dem Welträtsel nahe kommen.
思索によらず彼れの感能の感受性によつて、ハアマン(學者の名)は世界の謎に近よらうとした。

【註】 nicht, wie.....の意味に注意せよ。

Er hat **nicht, wie** sonst oft, hochmütig das Volk begrüßt.
(彼はこれまで屢やつたやうには、傲然と民衆に、會釋しなかつた;) これまでとは異つてゐる事を示す。
Die Persönlichkeit ist **nicht, wie** die Güter der zwei **andern** Rubriken, dem Schicksal unterworfen. [Schopenhauer].
(人格は二つの他の項目の財寶のやうに、運命に左右されては居ない。)

IX. 感嘆文には無用の nicht が發見される。

Wie schön ist nicht die Einigkeit!
(和合がいかばかり美しいことよ!)
Wie oft habe ich dir das nicht gesagt!
(何遍僕は、君にそれを云つたんだらう!)
Wie unglücklich ist nicht der Mensch ohne Hoffnung!
(希望なき人は、いかばかり不幸であらうか!)

【註】 I. 副文中にも無用の nicht があることがある。後に說かう。

【註】 II. nicht は他の副詞と結んで、いろいろの意味を生ずる。

Nicht doch: 決して然らず (=Nein, durchaus nicht!);
nicht gerade (od. nicht eben): 格別云々ではない。;

nicht im mindesten: 少しくも云々せず。——例へば:

Das Theater häufig zu besuchen ist **nicht eben** nötig.
劇場へ度々行くのは必らずしも必要ではない。

Sein Gewissen regte sich **nicht im mindesten.**
彼の良心は少しも動搖しなかつた。

37. 肯定の副詞 ja と、否定の動詞 nein とは、文外に立ち、後置の Komma を以て區切られる。

Hast du dieses Buch gelesen? (君は此本を讀んだかい?)
Ja, ich habe das gelesen. 〔肯定〕
Nein, ich habe das nicht gelesen. 〔否定〕

但し疑問文に nicht 又は否定詞があるときは、nein, doch を以て答へるのが通常である。

Hast du dieses Buch **nicht** gelesen?
- **Nein**, ich habe das nicht gelesen. (讀まざる時)
- **Doch**, ich habe das gelesen. (讀みし時)

Haben Sie **keinen** Spiegel? (鏡)
- **Doch**, ich habe einen Spiegel. (所持せる時)
- **Nein**, ich habe keinen Spiegel. (所持せざる時)

又正式の問答以外にも、nein は使用せらる。例へば:

(A) Ich habe gestern abend fünf hundert Mark ausgegeben. (私は昨夕五百マーク使つたよ。)
(B) **Nein**, das klingt ganz unglaublich, aber ich will es glauben. (いや、それは全く信じられないやうに聞える、しかし私は信じませうよ。)

(A) Vergessen Sie nicht, diesen Brief auf die Post zu geben! (この手紙を郵便に出すことを忘れないで呉れ玉へ!)
(B) **Nein**, ich werde es nicht vergessen. (いや、忘れません。)

(A) Dieses Buch ist nicht teuer. (此本は高くはない。)
(B) **Nein**, das ist nicht teuer. (いや、高くはないね。)

最後の例の如く、肯定的の意味で、かゝる用法も折々發見される。又自問自答的のものもある。

Nein, du darfst nicht! (いや、それはいかん!)

これは自分自身に向つて云ふのである。

第　二　章

定動詞の數と人稱

1. 客語中、主語の人稱・數に對應して變化する部分を、定動詞 (das finite Verb) と稱することは、前に述べた。しかし定動詞の數や人稱を決定するには、いろいろ考慮すべき事柄がある。此章では、定動詞の人稱や數について、やゝ詳しく考へ、且つ客語たる名詞又は形容詞と、主語との關係について說明しようと思ふのである。

2. 定動詞の形を定めるについて、最も大切なのは、數の關係であるから、さいでは**定動詞の**數と云ふことから說き起さう。まづ定動詞の數は、主語の數によつて、決定されるのであるから、

(A) 主語が單數ならば、定動詞は勿論單數である：

Der Knabe **schreibt.** 〔現〕

Der Knabe **wird** Soldat werden. 〔未〕

Er **ist** Schneider geworden. 〔現・完〕

(B) 主語が複數ならば、定動詞も複數である：

Die Knaben **schreiben.** 〔現〕

Seine Brüder **sind** Soldaten geworden. 〔現・完〕

Wir gingen um acht Uhr zur Schule. 〔過〕

(われらは八時に學校へ行つた。)

3. 主語が、いくつかの單數名詞から成つて居るときは、定動詞は勿論複數である。

Der Knabe und das Mädchen **schreiben.** 〔現〕

Großmutter, Mutter und Kind **waren** in dumpfer Stube beisammen. 〔過〕

(祖母と母と子供とが陰氣な室の中に一緒に居た。)

但し、(I) 二つ又はそれ以上の名詞が、同一事物を示すときは、定動詞は勿論單數である。

Mein Freund und Nachbar **ist** krank. (私の友人であり又隣人である人が病氣である。〔同一人〕)

(II) 同じく二個又はそれ以上の名詞が、一個の概念となれる場合、或は一個の統體として理解さるべき場合には、定動詞は同じく單數である。

Hoffen und Harren **macht** manchen zum Narren.

(期待は多くの人を愚人にする。〔一概念〕)

Der Strom, das Meer, das Salz **gehört** dem König.

(國土は〔流れも・海も・鹽も〕國王に屬する。〔統體〕)

Des Edeln Wort und Tat **klingt** noch nach Jahren **wieder.**

(氣高い人の言行は、永年の後にも、なほ重ねてひゞく；des Edeln は先行二格で、一格は der Edle; 〔統體〕).

【註】 Dummheit und Stolz **wachsen** auf einem Holz.

(愚と自慢とは同一の木の上に生ずる。)

此例では Dummheit と Stolz とを明瞭に區別したものである。

(III) 數理的計算では、普通單數の定動詞を使用する。

Drei und drei **macht** (od. **gibt, ist**) sechs.

(三加へる三は六である。)

Zweimal drei **ist** sechs.

(三の二倍は六である。)

Zehn von zwölf **bleibt** zwei.

(十二から十を引けば二が殘る。)

【註】 此場合、複數形がない譯でもない。

Zwei Mark und noch zwei Mark sind vier Mark.
(二マルクともう二マルクとは四マルクである；但しこれは勿論 ist とも云へる。)

(VI) 主語がいくつかの名詞から成つてゐて、そのうちに複數名詞が存在しても、定動詞が主語に先行し〔倒置法〕、定動詞の直後に來る主語が單數なる時は、定動詞は單數でも宜しい。

Dem König **gehört** das Meer und die Länder.
(國王に海と國々とが屬する；但しこれを Das Meer und die Länder gehört dem König. とは云はず；此時は複數形の gehören にする。)
An der einen Seite **stand** ein Tisch, ein Sessel und mehrere Stühle. (一方の側には机一つ、長椅子一つと椅子數個があつた；然し Ein Tisch, ein Sessel und mehrere Stühle **standen** an der einen Seite. と云ふ。)

4. 同一の客語動詞を要するいくつかの主語のうち、第一の主語の直後に、客語動詞（定動詞）が來り、他の主語は之に次ぐときは、定動詞の數は、勿論第一の主語に依る。

Meine Mutter **kommt** und meine Schwestern.
(私の母が來る、私の姉妹たちも；但し Meine Mutter und meine Schwestern **kommen**. とする。)
Das Wohnhaus **war** niedergebrannt und sämtliche Ställe.
(住宅は焼け落ちた、それから全部の厩も；但し Das Wohnhaus und sämtliche Ställe **waren** niedergebrannt. としなければならぬ；複數名詞が前行するときは、勿論定動詞は、複數である：Sämtliche Ställe **waren** niedergebrannt und das Wohnhaus.)

Der Hauptmann **ritt** über die Brücke und auch die Soldaten.
(大尉は橋を越えて騎行した、そして兵士たちもまた；但し Der Hauptmann und die Soldaten **ritten** über die Brücke. となる。)

5. いくつかの數名詞が、所謂分*離的接續詞 (das trennende Bindewort) なる oder (又は)、sowohl……als (auch) (並びに)、teils……teils (或部分は……或部分は)、entweder……oder (……か……か〔either……or〕)、weder……noch (……でもなく……でもない〔neither……nor〕)、nicht nur……sondern auch (單に云々ばかりでなく却つて又〔not only……but also〕)、wie (如く、も)、sowie (並びに) 等によつて接續されるときは、定動詞は單數である。

【註】 *分離的と云はれる譯は、連結せらるゝ客體が、各單獨 (allein) にあらはされてゐるやうに見えるからである。

Nicht allein das Wohnhaus, sondern auch die Scheune **war** niedergebrannt.
(單に住宅のみではなく、穀倉もまた焼け落ちた。)
Sowohl er wie sie **war** zugegen.
(彼も彼女も出席した。)
Entweder der Kapitän oder der Steuermann **ist** verantwortlich für die Ladung des Schiffes.
(船長か或は舵手が、船の積荷に對して責任がある。)
Der König oder der Kronprinz **wird** dem Feste beiwohnen.
(國王か或は太子かが祝祭に列席するであらう。)
Teils Übermut, teils Trotz **hat** ihn zu dieser Tat verleitet.
(或部分までは傲慢が、又或部分までは强情が、彼を誘惑してこの行爲をなさしめた。)
Weisheit sowie Wissenschaft **ist** Waffe gegen das Laster.
(知識も學問も罪惡に對する武器である。)

Höflichkeit wie Anstand **verbietet** Geschrei und Tränen.
(禮儀も作法も叫喚や流涕を禁ずる。)
Weder der Vater noch die Mutter ist gekommen.
(父も母も來なかつた。)

【註】 I. 意味が大體同一でも、上記のものを使つた場合と、und を使つた場合とは、定動詞の數を異にする。例へば:

Weder Preußen noch das junge Reich **war** stark genug dazu. (それには、普魯西も、若い帝國も、充分に强力ではなかつた。)
Preußen und das neue Reich **waren** nicht stark genug dazu.
(それには普魯西と若い帝國とは充分に强力でなかつた。)

【註】 II. Sowohl.....als (auch), weder.....noch, nicht nur.....sondern auch, teils....., teils 等については、往々定動詞の複數形が使用されることがある。

Sowohl sein Vater als auch seine Mutter **sind** gekommen.
Weder Kahn noch Schiffe **kamen** wieder zum Vorschein.
(小舟も舟人も二度とあらはれて來なかつた。)
Nicht nur das Wohnhaus, sondern auch die Scheune **waren** niedergebrannt.

但しこれらは本文の通り、單數にする方が、宜しいのである。又 sowohl.....als (auch) の als の前、sowie, wie の前には、今では Komma をつけない。

6. 二つ又はそれ以上の名詞が、und ではなくて、前置詞 mit, samt (共に)、nebst (共に)、auf (後に)、nach (後に) を以て結合されたるとき、第一の名詞が單數ならば、定動詞は單數である。

Das Schiff samt der Ladung und Mannschaft **ging** zu Grunde (od. zugrunde). (船は積荷や乘組員と共に沈沒した。)

Ein Tag nach dem andern **verstrich**.
(一日又一日と經過した。)
Die Kirche samt den Türmen **ist** abgebrannt.
(教會堂は塔と共に燒け落ちた。)

7. 集合名詞 (Sammelname [M.]) は、元來、形單數にして、その指示するものは、個體の集まれる複數のものであつて、Menge [F.] (多數)、Haufe [M.] (集まり)、Schar [F.] (群れ)、Truppe [F.] (隊)、Reihe [F.] (系列)、Dutzend [N.] (ダアス) 等は、これに屬するのであるが、これらの後に:

(I) 冠詞も前置詞も形容詞もなき複數名詞が、後續するときには、定動詞の數は、通常複數である。

Eine Menge Bücher **lagen** auf dem Tisch.
(澤山の本が机の上にあつた。)

【註】 かゝる eine Menge は viele と同じと考へてよろしい; 即ち Eine Menge Bücher=viele Bücher. 從つて之に對する定動詞は、複數ならざるを得ないのである。其他のものも、manche, einige 等の不定數と、同じだと考へてよろしい。

Eine Anzahl **Matrosen verließen** das Schiff vor der Abfahrt. (水夫の一群が出航前に船を去つた。)
Ein Heer **Soldaten marschierten** nach Frankreich.
(一隊の兵士がフランスへ進軍した。)
Ein Dutzend **Hasen wurden** geschossen.
(兎が十二匹射られた。)

【註】 此場合、定動詞を單數形にする人もある。これは多數のものを、一個の統體 (ein Ganzes) として考へたものと解してよろしい。

Ein Dutzend Eier **kostet** eine Mark 〔四格〕.
(一ダースの卵の價は一マルクだ。)

Eine Menge Menschen **kam** dabei um.
(多數の人々がその際に死んだ。)

(II) 上揭の場合、後續名詞が形容詞を持つて居ても、前行の集合名詞と同格ならば、定動詞の數は同じく複數である。

Ein Schock **frische Eier kosten** fünf Mark.
(五ダアースの新鮮な卵の價は五マルクだ。)
Ein Dutzend **neue Hemde sind** bestellt worden.
(一ダアースの襯衣が注文された。)
Eine Menge **aufgeregte Menschen waren** da.
(澤山の興奮した人たちがそこに居た。)

(III) 上揭の集合名詞の後に、複數二格の名詞又は von を有する複數名詞が來るときは、定動詞は、通常單數である。

Eine Menge aufgeregter Menschen **war** da.
(興奮せる澤山の人々がそこに居た。)
Eine Menge von Menschen **war** da.
(人々の澤山がそこに居た。)

【註】かゝる場合には、二格又は von を有するものは、前行の集合名詞に對して、明瞭に附加語の關係にあるから、定動詞はこれに關係し得ずと覺えてよろしい。

Eine Schar Bewaffneter **drang** in die Stadt ein und **steckte** die Häuser in Brand.
(武裝せる人たちの一隊が市に侵入して、家々に火を放つた; etwas in Brand stecken=或ものに火をつける。)

【註】此 Bewaffneter を名詞と考へてはいけない。これは bewaffnen (武裝させる) と云ふ動詞の過去分詞 bewaffnet を形容詞的名詞的に用ひたもので、單數一格は der Bewaffnete (武裝せるもの)、

ein Bewaffneter; 複數一格は die Bewaffneten, 其冠詞がなければ、Bewaffnete である。上揭の Bewaffneter は此 Bewaffnete の二格であつて、bewaffneter Leute の Leute を取つた意味と考へればよろしいのである。

Eine Anzahl meiner Schüler **hat** mich gestern besucht.
(私の生徒の一群が昨日私を訪問した。)
In der Besprechung **wurde** eine große **Anzahl** von Gründen angeführt.
(討議に於ては、理由の澤山が引いて來られた。)

【註】I. しかし此場合に定動詞を複數形にする人がない譯ではない。

Später **erschienen** noch **eine Menge** anderer Besucher [Wildenbruch]. (後になつて他の訪問者のなほ澤山があらはれた。)
Eine große **Menge** Verwundeter **bedeckten** das Schlachtfeld. (負傷せる人たちの澤山が戰場を蔽ふた; 此 Verwundeter は同じく形容詞の複數二格の形で、本當の名詞でない事は、前述の Bewaffneter と同じである。)
Eine Anzahl von Beamten **sind** zusammengetreten.
(官吏の一群が集合した。)

【註】II. 序でながら云ふのであるが、後續名詞なき集合名詞は、勿論定動詞を單數に於て要求するけれど、古くは複數を用ゐた例もある。

Das kleine Volk **liefen** voraus. (小國民が先に走つた。)

8. その他、定動詞の數について、注意すべき事柄は、下の如くである。

(A) 尊稱、卽ち Majestät [F.] (陛下)、Hoheit [F.] (殿下)、Durchlaucht [F.] (殿下)、Exzellenz [F.] (閣下) 等を主語とする時は、特に敬意をあらはすために、定動詞を複數にする。

Eure (略) Ew.) Exzellenz **wollen** verzeihen!
(閣下、お宥し下さい!)
Euer (略) Ew.) Wohlgeboren **wollen** günstigst erlauben, daß..... (閣下、願はくは云々をお許し下さい、.....)
Seine Majestät der Kaiser **haben** befohlen, daß.....
(皇帝陛下は云々と命令された。)
Seine Königliche Hoheit **wünschen**, daß.....
(殿下は云々を望ませらる。)
Ihre Majestät die Kaiserin **haben** heute morgen nach Yokosuka begeben.
(皇后陛下は今朝横須賀へ行幸されました。)

【註】 Euer, Eure 等は貴人の面前にて使用し、seine, ihre (her) は貴人を第三者として話すときに使ふ。そして後の場合でも seine 又は ihre の頭字を、大書するのが普通である。

上掲の如き敬稱なき場合に於ても、尊敬を示すために、定動詞を複數にすることがある。

Herr Oberst **wollen** verzeihen!
(大佐殿、お宥し下さい!)
Sind der Herr Geheimrat zu Hause?
(顧問官殿は御在宅ですか?)

【註】 Geheimrat は樞密院顧問官の義なれど、今は大抵勅任官の身分を示す稱號にすぎない。故參教授は此稱號を持つ。墺太利では、Hofrat といふ。

Die gnädige Frau **sind** eben ausgefahren.
(奥様は丁度車でお出でになりました。)

(B) 一文中に文法の主語と論理上の主語と、共存するときは、定動詞の數は、論理上の主語で決定される。

Es ist eine Uhr in meiner Tasche.
(私のポケットのなかに時計がある。)
Es sind drei Herren in diesem Zimmer.
(此室のなかには三人の紳士が居る。)
Es lebe der Kaiser! (皇帝萬歳!)
Es sind nicht **alle Menschen** grausam.
(凡べての人間が酷いといふわけではない。)

(C) sein を用ゐて連結する主語が、代名詞 dies, das, jenes, es 等であるときには、定動詞の數は、客語名詞の數できまる。

Es ist mein Stock. (それは私のステッキです。)
Das sind meine Kinder. (あれは私の子供たちです。)
Dies sind seine Bücher. (これは彼の書物です。)

【註】 これはまた客語が、人代名詞のときにも行はれる。

Das **bin** ich. Das **sind** wir.

但し es の場合には、位置が轉倒する。

Ich bin es. Wir sind es.

(D) 主語と客語名詞とが、數に於て一致しない場合には、——即ち主語が單數で、客語が複數名詞であるとか、主語が複數で、客語が單數名詞であるとかの場合には、——定動詞は複數だと記憶してよろしい。

Mein alles〔單〕 **sind** meine Kinder〔複〕.
(私のすべては、私の子供たちである。)
Die Ungarn〔複〕 **waren** ein Nomadenvolk〔單〕.
(匈牙利人は遊牧の民であつた。)
Die Heuschrecken〔複〕 **sind** eine Plage〔單〕.
(きあしばつたは、一つの災害である。)

Eine Krone〔單〕 sind zehn Mark〔複〕.

(一クロネは、十マルクである。)

Inhaltsangaben〔複〕 sind nicht der Zweck dieses Buches〔單〕. (內容梗概は、本書の目的にあらず。)

【註】 以上揭げたものは、通則であるが、時にはこれとちがつた用例もある。

Eine Krone〔單〕 ist zehn Mark〔複〕.

Die Bewohner〔複〕 dieser Gegend ist ein eigentümlicher Schlag〔單〕. (此地方の住民は、一種特別の種族である。)

(E) 文法上の形は、複數だけれど、意味上單數なる名詞に對する定動詞は、冠詞あるときには複數、これなきときは單數形を採るを普通とする。—— Pfingsten (Pentecost, 聖靈降臨節)、Ostern (Easter, 復活祭)、Weinachten (Christmas, クリスマス) 等がこれである。

Die Ostern **fallen** / Ostern **fällt** } dieses Jahr spät.

(復活祭は今年は遲い。)

Die Weihnachten **kommen** / Weihnachten **kommt** } bald.

(クリスマスはぢきに來る。)

【註】 I. 然し無冠詞でも、定動詞が複數形のこともある。

So **waren** wieder Pfingsten gekommen.

(かくしてまた降臨祭が來た。)

【註】 II. 序でながら云ふのであるが、これらの名詞は、元來複數形であるけれど、今では複數の die の形によつて、女性單數と見られ、または der Tag の意味から見て、男性單數と考へられて取

扱はれるが、最普通なのは das Fest (祝祭) の意味によつて、中性單數として待遇される方法である:〔例〕 die ewigen Ostern des Herzens〔Keller〕〔複數として取扱へるもの〕; jede Weihnachten〔Fontane〕〔女性として取扱へるもの〕; Gedenkt du noch an **einen** Weihnachten? (おんみはなほ或クリスマスを覺えてゐるか?)〔Storm〕〔男性として取扱へるもの〕; auf ein frohes Weihnachten〔Fontane〕〔中性として取扱へるもの〕——〔Curme に依る〕。

9. いくつかの主語が、代名詞であつて、各人稱を異にするときには、定動詞の數は、次の規則で定める。

(I) 主語が一人稱と二人稱、又は一人稱と三人稱とであるときには、定動詞は一人稱複數の形を採る。

Du〔二•單〕 und ich〔一•單〕 / Er〔三•單〕 und ich〔一•單〕 } **sind** zu spät gekommen. (遲參した)

以上は共に單數と單數との例であるが、複數でも同樣である。

Ihr〔二•複〕 und ich〔一•單〕 / Sie〔三•複〕 und ich〔一•單〕 } **sind** zu spät gekommen.

但し兩方の代名詞を一括して、wir としてもよろしい。然るときには、二つの代名詞と wir との間に、Komma を置く。

Du und ich, / Ihr und ich, } **wir** sind zu spät gekommen.

一個が名詞であつても同樣である。

Dein Bruder und ich / Deine Brüder und ich } **sind** zu spät gekommen.

(II) 主語が二人稱と三人稱とより成るときは、定動詞は、三人稱複數となる。

Du 〔二•單〕 und er 〔三•單〕 **seid** alte Bekannte.
Ihr 〔二•複〕 und er 〔三•單〕 (舊知である)

二個の代名詞を、一個の ihr にて總括することが出來る；その場合の取扱は、上述と同じ。

Du und er, **ihr** seid alte Bekannte.

一個が名詞であつても、同樣である。

Du und mein Bruder **seid** alte Bekannte.
Du und sein Bruder, **ihr** seid alte Bekannte.

(III) 双方が三人稱ならば、定動詞は三人稱複數であることは云ふまでもない。

Er und sie 〔三•單〕 **haben** gleiche Schicksale.
(彼と彼女とは同じ運命を有する。)
Er und seine Kinder **sind** nach Kyoto gegangen.
(彼と彼の子供たちは京都へ行つた。)

【註】 und で連結しても、定動詞の數は、最後の主語に從ふ例もあるけれど、これを學ぶ必要はない。

Ich und alle Welt **erkennt** das an.
(私も世間もそれを承認する。)

10. 前節の und の代りに、oder, sowohl.....als (wie) [auch], nicht nur.....sondern auch, entweder.....oder, weder.....noch, teils .....teils 等第五節にあげたる接續詞が使用さるるときは、定動詞は、それに近き代名詞によつて定形される。

Weder ich noch **du** kannst ihm helfen.
(私も君も彼を助けることは出來ぬ。)
Entweder du oder **ich muß** reisen.
(君か僕かが旅行しなければならぬ。)

Nicht allein er, sondern auch **du wirst** bestraft werden.
(彼計りでなく、君も亦罰せられなければならぬ。)
Teils unser Freund, teils ich, teils **du bist** daran schuld.
(或部分まではわれわれの友人が、或部分までは私が、又或部分までは君が、それに對して責を持つのだ。)

【註】 然るに第一の主語によつて、定動詞が定形されることもある。

Du sowohl wie ich **bist** es gewohnt.
(君も僕もそれに慣れてゐる。)

但しこの眞似をする必要はない。

11. 定動詞の數については、如上でほぼ說きつくして居ると思ふ。そこで序でに、客語名詞の性に就いて述べて置かう。

I. 客語名詞の性は、それが男性女性によつて、特別の形を有するときにのみ、主語の性と一致する。

Die Zeit ist **eine Trösterin.**
(時は慰籍者である；Trösterin の男性は、勿論 Tröster である。)
Hunger [M.] ist **der** beste **Koch.**
(空腹は最上の料理番である；Koch の女性は Köchin である。)
Er ist ein Maler. (彼は畫家である。)
Sie ist **eine Malerin.** (彼女は女流畫家である。)

但し主語の擬人化(人格化)の程度低きときは、客語の性は重視されない。卽ち一致しないことが、あり得る。

Die Bibel ist **unser** bester **Führer** auf unserm Lebenswege.
(聖書は、われらの生活の道に於ける最良の案內者である；主語は女性で、客語は男性である)。

Die Not ist **der** beste Lehrer.
(窮困は最上の教師である；同上。)

II. 中性名詞が主語であるときには、客語には大抵男性名詞を使用する。

Das Leben ist **ein Lehrmeister.** (生活は教師である。)
Das Gesetz ist **der Freund** des Schwachen.
(法律は弱者の友人である。)

III. 客語たる名詞が男性女性によつて、特別の形を有せざる場合には、性の一致はあり得ない。

Die Nachtigall ist **ein Vogel.** [M.]
(鶯は鳥類である；主女、客男。)
Die Tochter ist **der Liebling** ihres Vaters.
(娘はその父の寵兒である；同上。)
Die Tochter ist **das Ebenbild** ihres Vaters.
(娘は父の生寫しである；主女、客中。)

IV. 主語の文法性とその自然性とが一致しないときには、客語名詞は自然性に依るべきである。

Das Mädchen ist **Erzieherin** geworden.
(少女は家庭教師になつた；少女の自然性は女性なるを以て、女性名詞にて受けたるもの。)

12. 客語形容詞は、主語の屬する種類・階級又は所屬團をあらはすときのみ、これに冠詞と語尾とを附ける。その他の場合に、かゝる形を採らしめるのは、誤謬であつて、形容詞は裸のまゝ使用しなければならぬ。

【註】但し客語として用ゐられた最上級は、定冠詞を取るのであるが、それとこれとは別である。

Dieses Schiff ist **ein** englisches.
(この船は英國船である。)
Dieser Winkel ist **ein** rechter. (此角は直角である。)
Diese Frage ist **eine** rein wirtschaftliche.
(此問題は純粋に經濟的な問題である。)

【註】ein englisches の性は Schiff に依つたもので、即ち Dieses Schiff ist ein englisches Schiff. の義であり、Dieser Winkel ist ein rechter. は後に Winkel を略せるもの、Diese Frage ist eine rein wirtschaftliche. もその後ろに Frage を略したものと考へてよい。

然し普通の場合には、

Meine Arbeit ist vergeblich gewesen.
(私の勞働は、無駄であつた。)
Sein Mißtrauen war unbegründet.
(彼の疑念は無根據だつた。)
Die Kinder sind fröhlich. (子供たちは快活である。)

【註】これを、Meine Arbeit ist **eine** vergebliche gewesen. Sein Mißtrauen war **ein** unbegründetes. Die Kinder sind fröhliche. などとするのは間違である。何となれば、語者は、Arbeit を erfolgreiche (成功多きもの) Arbeit と vergebliche Arbeit との二種類に分けて、その一方に meine Arbeit を編入しようと思ふのでもなく、Mißtrauen を begründetes (根據のある) Mißtrauen と unbegründetes Mißtrauen との二つに區分して、sein Mißtrauen をその一方に入れようとする考へでないし、まして況んや、Kinder なるものを fröhliche Kinder と unfröhliche Kinder の二つに分別して、當面の問題となれる子供たちを、その一方に編み込まうとするのでは、決してない。だから冠詞を有する形は、明らかに間違であるが、彼土では此間違は、屢見られる相である。

第　三　章

單文章の解剖

1. 文章の解剖を學ぶことは、正確に獨文を邦譯するためにも、または的確に邦文を獨譯するためにも極めて、有益なことであつて、これによつて獨文の組立てを明瞭に理解し、行文措辭の方法を會得し得るのである。而して文章の解剖を學ぶには、まづ單文章から初むべきは勿論であるが、單文章の解剖に通じたなら、單文章の集合なる複合文章の解剖は、特に之を說かなくとも、容易に理解されるであらう。

2. 單文章を解剖するに當つては、まづ文章の二つの主成分、卽ち主語と客語とを索め出さねばならぬ。— それは丁度邦文和譯にあたつて、いづれの詞を主語とし、いづれを客語とすべきかを、まづ考慮しなければならないのと同じである。

【註】 邦文は往々主語を缺いて居るから、譯文の折には、特に何を主語とすべきかに注意しなければならず。また或場合には、man なる主語を用ゐて極めて、便利を得る事を念頭に置く必要がある。

主語と客語とが見つけ出されたなら、主語については、その修飾(擴大)たる附加語を求め出すことが順序であり、客語については、それに附屬すべき補足語を、wen? was? wem? wessen 等の問によつて捕捉し、副詞的規定は、wo?(どこで?)、wann?(いつ?)、wie?(いかにして?) warum? (何故に?) 等の問によつて把握すべきである。

3. 今主語を S, 客語動詞を P, 客語が sein (bleiben, werden, scheinen 等) と名詞又は形容詞とから成るときは、これを P_1

とし、補足語を O, 附加語を A, 副詞的規定を Adv. と略することとして、單文章を解剖してみると:

【註】 此方法は全く、O, Menſing 氏の文法に依るものである。(Menſing, Deutſches Hilfsbuch, Zweiter Teil. 1931).

1. Das Kind gehorcht.

【註】 冠詞は分離せず; 名詞の一部として取扱つておく。

S=das Kind.　P=gehorcht.

2. Das gute Kind gehorcht.
S=das Kind.　A=gute.　P=gehorcht.

3. Das gute Kind gehorcht gern.
S=das Kind.　A=gute (S に對して [zu]).　P=gehorcht
Adv.=gern.

4. Das gute Kind gehorcht den Eltern gern.
S=das Kind.　A=gute (S に對して [zu]).　P=gehorcht.
O=den Eltern.　Adv.=gern.

以上は、客語が動詞より成る場合であるが、客語が上掲 sein 等と名詞又は形容詞とから成るものの例は、次の通りである。

(A) sein+名詞の場合。

1. Salomo war ein König.
S=Salomo.　P^1=war ein König.

2. Salomo, der Sohn Davids, war ein König.
(ダヴィデの子息ソロモンは王であつた。)
S=Salomo.　A (S に對して [zu])=der Sohn Davids.
P^1=war ein König.

【註】 der Sohn Davids を更に分解すれば、Davids は der Sohn に對する A であることは、云ふまでもない。

3. Salomo, der Sohn Davids, war ein weiser König.
(ダヴィデの子息ソロモンは賢い王であつた。)
S=Salomo. A (S に對し [zu])=der Sohn Davids.
P¹=war ein König. A (P¹ に對し)=weiser.

4. Salomo, der Sohn Davids, war ein sehr weiser König der Juden.
(ダヴィデの息子、ソロモンは猶太人の賢王であつた。)
S=Salomo. A (S に對して [zu])=der Sohn Davids.
P¹=war ein König. A (P¹に對し [zu]) (1) der Juden; (2) weiser.
Adv. (P¹ の A に對し [zu])=sehr.

(B) sein+形容詞の場合。

1. Der Frost ist schädlich.
S=der Frost. P¹=ist schädlich.

2. Der Frost der Nächte ist schädlich.
(夜の霜は有害である。)
S=der Frost. A (S に對し)=der Nächte.
P¹=ist schädlich.

3. Der Frost der Nächte ist sehr schädlich.
S=der Frost. A (S に對して)=der Nächte.
P¹=ist schädlich. Adv. (P¹ に對して)=sehr.

4. Der Frost der Nächte ist den Blumen sehr schädlich.
(夜の霜は花卉にとつて甚有害である。)
S=der Frost. A (S に對して)=der Nächte. P¹=ist schädlich.
Adv. (P¹ に對し) sehr. O (P¹ に對して)=den Blumen.

以上の例によつて、もつと複雜せる文章を解剖することは、大して面倒ではない。

1. Der Knecht des Königs dankte dem freundlichen Bauern herzlich.
(王の召使は親切なる百姓に心から感謝した。)

S=der Knecht. A (S に對して)=des Königs.
P=dankte. O=dem Bauern. A (O に對し)=freundlichen
Adv.=herzlich.

2. Eine stolze Krähe schmückte sich mit den ausgefallenen Federn der Pfau.
(或高慢な烏が、孔雀の脫けた羽毛で、自分を飾つた)。
S=eine Krähe. A (zu S)=stolze. P=schmückte.
O=sich. Adv.=mit den Federn. A (zu Adv.)=(1) ausgefallenen; (2) der Pfau.

3. Der kleine Sohn des Bauern brachte dem durstigen Wanderer schnell einen Trunk kühlen Wassers.
(百姓の小さい息子が、渴してゐる旅人に、一口の冷水を速かに持つて來てやつた。)
S=der Sohn. A (zu S)=(1) kleine; (2) des Bauern.
P=brachte. O=(1) dem Wanderer; (2) einen Trunk.
A (zu O [1])=durstig; (zu O [2])=Wassers.
A (zu Wassers)=kühlen.

4. Ein Schäfer hatte durch eine grausame Seuche seine ganze Herde verloren.
(或牧羊者が、殘酷な疫病によつて、彼の全家畜群を失つてしまつた。)
S=ein Schäfer. P=hatte verloren.
Adv.=durch eine Seuche. A (zu Adv.)=grausame.
O=Herde. A (zu O)=(1) seine; (2) ganze.

5. Man hat mich der Treulosigkeit ohne Grund beschuldigt
(人々は理由なくして、私に不誠實の罪をきせた。)
S=man. P=hat beschuldigt.
O=(1) mich, (2) der Treulosigkeit. Adv.=ohne Grund

【注】(4 の hatte verloren, (5) の hat beschuldigt の如き形に於て、hatte, hat (定動詞) に附屬する部分、即ちこゝでは過去分詞を、Er ist klug. Er ist Lehrer. に於ける klug や Lehrer と同じく、Prädikativum と名づける人がある。しかし名稱についての事柄は、實際上左程重要ではないのである。

6. Seien Sie deswegen ganz unbesorgt!
(その事なら全然御心配に及びません。)
S=Sie. P1=seien unbesorgt Adv.=(1) deswegen; (2) zu P1) ganz.

4. 以上の諸例は文章の各成分が、單一なる場合であるが、各成分とも單一ではなく、いくつかのものが重複して居ることがある。——これを或成分が mehrgliedrig (多項) だと稱するのである。例へば:

Du und ich sind alte Bekannte.
(君と僕とは古い知合である。)

に於ては主語が二個から出來て居るし、

Die Angriffswaffen der Griechen waren Lanzen, Schwerter, Wurfspieße, Bogen und Schleudern. (希臘人の攻擊武器は、槍と刀と投槍と弓と投石機とであつた。)

と云へば、客語名詞は五個となる。又次の文章に於ては、客語形容詞が三個である。

Sein Sohn ist fleißig, klug und gesund.
(彼の息子は勤勉で、利口で、健全だ。)

また客語形容詞と客語名詞との混合したものゝ例をあげると;

Unser König ist gütig, gerecht, tapfer und ein Schützer der Kunst. (われらの王は親切で、正しく勇敢で、又藝術の保護者である。)

の如きもので、この文章では客語形容詞は三個、客語名詞は一個である。

次に補足語の重複したものを示すと、二個の例は:

Er hat dich oder mich getäuscht.
(彼は君か僕かを欺いた。)

であり、三個の補足語の例は:

Lebensmittel, Vieh und Leder erbeuteten die Sieger in großen Mengen. (食料や家畜や革皮やを、戰勝者たちは、ふんだんに分捕りした。)

の如きである。——但し補足語について、重複と云ふのは、同一種類のものの重複せる義で、異種類の補足語、即ち一方が三格で、他方が四格とか、一方が二格で、他方が四格であるとか云ふ種類のものは、別問題である。

Friedrich liebte und pflegte auch Künste und Wissenschaften. (フリードリッヒ(王)はまた美術と學問とを好愛し且つ保護した。)

と云ふ文章では、客語動詞が二個あると共に、同一種類の補足語も、また二つある。また、

Wirst du heute abend oder morgen abreisen?
(君は今朝出立するのか、明日立つのか?)

に於ては、同一種類の副詞的規定 — こゝでは時の副詞的規定が二つある。此場合も補足語の場合に於けるやうに、異種の副詞的規定がいくつかあると、それは別の問題になるのである。

Die Österreicher, Franzosen, Russen wurden bei Prag, Roßbach, Zorndorf geschlagen.
(墺國人・佛國人・露西亞人は、プラーハやロスバッハやツェルンドルフで打ち破られた。)

に於ては、主語が三つあると共に、所の副詞的規定が、三個あるのである。又、

Das war ein schnell und glücklich beendigter Krieg.
(それは、一つの速かに而して好都合に終られた戰爭であつた。)

に於ては、附加語的に用ゐられた分詞 beendigter に二つの副詞的規定 schnell と glücklich とが、關與してゐる。

【註】 かく文章の各成分の重複な、いくつかの收縮から來るものと考へる人がある。例へば、Cäsar kam, sah und siegte. (シーザーは來た、見た、而して勝つた。) は、Cäsar kam. Cäsar sah. Cäsar siegte. と云ふ三個の單文章を收縮したものだと說くのであるが、今ではかゝる考へ方よりも、或文章成分の重複と考へる方が多く、またその方が實用的である。しかし、どうしてもいくつかの單文章の收縮と見なければならぬものは別に在る。これは『文章の收縮』(Zusammenziehung [F.]) といふ章で、後に說かうと考へて居る。

5. 主語・客語及び附加語的形容詞が、二個又はそれ以上存在するときは、それらが und または oder によつて連結されざる限り、相互の間に Komma を入れる。これについては、屢々記してあるから、反覆する要はないが、一寸例をあげると:

Vater, Sohn und Neffe sind in derselben Schlacht gefallen.〔主〕
Wir haben den König, die Königin und den Kronprinzen gesehen. 〔補〕

但し附加語にあつては、Komma の有無によつて、意味を異にするのも、既述の通りである。

das tapfere japanische Volk (勇敢なる日本民族)
der tapfere, kluge Feldherr (勇敢にして利口な將軍)

副詞的規定も異種のものの間に、Komma を必要とはしないが、同種のものゝ時には、折々これを附ける。

In Ost und West, in Süd und Nord, überall erklang die Kriegstrompete. (東も西でも、南でも北でも、到るところで戰爭の喇叭が鳴り響いた。)
Mit einer ganzen Energie, mit vielem Takt und dem ganzen Aufwand seiner Autorität trat er für die Werke seines Freundes ein. (全體のエネルギーを以つて、多くの機略と彼の權威の全部的支出を以て、彼は彼の友人の作を擁護した。)

然し異種のものゝ例をあげると:

Jeden Tag fahre ich mit der Eisenbahn nach der Stadt.
(毎日私は汽車で町へ行く。)
Er kehrte heute von Paris mit seinem Freunde wegen Familienverhältnisse und zur Regelung seiner Geschäfte zurück. (彼は今日巴里から彼の友人と一緒に家事のために及び彼の商賣の整理のために歸つて來た。)

に於て見るやうに、各の種類を異にした副詞的規定の間には、Komma の必要はないのである。

【註】 但し各の副詞的規定の間の關係を明確ならしめんがために、好んで Komma を使用する人がある。Schopenhauer の如きその一人だと思はれる。この哲人にあつては、一般に Komma のあま

り多いために、意味が却つて不明になることすらある。現代の執筆家で、極めて Komma を惜しむのは、先日物故した Gundolf 教授だらうと思ふ。

6. 文章を解剖して、其構成を圖式にあらはしたものを、文章圖 (Satzbild [N.]) と稱する。文章圖の書き方には、いろいろあるやうであるが、こゝでは上掲の Mensing 氏の方法のみを示して置く。

例へば上掲の：

Der Frost ist schädlich.

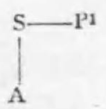
は主語 (S) と客語 (P^1) とから成るから、その圖式は、

S——P^1.

であるが、

Der Frost der Nächte ist schädlich.

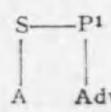
は、主語 (S) とそれにつく附加語と、客語とから成るが、故に圖式は：



となる。更らに：

Der Frost der Nächte ist sehr schädlich.

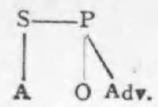
と云ふと、前述のものの外に、客語形容詞を制限する副詞的規定が來るから、圖式は：



となる。又やや複雜したる、

Das Kind gehorcht den Eltern gern.

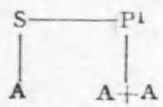
と云へば、主語と客語動詞とそれに對する補足語と副詞的規定とから成るから、圖式は、



となり、

Salomo, der Sohn Davids, war ein weiser König der Juden.

に於ては、主語に附加語として同格名詞があり、又客語名詞には二個の附加語があるので、



となる。なほ一つの例をあげると、

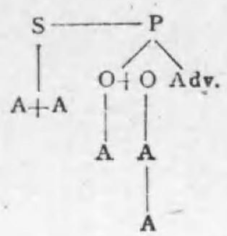
Eine stolze Krähe schmückte sich mit den ausgefallenen Federn der Pfau.

に於ては、主語に附加語があり、副詞的規定にも同樣に附加語があり、sich は補足語だから：

となる。最後に：

Der Sohn des Bauern brachte dem durstigen Wanderer schnell einen Trunk kühlen Wassers.

を圖解すると、補足語は二個あり、その一つには附加語があるから、



となる。勿論かゝる圖式の外に、別の圖式の方法も存するのである。

第四章

複合文章

第壹節

對結文章

1. 單文章が、二つまたはそれ以上集まつて、一つの文章を構成するとき、この出來た文章を複合文章 (der zusammengesetzte Satz) と稱するのである。この複合文章を構成する個々の文章の間には、二種の關係があつて、その各が對等の關係を以て結ばれて居る場合と、一方が他方の從となる場合とである。

今茲では、説明を簡短にするために、二個の單文章から成る複合文章から初めやう。かく二個の單文章から組み立てられたものを、單純複合文章 (der einfach zusammengesetzte Satz) と稱し、三つ以上の單文章から成るものを、複雜複合文章 (der mehrfach zusammengesetzte Satz) と名づけるのである。

【注】 單文章と複合文章との區別は、文章の長短で見ようとするなら、それは大なる間違で、短かい複合文章もあれば、長い單文章も勿論あり得る譯である。例へば、Der Mensch denkt, Gott lenkt. (人は考へ、神は導く) と云ふ文章は、二個の單文章から出來てゐるから、勿論複合文章である。しかるに Feuer, Wasser, Luft und Erde mußten sich trotz ihres Widerstrebens und ihres beständigen Kampfes gegen die Herrschaft des Menschen doch endlich unter die Gewalt des Menschengeistes beugen. (火も水も空氣も大地も、それの反抗とまた人間の支配に對する不斷の鬪爭とにも拘らず、それでも仕舞には人間の精神の力の下に屈服しない譯には行かなかつた。) と云ふ文章は長い事は、長いが、こ

れは單文章で、或文章成分は多項 mehrgliedrig) であり、或他の文章成分は、多くの附加語的部分を有するにすぎないのである。但し最も短かい單文章が、最も短かい複合文章より短かいことは云ふまでもあるまい。Die Blume blüht〔短•單〕.; Der Mensch denkt, Gott lenkt.〔短•複〕

2. さて單純單文章に於て、前述の對等と、非對等との關係を、簡短な例で示すと：

1. Das Mädchen liest, der Knabe schreibt.
(少女は讀み、少年は書く。)
2. Das Mädchen liest, und der Knabe schreibt.
(少女は讀む、そして少年は書く。)
3. Das Mädchen liest, während der Knabe schreibt.
(少年が書いてゐる間に、少女は讀む。)

これらの三つの文章に於て、(1) 及び (2) では、兩方の文章は、對等の關係に立つてゐるが、(3) に於ては、第二の文章は第一のものに對して、時の副詞的規定の代りをなすにすぎない。從つてそれ自ら獨立の價値はなく、第一の文章に從屬して初めて生命を得るのであるから、兩者の間には、獨立と非獨立、主と副との關係がある。

そこで、(1) 及 (2) の如く、對結的の關係で出來てゐるものを、對結文章 (Satzverbindung [F.], der koordinierte Satz) といひ、この關係を、並立的結合 (die nebenordnende Verbindung, Beiordnung [F.], Koordination [F.]) と稱する。

更らに上揭の (1) 及 (2) の例について見るに、兩者共いづれも對結文章であるが、一つの相違は、(1) には第一の單文章と第二の單文章とを結合すべき同等の詞 (卽ち接續詞) がないのに、(2) にはこれ (卽ち und) があると云ふ事である。そこで

對結文章は、接續詞なきものと、接續詞を有するものとの二つに大別される。

3. 接續詞なき例。

a) Der Winter ist vergangen, der Frühling winkt.
(冬は過ぎた、春が擧く。)
b) Heute bist du glücklich, morgen bist du vielleicht sehr unglücklich.
(今日は君は幸福だ、明日は君は恐らく大に不幸であらう。)
c) Halte deinen Witz im Zaum; leicht macht er dem Hasse Raum. (お前の洒落を控ゑよ；それはやゝもすれば憎惡を招く；etwas〔四〕im Zaum halten＝或事を抑制する；etwas〔三〕Raum machen＝或ものを招く、起らせる。)

以上の文章に於て見る如く、兩文章の間は、Komma 又は Semikolon (;) があるだけで、何等の接續すべき詞も入つて居ない。そしてその結合される各の文章が、やゝ長いときには、Semikolon を使用し、短きときには、Komma を使用するのが通例であるが、此長短は筆者の感じの上の問題で、客觀的の尺度がある譯ではないから、存外短くとも Semikolon があり、長くとも Komma で濟ませる人もあるのである。

次に上揭三個の例を、その意味の上から見ると、第一の例では、二つの文章が全く並立的 (anreihend) であり、第二の例では、兩方が反對的 (entgegenstellend) であつて、第三のものにあつては、一方が他方の原因又は理由を示すが故に、兩者のこの關係を原因的 (begründend)〔又は因果的 (kausal)〕と稱する。

【註】 I. 原因的對結文章の原因（理由）たるものは、先行するときも、後續することもある。今一例をあげると、Das Fest ist zu Ende, die Gesellschaft verliert sich.（祝祭は終つた〔ので〕、集會は散する）にあつては、理由が前に立ち、Mach' dich mit leerem Stolz nicht breit; man lacht nur deiner Eitelkeit!（空虛な誇りでもつて威張り玉ふな、人が君の虛榮心を笑ふばかりだ〔から〕）; sich mit etwas breit machen＝或事で威張る）にあつては、後の方が理由を示してゐる。——尤も並立・反對・原因などと云ふ分け方は、實用的には大した必要のあるものではない。

【註】 II. 以上掲げ來つた諸例は、單純複合文章であるが、接續詞なき複雜複合文章の例をあげると、上掲（1）に更に一つの單文 加へて：

Der Winter ist vergangen; der Frühling winkt; die Lerchen trillen ihr Lied.（zusammenstellend）

（冬は去つた、春は來る；雲雀はその歌をうたふ；〔並立的〕）

とすると、複雜複合文章となり、又

Er ist sehr fleißig, er arbeitet Tag und Nacht; seine Verhältnisse bleiben dieselben.（entgegenstellend）

（彼は甚勤勉である、彼は日夜勤勞する；彼の境遇は同一で止まつてゐる。〔反對的〕）

も同じである。

【註】 III. 接續詞のない結合法の方が、語學史的に見て古い相であるが、此形が素朴なる爲か、第一によく童話などに使用されてゐる。

Es war einmal ein altes Schloß mitten in einem großen, dicken Wald, darinnen wohnte eine alte Frau ganz allein, das war eine Erzzauberin.〔Grimm〕（昔大きなこんもりした森の只なかに、古い城があつた、その中に老婆が全く一人ぼつでち住んでゐた、それは大女魔法師であつた〔グリム〕; erz- と云ふ前綴は、『最高の』『最大の』『この上なき』の義を有す

る：Erzbischof＝大僧正；erzdumm＝大馬鹿）。次いで又、形が簡短なるためか、格言・諺等に使はれる。例へば：

Gebrauchter Pflug blinkt, stehend（es）Wasser stinkt.

（使用された鋤はかゞやく、溜り水は臭い。）

Eigenlob stinkt, Freundeslob hinkt, fremdes Lob klingt.

（手前味噌（自讃）は臭い、友人の稱讃は偏してゐる、他人の褒めるのが本物（ホンモノ）だ。）

又急速な出來、事或は情熱的な事件の描寫にも好んで使用される。

Der Wagen stand vor der Tür; aufgepackt war（es）; der Postillon ließ das gewöhnliche Zeichen der Ungeduld erschallen; ich riß mich los.〔Goethe〕（馬車は戸口の前に立つてゐた；荷が積み込まれた；馭者（postiljon と讀む；佛語）は「あせり」の例の印した響かせた（鞭を鳴らすこと）；私は振りもぎつて立つた；aufgepacht war には主語 es が略してある。）

4. 接續詞に用ゐたる對結文章を、これから說くのであるが、これには二種あつて、一方の接續詞を使用するときには、後續文章の語次に影響を起さず、他方のものを使用するときは、語次に影響を及ぼすのである。

i) Der Mensch denkt, und Gott lenkt.

ii) Der Feind ist stark, **dennoch** wollen wir ihn angreifen.（敵は強いが、それでもわれらは、敵を攻擊しようと思ふ。）

即ち第一の例の und なる接續詞の後に來る文章の語次は、普通の排列で、第二の例の dennoch が兩文を接續すると、倒語法は倒置法になるのである。

（1）の如く後續文章の語次に影響せざるものは、純粹對結接續詞で、（2）の如く影響するものは、副詞から來た對結接續詞（即ち副詞的接續詞）である。

⑤ 純粋對結接續詞は、

aber (然し、but, however), allein (しかし、but), denn (といふ譯は、for), nämlich (云々だから、as, since) oder (或は、or) sondern (却つて、but) und (と、而して、and), nämlich (と云ふのは——云々だから; as, for)

これらはみな、次の文章の配語順には影響しないが、今各の用途について注意すべきことを擧げると〻

〔I〕 aber, allein, sondern の區別

sondern (却つて) は、前の文章に否定詞あるを要件とし、前述のこととは反對な敍述をなすに使用されるが、**aber** は前の文章が否定になつて居ても、肯定になつて居ても、いづれの場合にも用ゐられ、最初の敍述を一應尤だと許して、然る後に、前者に對する制限又は對照を云ひあらはすのである。

Er ist nicht jung, **sondern** (er ist) alt.
(彼は若くはなくて老いてゐる。)
Er ist arm, **aber** (er ist) ehrlich.
(彼は貧しいが正直だ。)
Das ist viel, **aber** (das ist) nicht genug.
(それは澤山だが、充分ではない。)

【註】 上記括弧を施したる部分は、略し得ることを示す。然しこの略し方については、後章『文章の收縮』の條で述べようと思ふ。

Die Wahrheit liebt das Licht, die Lüge **aber** scheut dasselbe.
(眞理は光を愛するが、虚僞はそれを避ける。)
Der Zug ist noch nicht hier, **aber** er wird bald kommen.
(汽車はまだこゝへ來てはいない、しかし間もなく來るだらう。)

又 **aber** は前文中の **zwar, wohl, freilich, allerdings** などと對應して、「成程云々ではあるが」「たしかに云々ではあるけれど」の義となることがある。これらは、相呼應して兩文を結ぶのである。

Er ist **zwar** nicht reich, aber er besitzt genug zu einem bescheidenen Dasein (od....., er besitzt **aber** genug zu einem bescheidenen Dasein, od....., zu einem bescheidenen Dasein besitzt er **aber** genug).
(彼は成程金持ちではないが、つゝましやかな生活をするには、充分のものを持つてゐる。)

Allein は aber とほゞ同義なれども、allein の方が用ゐられること少なく、且つ對照の意味が强い。用法から云へば、aber は文頭又は文中に置かれるけれど (上例參照)、allein はいつも文頭に立たねばならないのである。

Ich war bei ihm, **allein** ich traf ihn nicht an.
(私は彼のところへ行つた、然し私は彼に會はなかつた。)
Er war ein großer Feldherr, **allein** er besaß nicht die Gabe umfassender Berechnung.
(彼は偉い將軍であつたが、しかし彼は廣大な計算の天賦は持つてゐなかつた; die Gabe umfassender Berechnung =the gift of comprehensive calculation; umfassend は動詞 umfassen〔包括する〕の現在分詞)。

【註】 I. 上述の如く allein は aber より意味が强いから、aber の代りに、いつも allein を使ふと云ふわけには行かないが、aber なら、いつも allein の代用が出來るのわけであるが、前にも云つた通り、allein はいつも文頭に來なければならない。

【註】 II. 上述の代用の一例として、zwar (freilich, wohl).....aber と

呼應するとき、aber の代りに allein を使用し得るけれど、その位置は aber のやうに自由なものとは異なるのである。

Er ist zwar nicht reich, **allein** er besitzt genug zu einem bescheidenen Dasein.

【註】 III. 接續詞でないところの allein がある。これは「のみ」「ばかり」(only) 又は「獨りで」(alone) の意味であつて、その例をあげると、Er allein rauchte. (彼だけが喫煙した。); Lassen Sie mich allein! (僕をほうつておいて呉れ玉へ!) などに見るように、接續詞の allein とは、全く用法を異にしてゐる。此副詞が文頭に來れば、配語法は當然倒置法とならねばならぬ。

〔II〕 **Und** の用法。

Und の後に來る文章は、副詞的規定か補足語かが、第一に來らざる限り、正置法に依る。又 und の後に來るものが完全なる文章（卽ち主語があり、客語があるもの）であるときには、und の前に、Komma を置くのであるが、後續文章が不完全であるときは、此 Komma は置かない。

Ein Silberstück lag auf dem Tische, **und** er ergriff dieses blitzschnell mit den langen, weißen Fingern.

(一枚の銀貨が机の上にあつた、そして彼はこれを、すぐ早く長い白い指で取つた。)

上文に於て und の次に、例へば blitzschnell が來ると、

....., **und blitzschnell** ergriff er dieses mit den.....Fingern.

となるし、dieses が來れば

....., **und dieses** ergriff er blitzschnell mit den.....Fingern.

となる。同じやうに mit den.....Fingern が來ても、矢張倒置法である。

....., und **mit den langen, weißen Fingern** ergriff er dieses blitzschnell.

となるが、これはあまり口調がよろしくない。上の四例に於ては、und に後續するものは完全なる文章（主語あり、客語ある文章）であるから、und の前に Komma が存在するのである。然るに、

Gestern kehrten wir von Osaka zurück **und** besuchten sogleich unseren kranken Lehrer.

(昨日われらは大阪から歸つて來て、たゞちにわれらの病氣の先生を見舞つた。)

に於ては、und 以下の文章には主語なく、從つて文章が不完全だから、und の前に Komma を置かないのである。

【註】 und に後續する文章に、何等の理由もなくして、倒置法を起させる風習が、(例へば、und **ist** er.....; und **haben** wir.....の如し)、彼土の商業文や新聞の文章などには甚多いらしい。それはいづれの文書も、これをやかましく矯正して居ることで解かる。邦人學生には、かゝる惡癖はあまりないやうであるから、これについて、さううるさく云ふ必要はないやうに考へられる。

また und の次に副詞が來て、二つで接續用をなすことがある。此時には後續文が倒置法の語次を取ることに注意せよ。

Er ist stets fleißig gewesen, **und daher** ist er schnell reich geworden.

(彼はいつも勤勉であつた、それだから彼は速かに金持になつた。)

Er ist ein großer Künstler, **und doch** hat er nicht Anerkennung gefunden.

(彼は大藝術家だつた、それでも彼は承認されなかつた。)

Du sollst dieses Buch haben, und zwar werde ich es dir morgen schicken.

(君に此本をあげるよ、但し明日送つてやらう；此 sollen は話者の意思•約束等をあらはす。)

Vieles wünscht sich der Mensch und doch bedarf er nur wenig 〔Goethe〕.

(多くを人間は望むが、それでも人間はほんの僅かしか要しない〔ゲエテ〕。)

此種の他の例をあぐれば、und daher (夫故に)、und darum (同)、und dennoch (それでも)、und auch (又)、und außerdem (その他に)、und noch dazu (なほその上に)、und sogar (加之) などである。

【註】 I. und によつて接續さるべき單文章が三つ又はそれ以上であるときには、或必要があつて、わざわざ und を各文の冒頭毎に繰り返へす場合を除けば、最後のものにのみ、und を附けるのを普通とする。

Die harten Hände reichten sie mir dar, von den Wänden langten sie die rostigen Schwerter, und aus den Augen blitzte freudiges Gefühl des Mutes 〔Schiller〕.

(硬い手を彼等は私にさし伸べた、壁から彼等は銹びた劍を差し出した、而して眼からは、勇氣の喜ばしい感情が閃めき出でた〔シラア。〕)

この方法は、und が詞と詞とを結ぶ場合にも行はれる。例へば、Nebukadnezar, Cyrus, Alexander und Cäsar と續けると同一筆法である。しかるに und をくりかへすものの一例をあげれば：

Die Luft ist kühl, und es dunkelt, und ruhig fließt der Rhein 〔Heine〕. (大氣は涼しく、夕闇は來る、そしてライン河は靜かに流れる〔ハイネ〕)。

又既述のとほり、接續詞なき複合文章もあり得るから、und を少しも用ゐざる對結文章もあり得る譯である。

【註】 II. Und は單に「而して」とのみ譯すべきではなく、これには色々の意味のある場合がある。委しく云ふ餘裕はないが、二三の例をあげれば：

Das Verbrechen war bekannt, und er mußte das Land verlassen. (犯罪が知れた、そのため (und=darum) 彼は國を去らなければならなかつた。)

Du liegst am Wege wie ein Bettler und bist ein edler Ritter.

(君は路傍に乞食の如く横たはる、それでも君は身分のよい騎士であるのだ；und=und doch).

Ich sah den Feigling, und ich erschlug ihn nicht.

(私は卑怯者を見たが、私は彼を打殺さなかつた；und=aber).

Seien Sie so gut und kommen Sie!

(どうぞ來て下さい；=Seien Sie so gut, daß Sie kommen; Seien Sie so gut zu kommen!)

〔III〕 denn と nämlich の用法。

Denn は、いつも後續文章の先頭に立ち、その語次に影響しない。

Ich muß zu Hause bleiben, denn ich bin krank.

(私は病氣なのだから、家に止まらなければならぬ。)

後續文章に於て、denn の直後に主語以外のものが來れば、單語法は勿論倒置法となる。

Ihr werdet euren Freund nicht daheim finden, denn soeben bin ich ihm vor dem Tore begegnet.

(君たちは君たちの友人に家へ行つても會へないだらう、と云ふのは、僕は彼に丁度今、門の前で出合つたから。)

【註】 I. 接續詞の denn と、副詞の denn とを混同してはならない。Wo ist er denn〔副〕? (一體彼はどこに居るのだ?)。これは denn それ自身の位置及定動詞の位置で判別すべきである。

【註】 II. 同じやうに譯されるところの別の接續詞 weil, da と denn との區別については、後章に述べやう。

Nämlich は、前行文の説明をなすべき後續文中に置かれるのであるが、前文と後文を結ぶ力は、denn よりやゝ弱いけれど、意味はよく似てゐる。これは普通、後續文の定動詞の後に置かれる。文頭に置かれることがあつても、後續文の語次には影響しない。

Ich konnte ihn nicht sprechen, er war **nämlich** krank.
(私は彼と話すことが出來なかつた、と云ふのは彼は病氣だつたから; einen sprechen=mit einem sprechen).

【註】 通常單に語と語とを結ぶもの、例へば sowohl.....als (auch), wie, sowie, beziehungsweise (又は) 等の如きものは、本章に於ては、考察しないことにして置く。

6. 副詞的接續詞 (adverbiale Bindewörter) は、單文章と單文章とを結合する際に於て、副詞と同じ作用を、後續文章に及ぼすものであつて、即ちこれが後續文の文頭に來るときは、その配語法は倒置法となり、文中に來るときは、何等の影響も語次に及ぼさないのである。

Die Haustür war nicht verschlossen; **gleichfalls** stand die Stubentür offen. (od. die Stubentür stand **gleichfalls** offen). (玄關の戸は閉まつてゐなかつた; 同樣に室の戸もあいて居た。)
Der Graf war kein Verschwender, **vielmehr** konnte man ihm übergroße Sparsamkeit zum Vorwurfe machen (od.

man konnte vielmehr ihm übergroße Sparsamkeit zum Vorwurfe machen).
(伯爵は浪費者ではなかつた、むしろ人は、彼に對して過度の節儉を非難することが出來たのである。)
Die Sterne sind von uns sehr weit entfernt; **deshalb** scheinen sie uns so klein (od. sie scheinen **deshalb** uns so klein).
(星辰はわれわれから甚遠く離れてゐる; それ故にあんなに小さく見えるのだ。)

そして上掲の三例について見ると、第一の例に於ける兩文章は、並立の關係にあり、第二の例に於ては、兩者は反對的で、第三の例に於ては、二者は理由的關係を保持して居る。然し副詞的接續詞を、この意味から三種に分けて、列擧するのは、勞して得るところが少ないやうに思はれるから、こゝには、副詞的接續詞の重なるものを枚擧するに止めよう。

〔A〕 最も普通に用ゐられ、文頭に來れば倒置法を起すもの:
also (夫故に、therefore), außerdem (その上に、moreover, beides) gleichfalls (同樣に、likewise), zudem (その上に、moreover), überdies (更に、furthermore), deshalb, deswegen (夫故に、therefore), dann (それから、then), daher (それ故に、since), so (左樣に、so), mithin, folglich, demnach (夫故に、therefore); dagegen (之に反して、on the contrary), übrigens (その上に、moreover), dennoch, gleichwohl (然し、それでも、however, notwithstanding), trotzdem (それにも拘らず、in spite of that), nichtsdestoweniger (夫れでも、nevertheless), sonst, andernfalls (でなければ、otherwise), vielmehr (むしろ、rather)。

これらのものに就いて、用例の二三を示せば:

Friedrich der Große beugte sich unter das Gesetz; mithin gab er den Richtern ein gutes Beispiel.
(フリードリッヒ大王は、自ら法律の下に屈從した。それで彼は裁判官たちに、一の良い例を與へた。)
In dem Koffer sind Bücher, darum ist er so schwer.
(カバンの中には書物がある、それだからこんなに重いのだ。)
Mein Bruder ist krank, er kann deshalb nicht kommen.
(私の兄弟は病氣だ、夫故に來られません。)
Er will uns nicht begleiten, so gehen wir ohne ihn.
(彼はわれらと同行すようと思はぬ、そこでわれらは彼をつれないで行く。)

〔B〕 文頭に來ても、倒置法を起すことと、倒置法を起さしめぬこととあるもの。これにも二種あつて、いづれにしても、意味の違はぬものと、倒置法となるか、ならぬかに從つて、意味の相違を起すものとがある。相違を起さないものは、nur, bloß (只、only), indessen, indes (然し、however), jedoch, doch (然し、however) の如きものである。

〔例〕 Er ist reich, doch möchte ich (od. doch ich möchte nicht mit ihm tauschen.
(彼は金持ちだ、けれども私は彼と代りたくない。)

【註】 此文章に於て、後續文章を、ich möchte doch nicht mit ihm tauschen. として、doch を後に入れても勿論よろしい。——但し後屬文章が、文頭に定動詞を置きたる疑問文章形であつて、この文章中に doch が入れてあれば、特に注意を要する。

Er ist nie mein Freund gewesen; haben wir doch allzu verschiedene Grundsätze gehabt.

(彼は私の友人ではなかつた; だつてわれらはあんまり異つた主義を持つてゐたから。)

即ちこれは、理由をあげる (begründend) doch であるが、これは上の如き後續文章が、獨立した文章になつてゐるときにも使はれる。少し緣遠いやうだが、序でに述べて置かう。

Herder wandte es auf Geistiges an. Sagt er doch „fühlen" oder gar „schmecken", wo andere von „denken" oder „erkennen" sprechen. 〔Walzel〕
(ヘルダアはこれを精神的の事物に應用した。と云ふのは彼が、他人なら「考へる」とか「認識する」とか云ふ事について語す場合に (wo),「感ずる」とか、或は進んで「味ふ」とか云ふからである。〔ヴァルツェル〕)

Der Mann ist groß und stark, bloß hat er etwas Feineres (od. bloß er hat etwas Feineres).
(その人は大きくて力强いが、たゞ或上品なところを持つてゐる。)
Kein Los ist an sich böse, nur der Mensch ist oft zu böse für sein Los.
(いかなる運命もそれ自身で惡意あるものではない、たゞ人間が自分の運命に對して、屢あまりに惡意がありすぎるのだ。)
Bauen ist eine Lust, nur kostet es Geld.
(建築は樂しみだが、たゞ金がかゝる。)

【註】 また bloß と nur とが先頭に立つとき、意味の相違によつて、後續文の語次に影響したり、しなかつたりすることもある。例へば:

Ihr Anzug im Kriege war ohne Prunk, nur ihre Schilde war schön bemalt.

(戰爭中の彼等の服裝は、飾りがなかつた、たゞ彼等の盾のみが、美しく着彩されてゐた。)

Der Mensch dreht sich wie seine Erde; nur findet er nicht immer seine Sonne wie sie.

(人間はその地球のやうに廻轉する：たゞ彼は必らずしも常に地球のやうに、それの太陽を見出さない丈けだ。)

前文に於ては、nur は Schilde にのみかかるが、後文では nur は其全敍述に關するところが相違點である。此副詞は、單文中でも、位置によつて意味を違へる事があるから、注意を要する。

Es wurden nur drei Soldaten verwundet.

(たつた三人の兵士が負傷した。)

Es wurden drei Soldaten nur verwundet.

(三人の兵士は負傷した丈けだ。)

Die Knaben sollten zum Abendessen wieder zu Hause, indessen (od. indes) sie waren (od. indessen waren sie) um acht Uhr nicht da.

(男の兒どもたちは、夕食に家に居るべき筈であつたが、しかし彼等は正八時には、まだ家に居なかつた。)

Wir sehen uns nicht nur gelitten, sogar* wir sehen uns hochgeachtet. 〔Goethe〕

(われわれは、われらが單に好まれてゐるのを見るばかりではなく、その上にわれわれが尊敬されてゐるのを見るのである。)〔ゲエテ〕

【註】 I. *sogar は然し目下は、後續文章中に入れるのが普通である。

Wir sehen uns nicht nur gelitten, wir sehen uns sogar hochgeachtet.

【註】 II. also, zudem なども、折々語次に影響しない事がある。

〔C〕 Auch の同格。

Auch は文頭に立つても、それが後續文章の主語にのみ關係するときは、該主語の直前に立つから、語次に影響しない。(即ち、倒置法は取らないのである)。

Ein Wassertropfen höhlt den härtesten Stein; auch dringt ein gutes Wort ins starrste Herz hinein.

(水滴は最も堅い石にも穴をうがつ；美言もまた最もかたくな心のうちにすら浸み込むものだ。)〔倒置法〕

Täglich neu ist Gottes Treu'; auch dein Dank sei täglich neu! (神の誠は日々に新らしい；汝の感謝も日々に新らしくあれ!)

後者では auch はたゞ dein Dank にも關係するのである。

〔D〕 相對して用ゐられるものは：

entweder.....oder (か.....か、either.....or), weder.....noch (でもなく.....でもなく、neither.....nor), teils.....teils (一部は.....一部は、party.....party), bald.....bald (或〔時〕は.....或〔時〕は) now.....now), einesteils.....anderenteils (一方では.....他方では、on the one hand.....on the other hand).

またいくつも相對してつゞくものは、

erst (第一に、first), erstlich, erstens (第一に、in the first place) zweitens (第二に、secondly), sodann (次に、then), ferner (更に、further), zuletzt (最後に、at last), endlich (終りに、finally) 等である。

今その用法について、少しく述べると：

i) entweder.....oder に於ては、oder の次は、既述の如く正置法であるけれど、entweder の後は、時に正置法であり、時に倒置法であつて、一定しない。いづれにしても、意味に關係はない。

Entweder tust du es jetzt, **oder** ich rufe deinen Bruder.
(君が今それをするか、でなければ僕は君の兄弟を呼ぶか、どつちかだ。)〔倒置法〕
Entweder du tust es jetzt, oder ich rufe deinen Bruder.

【註】 Entweder はこれを文頭に置かないで、文中に入れる方法もある。
Du mußt entweder deinen Verpflichtungen nachkommen, oder du verlierst deine Ehre!
(君は、君の義務を履行しないか、或は君は君の名譽をなくすか、どつちかだ。)

ii) その他は文頭に立つ場合で、それに續く文章の語次に影響する。〔倒置法〕

Weder habe ich ihn gesehen, **noch** will ich ihn sehen.
(私は、彼に會ひもしなかつたし、彼に會はふとも思はない。)

【註】 weder を第一の文章の中間に入れる方法もある。

Er erwarb **weder** großen Reichtum, **noch** gelangte er Amt und Würden.
(彼は大なる富も得なかつたし、高位高官にも達しなかつた。)

Bald erblickst du in den Tälern prachtvolle Fruchtfelder, **bald** gewahrst du saftige Wiesen und fette Weiden.
(或時には君は谷の中に立派な穀田を見るかと思ふと、又或時は水々しい草原と肥えた牧場とを見るのである。)

Teils waren die Soldaten ans Land gegangen; **teils** hatten sie auf den Schiffen sorglos der Ruhe hingegeben.
(兵士たちは一部は上陸し、一部は舟の上で呑氣に休息した; sich einem Dinge hingeben=或ものに身を捧げる、或事に耽ける; die Ruhe 休息)

【註】 I. teils は第一の文章の内部に入ることもある。
Es fehlt mir **teils** an Zeit, **teils** hatte ich auch wenig Lust zu der Arbeit.
(或部分まで私には時間が缺乏してゐたし、或部分までは私は仕事に對する興味を持つてゐなかつた。)

【註】 II. Teils は、上掲の如く、文と文とを結ぶのではなくて、文章成分と文章成分とを結ぶやうに見えることもある。これを他の共通の文章成分を略したもの(即ち省略文章)と見てもよければ、teils は文章成分をも結合すると考へてもよろしい。解釋上のかかる相違は、實用上に何等の支障を起さないことは、既に折々述べた如くである。

Die Vögel bauen ihre Nester **teils** auf Bäumen, **teils** in Sträuchen, **teils** in Höhlen.
(鳥類は或は樹上に、或は叢のなかに、或は洞穴のうちに、彼等の巣をつくる; 鳥類中の或部分は樹上に、或部分は叢のなかに、.....の義である。)

Er war **erstens** nicht gesund, **dann** (**zweitens**) fehlte ihm* die nötige Bildung, **ferner** (**drittens**), besaß er nicht genügende Kenntnisse und **schließlich** hatte er auch **keine** Lust zur Arbeit.
(彼は第一には健康でなかつた、次には(第二には)彼には必要な教養が欠けてゐた、更に(第三には)彼は充分な知識を持つてゐなかつた、最後に彼はまた勤勞する氣がなかつた; Lust zu etwas=或事をやらうといふ氣分;

Betrügerei

—* 倒置法に於ては、代名詞は名詞主語の前に來り得といふ規則によれるもの。)

Erst hat er Schulden gemacht; **dann** hat er Betrügereien verübt; **nachher** ist er aus dem Lande geflo en; **zuletzt** wurde er ein Landstreicher.

(第一に彼は借錢をつくつた；それから彼は詐欺を働いた；その後彼は國を飛び出した；最後に彼は浮浪者になつた。)

【註】此種のものは、次に Komma があるとき、後續文章が正置法を取ることがある；**Erstlich**, er hat etwas gemacht; **zweitens**, er hat etwas verübt,……之に關聯して記述すべきものは、im Gegenteil (反對に)、nun (さて) 等の後に Komma があるとき、後續文章が正置法を採ることである。

第　二　節

附結文章

7. 二個の單文章が複合せらるるとき、一方が他方に對して、從屬的の關係に立つとき、從屬する方を、副文章 (Nebensatz [M.]) といひ、從屬せらるる方を主文章 (Hauptsatz [M.]) と稱し、かくして出來た複合文章 (der zusammengesetzte Satz) を、附結文章 (Satzgefüge, der subordinierte Satz) と稱し、此關係を從屬的結合 (die unterordnende Verbindung, Unterordnung [F.], Subordination [F.]) と稱する。

主文章は獨立して、意味を有するものであるけれど、副文章は、それ自身だけでは獨立して意味なく、主文章に附隨して初めて意味をなすものである。例へば：

Die Zugvögel verlassen uns im Herbste, weil sie den Winter fürchten.

と云ふ複合文章に於て、第一の文章たる「渡り鳥は秋には、われらを棄て去る」は、それ自身獨立して意味を成してゐるけれど、第二の文章「何故なら、彼等は冬を恐れるから」は、それ自身では獨立してゐない、それは第一の文章に附隨して初めて、それの意義が通ずるのがある。即ち第一の文章は主文、第二の文章は副文である。そして副文は、主文に對して理由をあげてゐるから、その作用から見れば、副詞的規定中の「原因」をあらはすものと同じである。又、

Wir hoffen, daß du bald zu uns zurückkehrst.

(われらは、君がぢきにわれらのところへ歸つて來ることを希望する。)

と云ふ文章に於ては、daß 以上は獨立して意味を成すのではなく、Wir hoffen といふ主文に附いて、初めて意義を成すものであり、客語動詞 hoffen に對して、補足語の役目を勤めてゐる。かく副文は、獨立しては意味を成すことが出來ず、主文に對して、文章構成上の要素たる五個の成分中のいづれか一つの役目を演ずるものであるが、この事については、更に後段に於て詳述する事にする。

8. 副文章には三種あるが、その特徴は、いづれも定動詞が、副文の終りに來ることであつて、これを貶置法 (Transposition [F.]) と稱することは、既述のとほりである。副文の第一種は、

i) 從屬用接續詞 (subordinierte Konjuktion) を以て、主文に結びつくものであつて、これを接續 (副) 文章 (Konjunktionalnebensatz [M.]) と稱する。

Ich glaube, **daß** er mich betrügt.
(私が彼を私を欺くと信ずる。)
Er kann heute nicht in die Schule kommen, **weil** er krank ist.
(彼は病氣だから今日學校へ來られない。)
Die Fledermäuse verlassen ihre Schlupfwinkel, **sobald** es zu dämmern beginnt.
(うす暗くなり初めるや否や、蝙蝠はそれの隱れ場所を出て來る。)

【註】 接續文章 (Konjunktionalsatz [M.]) を、接續詞にて連結されたる文章と定義するときは、前節所揭の對結文章中接續詞を有するものは、そのうちに入り得べきも、普通に云ふ接續文章とは、上揭の如く、從屬的接續詞を以て連結するものだけを意味する。この誤解を避けんがためには、接續 (詞) 副文章 (Konjunktional-nebensatz [M.]) と云つた方がよからうと思ふ。

ii) 關係代名詞又は關係副詞を以て初まるものを、**關係文章** (Relativsatz [M.]) と稱する。

Der Schüler, **welchem** ich das Buch schenkte, ist sehr fleißig gewesen. 〔關係代名詞〕
(私が書物を贈つたところの生徒は、大變勤勉でありました。)
Die Kinder, **deren** Betragen getadelt wurde, sind ungehorsam gewesen. 〔關係代名詞〕
(その擧動が非難されたところの子供たちは、不從順でありました。)
Kennst du das Land, **wo** Zitronen blühen? 〔關係副詞〕
(レモンの花の咲く國をおんみは知れりや? この wo は in welchem の義で、Land に接續する)。

iii) 疑問代名詞・疑問副詞又は接續詞 ob (か、どうか) を以て、主文に結びつくものを、**間接疑問文章** (Indirekter Fragesatz) と稱する。

Er wollte nicht sagen, **wem** sein Vater das Buch geschenkt hat. 〔疑問代名詞〕
(彼は、彼の父が誰に書物を贈つたかを云はうとは思はなかつた。)
Ich fragte ihn, **wohin** sein Vater gegangen sei. 〔疑問副詞〕
(私は、どこへ彼の父が行つたかを、彼にたづねた。)
Ich weiß nicht, **ob** sein Vater meine Schwester kennt. 〔ob を有するもの〕
(私は彼の父が私の姉妹を知つてゐるかどうかを知りません。)

9. かく副文には、いろいろ種類があるけれど、副文そのものの居るべき位置は、三種にすぎない。即ち、i) 副文が主文の後に來るか、ii) 主文の前に立つか、iii) 主文を兩斷して、その中間に副文が置かれるかの三通りにすぎない。第一の如き位置にある副文を、**後文章** (後副文章の義; Nachsatz [M.]) といひ、第二の如き位置にあるものを、**前文章** (前副文章の義; Vordersatz [M.]), 第三の如き位置にあるものを、**間文章** (中間副文章の義; Zwischensatz [M.]) と稱する。而して第一の場合には、主文は、副文の前行のために、倒置法になること、單文章に於て主語以外のものが、文頭に立つ場合と同じである。而して此場合、主文は往々、so を以て初められるけれど、これは語次には關係しない。

【註】 副文章が前行しても、主文の語次が倒置法とならざることがあるが、それは後段に述べやう。

今後文章•前文章•間文章の例をあげると：

I. Der Soldat sank zu Boden, **als** er von einer Kugel getroffen wurde.〔後文章〕
(兵士は彈丸にあたつたときに、地上に倒れた。)
Als der Soldat von einer Kugel getroffen wurde, sank er zu Boden.〔前文章〕
Der Soldat sank, **als** er von einer Kugel getroffen wurde, zu Boden.〔間文章〕

II. Der Edle haßt immer alles, was niedrig und gemein ist.〔後文章〕(氣高い人は、低級卑俗な凡てのものをいつも憎む。)
Wer edlen Sinnes〔二格〕ist, haßt immer alles Schlechte.〔前文章〕(氣高い心を有するものは、一切の劣惡なるものを常に憎む。)
Der Edle haßt, **solange** er lebt, alles Schlechte.〔後文章〕(氣高い人は、生きてゐる間は、すべての劣惡なものを憎む。)

【註】後文章は、複合文章の主人たる主文章が先頭に立ち、副文がそれに後續するから、その力の上から見て、この關係を『下降的文章關係』(fallendes Satzverhältnis) と稱し、前文章の如きものを『上昇的文章關係』(steigendes Satzverhältnis) と云ひ、間文章の如き關係を『中斷的文章關係』(gebrochenes Satzverhältnis) と名づける。

副文章を、上記三種の配列法中、いづれの方法によつて配置するとしても、その際注意すべきことは、次の如くである。

主文は複合文章中の主位を占むる重要なものであるから、副文の力が强くて、主文が壓服されるやうな——云ひ換へると、主文の「影がうすく」なるやうな配列法はいけない。例へば：

Wer beweglichs Eigentum eines anderen sich aneignet〔副文〕, stiehlt〔主文〕。
(他人の動產を自分のものにする人は、盜むのである。)

と云ふ文章に於ては、副文のみ跋扈して居て、主文の影がうすい 卽ち主文の存在がほとんど沒却されて居るのである。從つてこれを改めて、下のいづれか一にする。

Wer beweglichs Eigentum eines anderen sich aneignet,
1. der begeht einen Diebstahl. (竊盜罪を犯すものである。)
2. der macht sich eines Diebstahls schuldig. (同義)
3. der ist ein Dieb. (それは泥棒である。)

【註】Wer と云ふ關係代名詞を以て初まるものの方が、副文章であることは、詞論の方で、すでに知つて居ることと思ふ。例へば Wer zuerst kommt, (der) muß warten. (最初に來た人は待たればならぬ) に於て、Wer から kommt までが副文章である。悉しいことは、關係文章のところで述べよう。

さて上掲の改められた三種の主文のうちでは、恐らく第三のものが、一番よからうと思はれるが、主文は、とにかく、上の三者のうちの一つの形を採ることによつて、自己の存在を明瞭にすることが出來ると同時に、主文と副文の權衡がとれて來るのである。

次に間文章の入れどころであるが、これは主文を適當なところで、兩斷し、その中間に挿入せらるる譯であるけれど、その切斷點は、少くとも定動詞の後に於てすることを要するのである。例へば：

Der Hauptmann ging zum Angriff über, als er den Donner der Kanonen hörte.

(大尉は大砲の轟きを聞いたとき、攻撃にうつつた。)

と云ふ複合文章に於て、後文章たる als 以下の副文を、間文章に改めるのには、定動詞 ging のうしろで主文を兩斷し、

Der Hauptmann ging, als er den Donner der Kanonen hörte, zum Angriffe über.

とすべきである。

【註】 I. 然るに間文章をもつと前進させ、Der Hauptmann, als er den Donner der Kanonen hörte, ging.....となす風が以前からあつて、Grimm, Kleist, Mörike その他の大家に於ても往々見られるが、これはラテン文の配器法の模倣であつて、獨逸式ではないのである。

【註】 II. 然しこの規定は、關係代名詞又は關係副詞を有する關係文章には、勿論適用されぬ。これらの關係文章は、他の點に顧慮することなく、前行詞に直ちに續くのを原則とするからである。例へば:

Ein Mensch, der während des Tages schläft, gleicht einem Lichte, welches am Tage brennt. (晝の間眠る人は、晝間に燃ゆる蠟燭に似てゐる。) の如くであつて、 der から selbst までの關係文章は、前行詞 ein Mensch に直屬するものだから、他を顧慮せずに、これに附いた結果、副文が定動詞に先行する形となつたのである。

10. 大體の敍述は、この位にして、これから各種の副文章について述べようと思ふ。まづ第一に來るのは、接續(副)文章であるが、これを導く從屬用接續詞の主なるものを擧げると:

als (時に; when, as), wenn (時に、when; ならば; if),

da (云々する故に、時に; since, as), weil (云々するから、because), daß (事は、事を; that), damit (云々するために、in order that), bevor, ehe (前に、before), indem (云々してゐる間に、whilst), während (云々してゐる間に、whilst), nachdem (云々してから、after), seitdem (云々して以來、since), solange (als) (云々する間は、as long as), sobald als (するや否や、as soon as), bis (まで、until), als ob, als wenn (かの如く、as if), obgleich, obschon, obwohl (とはいへ、although), falls (云々の場合には、in case), wie, als (如く; as)。

これらの從屬用接續詞中、注意すべきものについて述べると:

1) 時をあらはす als, wenn, da 及び wie の區別。

前三者が、時をあらはす場合には、als は過去の一回的な行爲又は狀態に關し、wenn は過去に關して用ゐられるときは、反覆されたる行爲又は狀態をあらはして、『云々する度毎に』(= sooft; whenever) の義となる。しかし未來及現在に於ては、wenn『時に』(when) 又は『ならば』(if) の義となるのである。Da は als と同じやうに使用されるけれど、これにはいくらか、原因の意味が加はつてゐるだけが、相違である。

Wir freuten uns jedesmal, wenn du kamst.

(われらは君が來た度毎によろこびました。)

Wir freuen uns (od. Wir werden uns freuen), wenn du kommst. (君が來る〔來るであらう〕時には、われらは喜ぶであらう。)

Wir freuten uns, als du kamst.

(われらは君が來たときに喜びました。)

Wir freuten uns, **da** du kamst.
(われらは君が來たときに、そのために喜んだ。)

【註】 I. 『よりも』(than) 又は『如く』(as) の意味の als と、『時に』(when) の意味の als とが重複するときは、時の意味の als の代りに、da を使用する。Er ist ein wenig mager, als (= than) **da** er kam. (彼は彼が來たときより少しやせてゐる。) Lange hatte er nicht so gefreut, als (=as) **da** er diese Nachricht erhielt. (長い間彼は、彼がこの報知を得たときのやうに喜んだことはなかつた。)

【註】 II. 詩や詩的散文に於ては、da が全然時の als と同じやうに使用されることが多い。

【註】 III. 思想的假定を示す wenn は別である: Wenn er das glaubt, irrt er sich. (もし彼がそれを信ずるなら、彼は間違つてゐる。)

時をあらはす **wie** は、過去•現在に關し、als 又は sobald (するや否や、as soon as) の義に使用される。

Wie er mich sieht, (da)* stürzt er auf mich zu.
(彼は私を見ると、私に打つてかゝる。)
Wie er gefragt wurde, leugnete er es.
(彼がそれをたづねられたときに、彼はそれを否定した。)

【註】 als, da, wie に對しては、後續主文の文頭に da を置いて、之を受けることがある。

Als der Wind sich erhob, **da** flog entblättert die Blume.
(風が吹き起つたときに、花はばらばらになつて飛んだ。)

2) 同時を示す **während** と **indem** との區別。

この二者は、それが率ゆる副文中で述べられたる事件と、主文で述べられた事件とが、時を同うすることを示すものであるが、**während** は主文と副文との主語が同一であつても、同一で

なくとも使用され、**indem** は主文と副文との主語が同一である時にのみ、使用されるのが、今の規則となつてゐる。

Der Knabe liest, **während** das Mädchen schreibt.
(少年は、少女が書いてゐる間、讀書する。)
Indem er das sagte, setzte er sich auf den Stuhl.
(彼はさう云ひながら、椅子の上に腰をおろした。)

【註】 I. 以上は通則であるが、主文の主語と副文のそれとが同一でなくとも、indem を用ひた例はある。

Indem **er** das sagte, trat **sein Freund** herein.
(彼がかう云つてゐる間に、彼の友人がはいつて來た。)
Indem **er** so sprach, traf ihn **die Kugel**.
(彼がかう云つてゐる間に、彼に彈丸があたつた。)

然しこれらは、今日では模倣すべきではない。主語の相異なる時は、自分の云はうとするところによつて、während 又は als を使用する事がよい。

【註】 II. 前置詞の während と混合しないやうに注意せよ。——又 während にも、indem にも、時間的關係の外に、別の意味があることにも留意せよ。

3) **Nachdem, seitdem** の用法。

Nachdem (云々せる後に) は、副文章の行爲又は狀態が、主文のそれよりも、時間的に先行せるものを指すのだから、此接續詞を使用せる副文章の時稱は、現在完了或は過去完了であらねばならぬ。

Der König verließ Nürnberg, **nachdem** er es mit einer hinlänglichen Besatzung versehen hatte. 〔過•完〕
(國王はニュルンベルヒに充分な守備隊を備へた後に、立ち去つた; etwas mit etwas versehen=或ものに或ものを與へる、供給する。)

Nachdem das Kind ertrunken ist 〔現•完〕, deckt man den Brunnen zu.

(小兒が溺死した後に、人々は井戸に蓋をする。)

Seitdem は同じく主文の事件よりも、副文のそれの方が先になつてゐる事を示すのであるが、但しこれは主文の出來事までの繼續をあらはすもので、主文が現在なるときは、副文は現在完了又は現在である。

Seitdem der König seinen Sohn verloren hat, 〔現•完〕 vertraut er wenigen der Seinen mehr.

(王は彼れの子息を失つて以來、彼は彼の臣下のものに最早ほとんど信頼しない。)

Seitdem ich nicht mehr Karten spiele 〔現〕, spare ich viel Geld.

(私がカルタ遊びをしなくなつてから、私は多くの金を殘します〔金があまること。〕)

Seitdem ich nicht mehr Karten gespielt habe, 〔現•完〕 spare ich viel Geld.

(私がカルタ遊びをしなくなつてから、私は多くの金を貯へる事が出來る。)

【註】 I. 但し意味によつては、主文の時稱は、必ずしも上記のやうに、現在とは限らないから、意味をよく考へて、兩方の文章の時稱をきめなければならぬ。

Du hast mich nicht besucht, seitdem ich hier wohne.

(僕がこゝに住んでから、君は僕を訪問しなかつた。)

此文例に於ては、主文は現在完了で、副文は現在である。

【註】 II. Seitdem はまた seit とも云はれる。**Seit** mein Onkel

abgereist ist,……(私の伯父が出立して以來、……但し、三格支配の前置詞 seit と混合してはいけない。—— seit einigen Wochen (二三週このかた)

【註】 III. nachdem と je nachdem (に應じて、云々次第で) とは、別である: Ein Kunstwerk ist schön, **je nachdem** es vollkommen ist. (藝術品はそれが完全なる程度に應じて美である。)

4) **Sobald als と kaum……, so (als) の用法。**

此接續詞は、下の如くに用ゐられる。

Sobald als du es uns gesagt hast, kannst du gehen.

(お前がそれを私に云つて仕舞ふや否や、お前は行つてよろしい。)

但し、als を除いた形も使用される。

Kommen Sie, **sobald** es Ihnen möglich ist.

(出來る丈け早く來て下さい。)

【註】 副詞 bald の前後に、比較用の so (so, as) と als (as) とを附けたものと、接續詞の sobald als とを混合してはいけない。接續詞としては、今では so と bald とを連記することになつてゐる (古くは分記した)。又 solange と so lange; sooft と so oft とは同じ關係で、連記した方は接續詞、分記した方は副語又は形容詞となつてゐる (尤接續詞の方も古くは分記したのである)。

Sobald als の代りに、kaum……, so; 又は kaum……, als を使用することが出來るが、kaum は此際主文の文頭又は文中に置かれ、als を有する副文、又は so を有する倒置法の主文が、後續する。下にその一例をあげると:

Er nahm seine Geschäfte wieder auf, **sobald als** er von seiner Reise zurückgekehrt war.
(彼は彼の旅行から歸來するや否や、彼れの業務を再たび取り上げた。)

今上掲の文を kaum....., als を有する複合文章の形に改むるには、sobald als 以下の副文章を主文章とし、kaum を文頭又は文中に置き、もとの複合文章の主文の先頭に als を附けて、副文の形にして、之に後續させる。kaum が文頭に立つときは、倒置法となることは、云ふまでもない。

Kaum war er von seiner Reise (od. Er war **kaum** von seiner Reise) zurückgekehrt〔主文〕; **als** er seine Geschäfte wieder aufnahm.〔副文〕

若し上の als の代りに、so を使用すれば、それは主文章の形となつて、同樣に後續する。

Kaum war er von seiner Reise zurückgekehrt, **so** nahm er seine Geschäfte wieder aufnahm.

(意味は、上掲 sobald als.....の文に、みな同じである。)

更に別の例をあげると:

Sobald als das Urteil vollstreckt war, bereute Elisabeth ihre Härte. (判決が執行されたや否や、エリーザベートは自分の冷酷さを後悔した。)

これを kaum.....so, 又は kaum.....als の文にかき改めると:

Kaum war das Urteil vollstreckt, **so** bereute Elisabeth ihre Härte.
Das Urteil war **kaum** vollstreckt (od. **Kaum** war das Urteil vollstreckt), als Elisabeth ihre Härte bereute.

また文中に於ける kaum を、nicht sobald に書き換へることも出來る。

Das Urteil war **nicht sobald** vollstreckt〔主文〕, **als** Elisabeth ihre Härte bereute〔副文〕.

5) ~~Sooft (als) の用法。~~ Sooft als

Kommen Sie, **sooft** Sie wollen!
(貴君の來たいと思ふたびに、御いでなさい。)
Sooft der Frühling wiederkehrt, ertönen neue Freudenlieder. (春が歸り來り度毎に、新らしい喜びの歌が響く。)
Sooft als du mich besuchen willst, kannst du eines freundlichen Empfanges gewiß sein.
(君が僕を訪問しやうと欲する度毎に、君は歡迎されることを確信してよろしい; gewiß sein は二格を採る。)

また sooft....., sooft と副文の文頭と主文の文頭とを對立せしむる方法もある。

Sooft Maria Stuart neue Freunde gefunden hatte〔副〕, **sooft** versuchte sie ihre Freiheit zu erlangen.
(マリア・シュトゥアルトが、新らしい友人を見つけ出した度毎に、彼女は自分の自由を得やうと試みた。)

6) 比較をあらはす wie と als について。

副文のあらはすものと、主文の示すものとを比較し、兩者が同一程度又は同一性質なる事を表はすには、副文の先頭に wie 又は als, 或は sowie を置き、主文中には、大抵は so, ebenso (丁度それ丈け; just so), 又は also を入れる。この副文を、比較

文章 (Vergleichungssatz [M.]) と云ふ。若し副文が先行するときは、主文はこれらの副詞を以て初まる。又 wie 及 sowie は、性質及び狀態に關し、als は量及び程度に關して、使用される。——副文の wie に對應する so, ebenso 等が、主文にないこともある。

Ich singe, **wie** der Vogel singt.

(私は鳥が歌ふやうに歌ふ；對應するものなし。)

Sie gleichen einander, **wie** ein Ei dem andern gleicht.

(彼等は、一つの卵が、他の卵に似てゐるやうに、互に似て居る；同。)

Machen Sie es, **wie** ich es mache!

(僕のするやうに、おやりなさい！同)

【註】 I. wie をいつも『如く』とのみ譯するのは、いけない。

Ich erzähle es, **wie** ich es gehört habe

(私は私が聞いた通りに、それを物語る。)

Er ist schwer krank, **wie** ich gehört habe.

(彼は私が聞いたところに依ると大病だ。)

【註】 II. 形容詞の次に wie er ist (war 等) と云ふやうな副文をつけたのは、特に注意を要する。

Schwächlich, **wie** er ist, benötigt er eine ganz besondere Pflege. (=So schwächlich, wie er ist, benötigt er.....)

(あの通り彼はひよわだから、特別の世話が必要だ。)

Schlau, **wie** er ist, wird er sich doch schwerlich durchhelfen können. (=Wiewohl er sehr schlau ist, wird er.....).

(彼は大層こすいけれど、困難を切抜けるのは、恐らくむづかしからう。)

der Auftrag

兩者は同じ形式なれど、一は積極的に『云々だから』と云ひ、他は反對的に『云々だけれど』と云ふのだから、注意を要する。

Wie die Mutter das Vorbild der Tochter ist, **so** ist **der** Vater das Vorbild des Sohnes.

(母が娘の原型であるやうに、父は息子の原型である；主文の so が wie に對應する。)

Ein jeder Bote wird den Auftrag **ebenso** gut ausrichten, **als** du selber es tun kannst.

(君自身がそれをなすことが出來るやうに、丁度そのやうに、どの使でも、使命を果すことが出來るであらう；den Auftrag ausrichten=委任を全うする、果す；ebenso は副文の als と對す。)

Sowie man in den Wald ruft, **also** schallt es zurück.

(森へ叫ぶと同じやうにそれは反響する；sowie.....also である。)

【註】 副文の文頭の wie の代りに so が來ることがある。これは次に形容詞又は副詞のあるとき、特にさうである。

此時には副文の文頭の so には弱く發音される。

So sehr 〔副〕 ihr ihn liebt 〔副文〕, **so** sehr haßt er euch 〔主文〕。(君等が彼を愛するほどに、彼は君等を憎んでゐる。)

主文のあらはすものが、副文の示すものと異なるときは、副文の文頭には、als (than) を置くのが通則である。

Er war älter, **als** ich glaubte.

(彼は私が思つたより、年老いてゐる。)

Die Lilien des Feldes sind schöner gekleidet, **als** Salomo in aller seiner Herrlichkeit (es) jemals war.

(野の百合は、ソロモン王がすべての彼の榮華の時に、嘗つてさうであつたよりも、もつと美しく裝つてゐる。)